

竹刀職人のライフヒストリーを基にした
国内竹刀製造業の歴史的変遷に関する研究
—滋賀県を中心として—

力石 真野

環境政策・計画学科において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2011 年度

承認

指導教員

竹刀職人のライフヒストリーを基にした国内竹刀製造業の歴史的変遷に関する研究 ～滋賀県を中心として～

近藤研究室 0812024 力石真野

1. 背景・論点

滋賀県では戦前より、幼い頃に京都に丁稚奉公へ出向き竹刀づくりの技術を学んだ人々を中心に、盛んに竹刀製造が行われていた。そのような人々は旧伊吹町(現在の米原市、以下伊吹地域)に多かった。

しかし、このような事実をまとめた文献は少ない上に、海外製竹刀の普及により県内だけでなく全国的に竹刀職人が数えるほどしかいないこと、今後歴史ある竹刀製造業が人々にあまり知られることなく埋もれてしまうことが考えられる。

そこで本研究では、2人の職人の人生を、ライフヒストリーを用いて分析することによって、竹刀製造業は竹刀がすべての人が使うものでなく、また他の製品への技の転用もできなかったために、結果的に衰退していったしまったということを、時代を追って明らかにする。

2. 研究の目的・意義

本研究では、ヒアリングにより滋賀県在住の2人の竹刀職人・元職人のライフヒストリーや人生年表を作成し、文献調査の結果と合わせて分析することで、滋賀県を中心とした竹刀製造業は、竹刀がすべての人が使う日用品ではなく、工芸品のように残るものではない消耗品であり、他製品への技の転用もできなかったため衰退していったしまったことなどを時代を追って明らかにすることを目的とする。

以上の目的を達成することで、竹刀そのものに関する情報だけでなく、竹刀製造業という産業自体にスポットを当てた他にはない資料として、後世に情報を残すことができるという意義がある。また、現在流通する竹刀の9割は海外製だと言われる現状の中で、剣道愛好家に国産竹刀に目を向けるきっかけ作りにもなると言える。

3. 研究方法

(1)ヒアリング調査

対象者である滋賀県在住の竹刀職人山口吉昭氏、元竹刀職人の池田光信氏にヒアリングを行う。

この2人を対象者に選んだ理由について、山口氏は本研究の中心となる滋賀県で現在唯一竹刀職人をされている方であるため対象者として選定した。また池田氏は滋賀県の中でも特に竹刀製造業が盛んだ伊吹地域(現在の米原市)に竹刀づくりをもたらした人物の子孫であり、伊吹地域最後の職人であるため特に伊吹地域の竹刀づくりについて知る人物として対象者に選定した。

(2)ライフヒストリーの作成

(1)で入手した情報を基に、山口氏と池田氏のライフヒストリーを作成する。

ライフヒストリーのまとめ方は、ヒアリングにお

いてお二人が話して下さった言葉をそのまま会話形式でまとめ、考察を付け加えるという形で行う。

なお、山口氏・池田氏ともに個人名を出すことは了承いただいている。

(3)文献資料調査

剣道に関する文献や、公文書、町史などの資料を用い、ヒアリングから得た情報を併せて

- 剣道の歴史
- 戦争と剣道の関係
- マイナーサブシステム(本業とは別にする、片手間の仕事)としての竹刀製造
- 滋賀県における竹刀製造業の盛衰などについてまとめていく。

(4)分析

(3)の文献資料調査を基に、(2)のライフヒストリーを分析していく。ライフヒストリー分析とは、行為主体者の主観を重視しながら個人の生活史を読み解き、社会構造を読み解くときに用いられる手法である。

なお、結果は2人のライフヒストリーを別々に考察したものと、2人合わせて考察したものの2種類をまとめていく。

本研究の構成と流れを図1にまとめる。

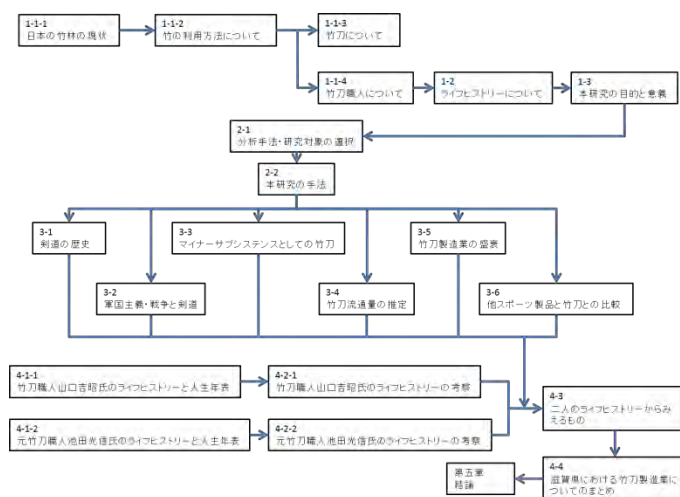


図1 研究の構成と流れ

4. 結果

(1)竹刀に関する情報

1)剣道の歴史

剣道の誕生する上で一番重要なのが、平安時代の日本刀の出現である。剣術は日本刀の出現によって誕生する。その後、戦国時代から一転し平和な江戸時代に入ると、それまで人を殺す技術であった剣術は人を活かす技術とされるようになり技術だけでなく生き方を学ぶところまで広がっていった。

またこの頃、それまで稽古は木刀で行われていたが、ケガが多かったため、木刀に代わって「袋しない」というものが出現した。これは筒袋に割竹を入れたものであり、衝撃が軽減されるため木刀よりも危険が少なかった。江戸時代後期になると、袋しないよりも腰の強い「四つ割り竹刀」が出現した。

2)戦争と剣道¹⁾²⁾

剣道はその武道的性質上、第二次世界大戦前の軍国主義教育に利用されていた。それは単なる心身の鍛錬としてでなく、武士的特性と修業的態度を鍛錬するためであったと考えられる。そのため昭和6(1931)年には剣道は中等学校での必修科目とされ、戦前の竹刀職人は儲かったという。

しかし第二次世界大戦が始まると、徐々に職人も出兵することになり、竹刀づくりも中断せざるをえない状況になった。

そして昭和20(1945)年に日本が敗戦すると、連合国司令官総司令部(以下 GHQ)によって、武道は「Military arts(軍事的な技術)」として禁止された。当然、竹刀は剣道以外使い道がない上に、GHQからの禁止の圧力は強大であったので戦争から帰った職人も復帰できず、他の仕事をして生計を立てた。

その後、武道愛好家の働きかけにより、柔道や空手などの武道の実施が解禁されていったが、剣道はGHQが撤退するまで実施が認められなかった。結局、剣道実施が認められたのは昭和27(1952)年であった。

同じ年に全日本剣道連盟が結成され、現在は166万人に及ぶ老若男女問わず幅広い年齢層の人々が剣道をしている³⁾。またそれは国内に留まらず、世界選手権も開催されている。

3)マイナーサブシステムとしての竹刀製造

マイナーサブシステムとは、本業とは別の、片手間の、ちょっとした仕事のことを指す。

伊吹地域では、山奥の集落で炭焼きをしている人々が、仕事なくなる冬のための現金収入として竹刀づくりをしていた。

その起こりは大正末頃であり、農家の二男、三男坊が京都の竹刀工房に丁稚奉公へ出向き、技術を持ち帰ったことだとされる⁴⁾。

その後、昭和14、15年頃になると竹刀の需要が増大し、木炭の生産より安定した収入源となった⁵⁾。このようにして、伊吹地域では竹刀製造が徐々に本業に取って代わったということがわかる。

4)滋賀県における竹刀製造業の盛衰

昭和27(1952)年に剣道の実施が認められてから剣道人口が増え始め、同時に竹刀の需要も増加した。竹刀職人の仕事も盛んになり、収入も良かった。

しかし、昭和45(1970)年頃に竹の全国的開花枯死が起こった。竹刀不足のため台湾に竹刀づくりの技術が持ち出され、台湾製の安価な竹刀が普及した。

海外製竹刀は材料代が安価だった為製品単価も安くなり、職人手作りの竹刀の需要が減少していった。

滋賀県では知事指定伝統的工芸品に第1次指定の昭和59(1984)年から伊吹地域の工芸品として竹刀が

指定されていたが、職人がいなくなったために平成22(2010)年の第9次指定をもって解除されている⁶⁾。

(2)山口吉昭氏のライフヒストリーと考察

山口氏のライフヒストリーを基に作成した人生年表を表1にまとめる。

表1 山口氏 人生年表

西暦	年齢	できごと	全国の動向
1950	0	滋賀県長浜市に誕生	
1956	6	小学校に入学	
1962	12	小学校を卒業、中学校に入学	
		中学校を卒業、自動車修理工場に就職	
		自動車修理工場を退職、滋賀県彦根市のミシン会社へ再就職	
1965	15	就職	
		ミシン会社を退職、父親の紹介で、名古屋の武道具会社へ再就職	
		武道具会社を退職、父親に長浜に連れ戻され竹刀職人始める	
		安い賃金 → 不満	
1970	20	家出をし、再び名古屋へ向かう	竹の全国的開花枯死
		問屋街で働くようになり、奥さんと出会う	
		結婚することになり、住みやすい環境のため、姉のいる滋賀(近江八幡市)へ	
		段ボール会社に再就職	
1972	22	引き抜きで化粧品のパッケージ会社に転職	
		交通事故 → 入院	不景気
1978	28	再び竹刀づくりを父に習い始める	
		近江八幡で独立	

1)ライフヒストリーの概要

山口氏は昭和25(1950)年、長浜市に生まれた。

父親は戦前丁稚奉公へ出向き、一人前になった後長浜で竹刀づくりを始めた。出兵・敗戦により一時中断することになったが、剣道の実施が認められるようになると竹刀づくりを再開した。山口氏は父親が竹刀を作る姿を見ることはあっても、手伝うことはしていなかった。また、剣道も中学の授業で1回しかしたことがなかった。

中学卒業後は会社勤めをするが、様々な理由で辞めてしまう。結果的に、父親の紹介で入った名古屋の武道具メーカーを辞めた後、長浜へ戻り竹刀づくりを手伝うことになった。しかし賃金が満足にももらえないこともあり名古屋へ家出した。だが、結婚することになり、住みやすさから滋賀に戻った。

新しい会社に勤めたが交通事故に遭い、景気も悪かったので会社を辞め、竹刀職人一本で食べていくことを決意した。

最初は父親のもとで修行し、一人前になってからは一人で竹刀づくりをするようになり、工賃も満足にももらえるようになる。

山口氏は竹刀職人を続ける上で大事なものは情報交換であると言う。情報がなければ、商売をする上でいろいろなことを判断する材料がないということになり、物の流れがわからないため、様々な問題に対処できないそう。このため、山口氏は全日本武道具協同組合に所属している。この組合は、職人だけ

でなく武道具店や材料屋なども加盟しているため、竹刀だけでなく業界全体の情報が入り、物の流れが読みやすいという。山口氏自身、現在職人を続けていられるのは組合に加盟していたことが大きいとしている。

2)考察

ライフヒストリーから、父親が竹刀を作る工程の流れは見ていても、竹刀にはあまり興味を持たなかったことが伺える。つまり、幼い頃の竹刀との関わりが、竹刀職人になりたいと考えることには関係していないと言える。ただ、竹刀づくりの流れは幼い頃から理解していたことや、竹との関わりはあったことは、職人になる過程・弟子入り中などに大きな影響を与えていると考えられる。

剣道もしたことがなく、職人になる過程に剣道経験は関係がないということが分かった。理由は、剣道では特に上下関係を重んじるため、上の立場の人たちと関係しにくくなることを挙げている。上の立場の人たちであっても、自分の製品に対して文句を言われることを避けていると考えられる。同じような理由で、他武道具の職人たちも剣道をしない、していても辞める事が多いようだ。

また、山口氏は全日本武道具組合に加盟していることは、業界の情報が手に入るため大事なことだと話す。竹刀の仕事と直接的に関係ない情報でも、物の流れを推測するのに使えるなど、間接的に関係してくる場合もあるという。組合に入って人脈を広げて、積極的に情報交換をしてきたということは、山口氏が現在も竹刀職人を続けてこられている理由の一つだと言う。

また、ヒアリングから得られた情報で作成した、山口氏の竹刀が消費者に届くまでの流れ図を図2に載せる。

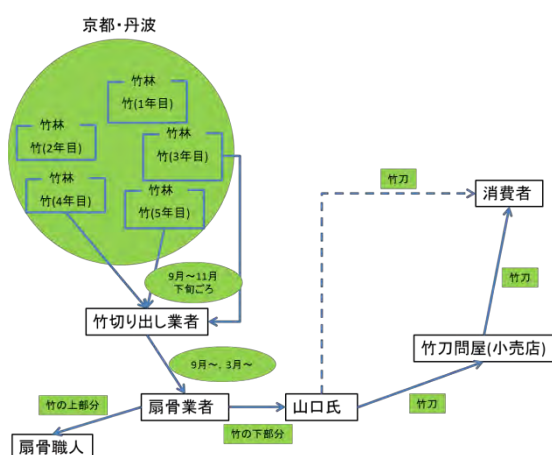


図2 山口氏の竹刀が消費者に届くまでの流れ図

(3)池田光信氏のライフヒストリーと考察

池田氏のライフヒストリーを基に、池田氏の人生年表を表2にまとめる。

表2 池田氏 人生年表

西暦	年齢	できごと	伊吹や全国の動向
1942	0	滋賀県米原市(旧伊吹町)甲賀に誕生	
1945	3		終戦
1948	6	小学校入学	
1952	10		剣道の解禁
1954	12	小学校卒業、中学校入学	
		中学校卒業、父の炭焼きの仕事を手伝い始める	
1957	15		
1960	18		木炭の需要減、エネルギー革命
1964	22	父に習って竹刀職人の仕事を始める	竹の全国的開花枯死
1970	28	結婚	
1978	36	滋賀県知事から県知事より伝統的物産品の技術保存おび承にかる奨励金を贈呈される	台湾竹輸入 + 竹刀づくりの技術輸出
1980	38	父が亡くなり一人で家業を継ぐ	
		自治会の集まりに頻繁に呼び出される ↓ 仕事が思うように進まない	甲賀に原子力送電鉄塔が建つ
1984	42	竹刀職人を辞め、伊吹山の緑化の仕事につく	
1993	51	炭酸カルシウムの製造の仕事に転職	
2003	61	現在の会社(古い家屋の解体や回収業者)に	

1)ライフヒストリーの概要

池田氏は昭和 17(1942)年、坂田郡伊吹町(当時)に生まれた。

父親は戦前、丁稚奉公に出向いた後伊吹地域で竹刀職人をしていたが、出兵・敗戦をきっかけに炭焼きをするようになった。池田氏は中学卒業後、父親の仕事を手伝って家計を支えた。

しかし、1960年代にエネルギー革命が起こり木炭の需要が減少した。その時近所に竹刀職人がおり、それを見て炭焼きを辞めて竹刀職人に転職しようと父親を説得し、竹刀職人への道へ進んだ。

竹刀職人を始めてすぐに竹刀不足によって収入は大幅に増大し、高額貯金もできるようになった。

しかし、1970年頃に起こった竹の全国的な開花枯死によって、海外製竹刀が流通するようになり、需要が減少してしまう。これにより周りの伊吹地域の職人は職人を辞めてしまう人が多かった。池田氏はその中でも最後まで粘って職人を続けていたが、「家で仕事をしているから時間の自由がきく」という理由で自治会の集まりに頻繁に呼び出され思うように仕事が進まず、昭和 59(1984)年に職人を辞めた。

2)考察

池田氏も、剣道はしたこともない、職人になるまで竹刀も触ったことも無いということが分かった。ただ竹自体には関わる機会が多かったようだ。池田氏も職人になる過程で、幼い頃剣道をしたか、竹刀と関わりがあったかは関係がないと言える。

池田氏が竹刀職人へ転換するときが一番の鍵となったのが 1960年代に起きたエネルギー革命である。炭焼きの仕事では、冬場は食べられない、収入も減るから、食べていけている・冬場も収入があるとい

う竹刀職人に転向したいという思いが読み取れる。

また、池田氏のライフヒストリーからは、職人をされていた当時の子供用竹刀の需要の大きさがうかがえる。それは新学期前になると顕著になり、形になっていれば出来は求められないというほどであったようだ。竹刀の需要が高くこと、その需要増大に供給が追いついていなかったということがわかる。

納入先については、池田氏は山口氏の父に紹介してもらったと話してくださった。長浜と伊吹地域の職人同士の交流が深かったことが読み取れる。

また、池田氏が職人を辞めた理由は 2 つあり、1 つは海外製竹刀の普及による収入減、もう 1 つは地域の人に竹刀職人は家で仕事をするから時間の融通が利くと見られており、自治会の集まりに頻繁に呼び出され、思うように仕事が進まなかったことである。仕事の途中で呼び出されて半端仕事を残していくと、その後始末で次の日 1 日潰れてしまうので、需要減も相まってかなりのストレスだったとわかる。

(4)2 人のライフヒストリーからみえるもの

2 人のライフヒストリーの考察を見てみると、いくつかの共通点が見られる。まず、山口氏も池田氏も、幼い頃別段竹刀と関わっていない、また剣道をしたことがないことがある。つまり、職人になるまでの過程に、必ずしも竹刀との関わりや剣道をしているということは必要でないということが言えそうだ。ただ、2 人とも父が職人をしている、幼いころから竹というものを使って何かを作るという経験はしているので、それらは職人になる際に大事な鍵となると考えられる。

また、2 人の父親は両方京都の竹刀工房へ丁稚奉公に行き技術を得たことである。戦前の職人たちは丁稚奉公へ出向き、地元へ帰って職人を始めた。2 人の父親以外にも京都へ丁稚奉公に行っている人々がいるため、当時伊吹地域では丁稚奉公へ行って竹刀職人になるということはよくある例だったということが考えられる。

山口氏が竹刀職人を続けられている理由の一つと考えられる、外部との積極的な情報交換について、池田氏はライフヒストリーにおいて外部との情報交換を積極的にしていたということがうかがえない。山口氏と池田氏、2 人の職人の相違点はこの情報量の違いというところにあったのではないかと考えられる。

(5)滋賀県を中心とした竹刀製造業についてのまとめ ＜滋賀県で竹刀製造が盛んになった理由＞

滋賀県において竹刀製造が盛んになった理由は、農家の二、三男が京都の竹刀工房へ丁稚奉公に行き、故郷へ帰って職人をするというケースが複数あったことだと考えられる。

＜竹の開花枯死と海外製竹刀＞

これは滋賀県に限らず言えるが、昭和 45(1970)年の竹の全国的な開花枯死は竹刀製造業に大きな打撃

を与えていると言える。他の産業でも考えても、これほど材料が一気に生産できなくなった例はないだろう。竹材不足による海外製竹刀の進出によって、古くから続いていた滋賀県における竹刀製造業が衰退の一途をたどったと言えるだろう。

＜滋賀県において竹刀製造がマイナーサブシステムから本業へ変化した理由＞

竹刀づくりをした人たちの本業が炭焼きなどの山仕事であった。伊吹地域は山奥の村であった為、できる仕事に限られており、しかも、冬は積雪量も多く仕事をするのができず収入はゼロになる。そのため、最初は冬の間の収入源として始められた竹刀づくりが、竹刀の需要増大も相まって、本業よりも多くの収入が得られるようになったことから、本業に取って代わったと考えられる。

＜竹刀の製造形態＞

職人の妻など家族が仕事を手伝うということは一般的だったが、一方で竹刀職人の子どもが仕事を手伝うということにはなかった。理由は、伊吹地域の立地にある。学校まで通いづらかったため下宿をして学校に通うのは普通のことだった。

このことから、技術が親から子へ伝わるのが困難で、結果的に後継者不足につながった。

5. 結論

本研究の結論として、国内竹刀製造業は戦争と竹の開花枯死により特殊な経路をたどって変遷してきたと言えるだろう。敗戦による剣道の禁止、竹の全国的な開花枯死の 2 つの出来事は、竹刀製造業をアップダウンの大きい産業となった大きな要因である。

また、山口氏の自分からつながりを作って情報交換をし、自分で物の流れや業界全体の動向を読むことは、ある種商売人の気質であるとも取れる。竹刀職人は、このような商売人氣質が無ければ生き残っていけなかったのではないだろうか。

加えて、竹刀そのものの特殊性が竹刀製造業の衰退の大きな要因になっていると考えられる。この特殊性は、竹刀と何らかの共通点がある製品と比べたときにわかるもので、竹刀は日用品でなく、工芸品化することも無く、ワザの転用が不可能だったということを物語っている。

竹刀職人が少なくなっている現在、この製造技術が絶えてしまうことが憂慮されている。剣道愛好家は職人手作りの竹刀の価値に目を向けるべきである。

6. 参考文献

- 1) 加藤幸蔵：日本における武道教育の史的動向，東海大学紀要．体育学部，7，pp.9-13（1977）
- 2) 大塚忠義：日本剣道の歴史，窓社（1995）
- 3) 全日本剣道連盟 寄稿「まど」
<<http://www.kendo.or.jp/column/250.html>>，2012-01-14
- 4) 滋賀県庁収蔵資料，2011-01-07，公文書
- 5) 伊吹町史編さん委員会：伊吹町史 通史編下（1995）
- 6) 滋賀の伝統的工芸品，2011-10-27，私信

A Study on Historical Changes in Domestic Bamboo Sword Manufacturing Industry Based on Life History of Bamboo Sword Craftsman

Mano CHIKARAISHI

1. Background

In Shiga, Japan, the making of Bamboo Sword (*shinai*) was prosperous. But by the nationwide death of bamboos in about 1970, the making of Bamboo Sword declined now. There were a lot of bamboo sword craftsman in Shiga before the World War II, but there is only one craftsman now. And there is no document about such a fact.

2. Research meaning and purpose

This study can leave the information of bamboo sword craftsman and the historical changes in domestic bamboo sword manufacturing industry in history.

3. Method of this study

First, I carried out hearing survey. Target person are Yoshiaki YAMAGUCHI, a bamboo sword craftsman, and Mitsunobu IKEDA, a former bamboo sword craftsman. Next, I made Life History of craftsmen based on the findings. I read and solved about the making of bamboo sword using Life History.

In addition, I push the literature review in parallel.

4. Conclusion

The following things were understood by this study.

- 1) The bamboos which Mr. Yamaguchi lay in stock to make bamboo swords are for fingers of fans originally. It is interdependent relations because the fingers of a fan can use only a top of bamboo, and a bamboo sword can use only a bottom of bamboo.
- 2) Yamaguchi and Ikeda didn't do kendo in their childhood, and they also hadn't touched bamboo sword until they became craftsmen. From this, it may be said that a relation and the kendo experience with the bamboo sword are not necessarily necessary for a process before becoming a bamboo sword craftsman.
- 3) Both Mr. Yamaguchi and Mr. Ikeda were helped with the making of bamboo swords, so it is household manual industry which needs cooperation of family. However, because there was not a school in the area where Mr. Ikeda lived, children left the village early. So it was difficult for the craftsmen to convey a technique in

history.

- 4) The bamboo sword manufacturing industry in Shiga began as work of the slack seasons for farmers, and became a main profession with increasing of the demand for bamboo sword gradually. In addition, it was completely stopped producing by prohibition of the kendo by the defeat of the World War II, and developed with the removal of a ban of kendo again. However, the domestic bamboo sword manufacturing industry traced the course of the decline with lack of bamboo by nationwide death of bamboo generated in about 1970. It may be said that ups and downs was intense as industry collectively.
- 5) The domestic bamboo sword manufacturing industry declined because the bamboo sword was not the daily necessities which all people used, and could not substitute it as a thing to use for a except kendo because it was not able to make it an industrial art object like a Japanese sword.

目次

第一章	序論	1
1-1	本研究の背景	1
1-1-1	日本の竹林の現状	1
1-1-2	竹の利用方法について	3
1-1-3	竹刀について	5
1-1-4	竹刀職人について	14
1-2	ライフヒストリーについて	16
1-3	本研究の目的と意義	16
1-3-1	研究の目的	16
1-3-2	研究の意義	17
1-4	本研究の構成	17
	参考文献	19
第二章	本研究の手法・研究対象	21
2-1	分析手法・研究対象の選択	21
2-1-1	ライフヒストリー分析について	21
2-1-2	ライフヒストリーを用いた先行研究	21
2-2	本研究の手法・研究対象	22
2-2-1	文献資料調査の手法	22
2-2-2	ライフヒストリーの手法	24
	(1)研究方法の選定	24
	(2)対象者について	25
	(3)ヒアリングについて	26
	(4)ライフヒストリーのまとめ方について	28
	参考文献	29
第三章	竹刀に関する情報	31
3-1	剣道の歴史	31
3-1-1	竹刀の誕生	31
3-1-2	剣道の起源	31
3-2	軍国主義・戦争と剣道	32
3-2-1	第二次世界大戦前の剣道	32
3-2-2	第二次世界大戦中の剣道	33
3-2-3	第二次世界大戦後の剣道	33
	(1)終戦直後	33

	(2)現代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	36
3-2-4	戦争と剣道についてのまとめ・・・・・・・・	37
3-3	マイナーサブシステムとしての竹刀・・・・・・・・	38
3-3-1	マイナーサブシステムとは・・・・・・・・	38
3-3-2	滋賀県伊吹地域における竹刀製造の起こり・・・・・・・・	38
3-3-3	滋賀県伊吹地域における竹刀製造の転換期・・・・・・・・	43
3-3-4	竹刀製造業とその他のマイナーサブシステムの例との比較・・・・	44
3-4	竹刀の流通量の推定・・・・・・・・	46
3-4-1	海外製竹刀が入ってくるまでの竹刀流通量について・・・・・・・・	46
3-4-2	現在の竹刀流通量の推定について・・・・・・・・	46
3-4-3	考察・・・・・・・・	47
3-5	竹刀製造業の盛衰・・・・・・・・	48
3-5-1	滋賀県伊吹地域における竹刀製造業の発展・・・・・・・・	48
3-5-2	滋賀県伊吹地域における竹刀製造業の衰退・・・・・・・・	51
3-6	竹刀と他製品との比較・・・・・・・・	52
3-6-1	他スポーツ製品と竹刀の比較・・・・・・・・	52
3-6-2	日用品から工芸品になった製品との比較・・・・・・・・	54
	参考文献・・・・・・・・	56
第四章	ライフヒストリーの考察と滋賀県における竹刀製造業のまとめ・・・・	59
4-1	竹刀職人と元竹刀職人のライフヒストリーと人生年表・・・・・・・・	59
4-1-1	竹刀職人山口吉昭氏のライフヒストリーと人生年表・・・・・・・・	59
4-1-2	元竹刀職人池田光信氏のライフヒストリーと人生年表・・・・・・・・	88
4-2	ライフヒストリーの考察・・・・・・・・	111
4-2-1	竹刀職人山口吉昭氏のライフヒストリーの考察・・・・・・・・	111
4-2-2	元竹刀職人池田光信氏のライフヒストリーの考察・・・・・・・・	114
4-3	二人のライフヒストリーからみえるもの・・・・・・・・	116
4-4	滋賀県における竹刀製造業についてのまとめ・・・・・・・・	117
	参考文献・・・・・・・・	119
第五章	結論・・・・・・・・	121
5-1	各章のまとめ・・・・・・・・	121
5-2	本研究のまとめ・・・・・・・・	121
5-2-1	国内竹刀製造業の変遷について・・・・・・・・	121
5-2-2	山口氏の職人継続要因・・・・・・・・	122
5-2-3	竹刀の特殊性による竹刀製造業の衰退・・・・・・・・	122

5-2-4	剣道愛好家へ向けて	123
5-3	本研究の課題	123

図表目次

第一章

図 1-1	放置された竹林(香川県)・・・・・・・・・・・・・・・・	1
図 1-2	周辺植生に拡大していく竹林(鳥取県)・・・・・・・・	2
図 1-3	竹製品の例(茶せん)・・・・・・・・・・・・・・・・	4
図 1-4	竹製品の例(竹箒)・・・・・・・・・・・・・・・・	4
図 1-5	竹刀の各部名称・・・・・・・・・・・・・・・・	6
図 1-6	竹刀(組み立て後)・・・・・・・・・・・・・・・・	7
図 1-7	1. で乾燥した竹を割る作業・・・・・・・・	9
図 1-8	2. そば取り・・・・・・・・	9
図 1-9	3. 矯めの前に炭火であぶる作業(ガス火の場合もあり)・・	10
図 1-10	3. 矯め・・・・・・・・	10
図 1-11	5. 面取り・・・・・・・・	11
図 1-12	6. 荒カンナ・・・・・・・・	11
図 1-13	7. 節おろし・・・・・・・・	12
図 1-14	9. 磨き・・・・・・・・	12
図 1-15	11. もっといかけ・・・・・・・・	13
図 1-16	12. ちきり打ち・・・・・・・・	13
図 1-17	15. 柄削り・・・・・・・・	14
図 1-18	本研究の構成及び研究の流れ・・・・・・・・	18

第二章

図 2-1	山口吉昭氏(2010.10.17 筆者撮影)・・・・・・・・	26
図 2-2	池田光信氏(2011.03.20 筆者撮影)・・・・・・・・	26
図 2-3	池田氏ヒアリングの様子(2011.10.26 栗谷瞳子撮影)・・	28

第三章

図 3-1	滋賀県旧伊吹町(旧伊吹村)地図・・・・・・・・	39
図 3-2	甲賀・曲谷・甲津原拡大図・・・・・・・・	40
図 3-3	ポジショニングマップ(価格の高低／生活に根付いているかどうか)・	45
図 3-4	池田氏の領収書写真例(筆者撮影)・・・・・・・・	50
図 3-5	ポジショニングマップ(価格帯の幅の広さ／値段にばらつきがあるかないか)・	52
図 3-6	野球用バットの価格帯と製品分布・・・・・・・・	53
図 3-7	竹刀の価格帯と製品分布・・・・・・・・	54
図 3-8	ポジショニングマップ(工芸品化されているか／生活に根付いている	

か)	55
----	----

第四章

図 4-1	柄をやすりで削って整える山口氏	72
図 4-2	柄頭を削り、竹刀を仕上げる山口氏	78
図 4-3	竹の曲りを整える「矯め」の前に竹をバーナーであぶる	79
図 4-4	柄(つか)を削る山口氏	85
図 4-5	「矯め」をする山口氏	86
図 4-6	池田氏が紹介された町内広報(職人を辞めてから取材された)	96
図 4-7	小学生に竹刀づくりの講義をする池田氏	98
図 4-8	小学生に「矯め」を見せる池田氏	99
図 4-9	竹を削る池田氏	101
図 4-10	竹をあぶるための炭火(現在はバーナーだが、昔は炭火だった)	102
図 4-11	池田氏が使用していたカンナ	103
図 4-12	池田氏の竹刀の銘「行光」	108
図 4-13	池田氏が作成した竹刀	110
図 4-14	山口氏の竹刀が消費者へ届くまでの流れ図	113
図 4-15	池田家の家系図(竹刀職人だった人のみ名前を明記)	115

第一章

表 1-1	竹の特性とその利用方法	3
表 1-2	竹刀づくりの全工程	8
表 1-3	関西竹刀製造組合員名簿(個人情報に関するものは削除及びイニシャル化)	15

第二章

表 2-1	三章に使用する文献一覧表	23
表 2-2	山口氏へのヒアリング日時・時間	27
表 2-3	池田氏へのヒアリング日時・時間	27

第三章

表 3-1	戦後剣道の禁止と復活の経過年表	34
表 3-2	平成 15(2003)～22(2010)年の有段者数	37
表 3-3	旧伊吹町甲賀 略年表	41
表 3-4	滋賀県坂田郡伊吹町(当時)、米原市伊吹町の人口推移	42

表 3-5	池田氏の竹材購入年月日・金額・本数一覧・・・・・・・・・・	49
表 3-6	年ごとの竹材購入金額・本数(年の記載がある分のみ)・・・・・・・・	50

第四章

表 4-1	山口氏人生年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・	87
表 4-2	池田氏人生年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・	109

第一章 序論

1-1 本研究の背景

1-1-1 日本の竹林の現状

古来より、日本においては人々の生活のすぐそばに竹林が存在し、タケノコ栽培や竹材生産、生活用品や農業用品への利用がなされてきた。代表的なものには籠や竹箒、茶せんなどがあるが、竹の詳しい利用方法については、1-1-2 で述べる。そして竹林では、竹材の利用頻度が高いため竹林内で定期的に竹の伐採が行われていた¹⁾。

しかし、1980 年代ごろのプラスチックを代表とする代替材料の普及による竹材生産の減少や、1990 年代に海外からのタケノコ製品の急増したことによる国内のタケノコ生産の急減により、竹林が管理放棄されるようになった²⁾。その一例を図 1-1 に示す。



図 1-1 放置された竹林(香川県)³⁾

このように管理放棄された竹林では、枯死竹の割合が増加し、それらが倒伏・斜上することによって、人が入ることもままならないような状況になる。また、竹の種類によっては、図 1-2 のように他の植生に侵入・拡大していく。

このような状況を打開するため、全国各地で竹炭や竹酢液を作ったり、竹材を使ったイベントを開いたりするなど、様々な対策が講じられている。しかし、いまだ管理放棄され

た竹林が減らないという現状がある．



図 1-2 周辺植生に拡大していく竹林(鳥取県)⁴⁾

1-1-2 竹の利用方法について

竹の利用方法は様々である。その一部を特性ごとに分けて表 1-1 にまとめる。また、竹製品の例の写真を図 1-3、図 1-4 に載せる。なお、表 1-1 中の A は規則正しく並んだ節を利用するものを示している。

表 1-1 竹の特性とその利用方法⁵⁾

	特性	利用方法
A	丸竹のままでその特性を利用	つえ，弓矢，物干しざおなど
	空間と節を利用し，容器のように利用したもの	水入れ，竹ます，花筒など
	中空を楽器に利用したもの	尺八，横笛，笙など
B	弾力性と彎曲性を利用したもの	釣竿，うちわ・扇子の骨，竹刀，熊手，ざる・かごなど
C	受難にして強靱である特性を利用したもの	竹縄など
D	伸縮が少なくて狂いのない特性を利用したもの	ものさし，計算尺
E	表面の美観性と節の雅致性を利用したもの	ペン軸，掛物軸，花筒，額縁，床柱・天井・屋根・腰板，垣根，花かご・盛るかごなど工芸品など
F	(竹材の副産物を利用するもの)竹の枝	竹ぼうき，竹の穂垣
	(竹材の副産物を利用するもの)竹の皮	盛るかご，買い物かご・ハンドバッグなど
	(竹材の副産物を利用するもの)笹の葉	笹団子，笹あめ，笹寿司
	(竹材の副産物を利用するもの)地下茎	ステッキ，傘の柄，乗馬用鞭など
G	成長が早く豊富であること	竹パルプ
H	割剥ぎ性を利用するもの	串，竹箸，茶せん，うちわ・扇子・傘の骨，そろばん・鳥かご・提灯のひご，竹べら，竹刀，熊手など



図 1-3 竹製品の例(茶せん)⁶⁾



図 1-4 竹製品の例(竹箒)⁷⁾

表 1-1 を見ると、竹の特性は様々あり、それぞれの特性が多様なものへ利用されていることがわかる。また逆に、扇子の骨や熊手、竹刀など、一つの製品が複数の竹の特性を利用しているということもわかる。

1-1-3 竹刀について

一方、剣道に使われる竹刀は、図 1-5 にある鐙(つば)、鐙止め(つばどめ)、弦(つる)、小物(こもの)、契(ちぎり、ちきりと呼ぶことも)、先革(さきがわ)、先芯(さきしん)、中結(なかゆい)、柄革(つかがわ)の付属品を除けばすべて竹で作られ、組み立てられると図 1-6 のようになる。

その歴史は長く、図 1-5、図 1-6 のような形の竹刀が出来上がったのは江戸時代中ごろである⁸⁾。

そして、近年主流になっている機械で作られた竹刀が登場するまではすべて手作りで作られていた。使用される竹は、柔らかく扱いやすいマダケであり、場合によってはケイチクという別の種類の竹やカーボン材料などの化学物質を使用しているものもある⁹⁾。

また、剣道という競技の精神面にも触れて竹刀の性質について紹介しておく。雑誌『剣道日本』の 2010 年 9 月号に、元慶應義塾大学塾長で、全日本学生剣道連盟会長、文部科学省中央教育審議会会長などの要職を務められている鳥居泰彦先生の言葉が載せられている¹⁰⁾。以下に引用を載せる。

「勝ち負けだけでは駄目だ。今の武道の墮落は恐ろしい。教育や産業も大事だが、武道を通し、培われる日本の精神の大切さを君たちにわかってもらいたい。(中略)しかし、武道がいろいろ国際化の波にのまれてしまっている現実もある。国際ルールに惑わされず、自分で満足 of いく一本を求めて稽古をすることが大事。」

「新渡戸稲造は明治 33 年に『武士道』を英語で著しました。その内容をいくつか述べます。初めはジャスティス。正義です。正しいことを守るのが武士の道。二番目は勇氣。勇氣には二種類あり、恐ろしいことをあえて行う勇氣、絶えるべきことに耐える勇氣です。武道でもそれは必要なことです。三番目は惻隱の情、あるいは仁、これは相手を思いやることです。四番目は礼儀。心からの礼儀です。碁盤目は武士に二言なし。嘘をつかないということ。誠実であれということです。六番目は名誉を大切にすること。武士は少年時代から、誇りや名誉を心にたたき込まれたといいます。七番目は品性。武士の教育でもっとも重んじられたものです。八番目はセルフコントロール。克己心です。これらを大切にしてきたのが日本の武士道。この日本の精神があったから、外国の人たちも日本人を信頼しました。その精神が武道がそれを培ってきたのです。そして最後に新渡戸さんはこう書いている。『これらの精神は、時代とともに消えていくだろう。しかし日本人の心の中に残っていく

ことを期待したい』と、110 年前に書いた著者は、現代のモラルの崩壊を予言していたの
かも知れません。」

この言葉を見てもわかるように、剣道は他のスポーツとは違い、勝ち負けだけではない
という精神を持っており、また相手を重んじるということが大事にされている。それに関
係するように、竹刀はただの道具として扱われるのではない。たとえば、剣道を始めて最
初に習うのは礼の仕方だということが多いし、試合をするときは最初と最後に必ず礼をす
る。そして、試合に勝ってガッツポーズをするなど、相手を軽んじる行為は禁止されてい
る。また、竹刀を跨いだり、膝をつかずに竹刀を拾ったりすることは禁じられている。

以上から、竹刀というのは他のスポーツで使用する道具とは違う扱われ方をするとい
うことが言える。

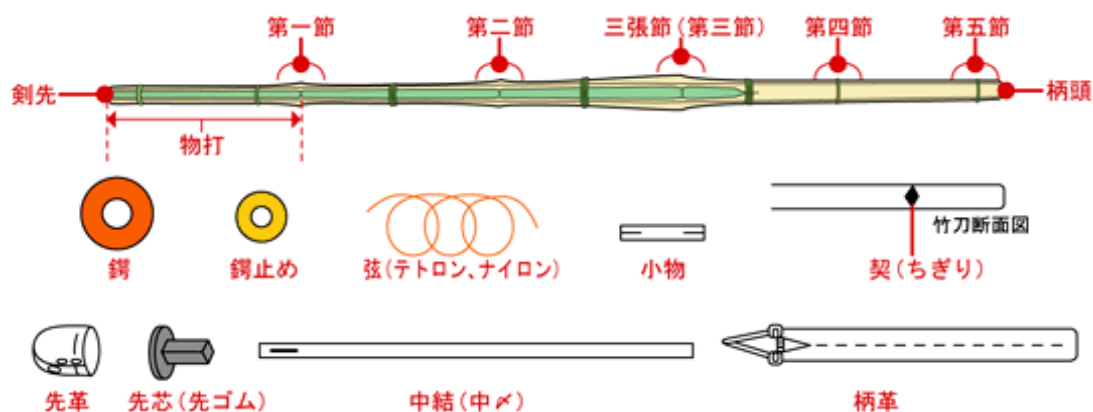


図 1-5 竹刀の各部名称¹¹⁾



図 1-6 竹刀(組み立て後)¹²⁾

次に、竹刀づくりの流れなどについて述べていく。

表 1-2 に手作りの場合の竹刀づくりの工程をまとめ、図 1-5～図 1-17 に一部工程の写真を載せる。なお、図 1-9、図 1-10 は伊吹山文化資料館に収蔵されている映像資料で、後に述べる本研究の対象者である池田光信氏が小学生に竹刀づくりの説明をしているものである。

表 1-2 のように、かなり多くの工程を要する竹刀づくりは伝統的価値も認められており、特に滋賀県では知事指定伝統的工芸品に選ばれていた¹³⁾。竹刀を伝統的工芸品に指定している都道府県は、滋賀県のみである。この理由は、大正末頃から滋賀県の農家に生まれた子が京都の竹刀業者に弟子入りをして、一人前になった後故郷へ竹刀づくりの技術を持ち帰った人が複数いたことであると考えられる¹⁴⁾。

かつてはすべて表 1-2 の工程で、すべて手作りで作られていたが、昭和 45(1970)年頃に起きた竹の全国的な開花枯死によって、材料不足に陥ったことにより、販売業者が海外(最初は台湾)に竹刀を作らせるようになった¹⁵⁾。台湾製竹刀は販売価格が安かったことから、国産竹刀は打撃を受け需要がだんだんと右肩下がりになっていき¹⁶⁾、現在流通している竹刀の 9 割が海外製竹刀である。結果、全国的に竹刀職人の数は激減してしまい、伝統ある製作技術が絶えることが憂慮されている¹⁷⁾。

表 1-2 竹刀づくりの全工程 ¹⁸⁾

番号	工程名	内容
1	乾燥	天日でほす(皮を上に向けて)輸入材は不要
2	そば取り	両面を削って竹刀に必要な巾をととのえる.
3	矯め	炭の火の上にあぶる
4	こそば	カンナで面をつける
5	面取り(中削り)	最初は皮の方から面を取り, 中削り(内側を削る)
6	荒カンナ	中削りの後, カンナをかける.
7	節おろし	やすりで節を削る
8	こそげ	面取りの角があるのを丸みをつける
9	磨き	ペーパーで磨く(昔は, さめ皮を用いた)
10	仕上げ	中削りを同じようにして仕上げを念入りに
11	もつといかけ	糸で四本を仕上げられて竹をくくる(昔はこよりで)
12	ちきり打ち	1cm角のトタンをつか先に打ち込む
13	長さそろえ	規定の長さに竹刀を切りそろえる
14	柄ぐりつけ	鐔の入るところを削る
15	柄削り	やすりで節のところを削る
16	こそげ	こそげで竹刀を削り磨く
17	磨き	前工程と同じ(㉑)
18	もつといかけ	前工程と同じ(㉒)
19	面取り仕上げ	柄先と先をやすりで面を取る



図 1-7 乾燥した竹を割る作業¹⁹⁾



図 1-8 2. そば取り²⁰⁾



図 1-9 3. 矯めの前に炭火であぶる作業(ガス火の場合もあり)²⁰⁾



図 1-10 3. 矯め²¹⁾



図 1-11 5. 面取り ²²⁾



図 1-12 6. 荒カンナ ²³⁾



図 1-13 7. 節おろし²⁴⁾



図 1-14 9. 磨き²⁵⁾



図 1-15 11. もっといかけ²⁶⁾



図 1-16 12. ちきり打ち²⁷⁾



図 1-17 15. 柄削り ²⁸⁾

1-1-4 竹刀職人について

1-1-3 で紹介したように、竹刀は機械製竹刀が登場するまではすべて手作りで作られており、当然その技術を持つ職人が存在していた。

竹刀の起源については諸説あるため、竹刀づくりの技術がどこから広まっていったのかは定かではないが、京都・九州・新潟(佐渡島)・東京、そして滋賀など、全国各地に職人が存在していた。

1-1-3 で述べたように、滋賀県では京都の竹刀工房に丁稚奉公へ出向き、故郷に帰ってから稼業として竹刀製造をしていた人々がたくさんいた。そのような職人は湖北に多く、「関西竹刀製造組合」というものを作り、組合旅行に行くなど交流を深めていた。表 1-3 は、山口氏が保管していた関西竹刀製造組員名簿をまとめたものである。この名簿がいつのものであるかは不明であるが、原本に載っていた伊吹町(当時)在住の方の電話番号が有線電話番号であった。伊吹町(当時)に有線が完成したのが昭和 40(1965)年である ²⁹⁾ので、少なくともそれ以降のものであるということがわかる。

表 1-3 関西竹刀製造組員名簿(個人情報に関するものは削除及びイニシャル化)³⁰⁾

氏名	住所
GM	滋賀県坂田郡伊吹町春照
MY	滋賀県坂田郡伊吹町甲津原
TY	滋賀県坂田郡伊吹町甲津原
HK	滋賀県坂田郡伊吹町甲津原
MA	滋賀県坂田郡伊吹町曲谷
池田光信	滋賀県坂田郡伊吹町甲賀
KT	滋賀県坂田郡伊吹町甲賀
JA	滋賀県坂田郡伊吹町甲賀
山口政三	滋賀県長浜市三ツ矢町
HK	滋賀県長浜市石田町
TY	滋賀県長浜市一ノ宮町
FK	京都府京都市右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町
MM	京都府京都市右京区嵯峨造路町
SK	京都府京都市東山区一ノ橋町
MT	京都府京都市東山区塩小路通り大和大路
YT	静岡県磐田郡豊田町 ^{※注}

(※注：静岡県の YT 氏はもともと長浜にいたが、静岡県に移った為に関西在住ではないが加盟していた)

しかし、1970 年代の日本全国の竹材の開花枯死による海外製竹刀の普及によって職人手作りの竹刀が徐々に売れなくなっていき、現在では数えるほどしか残っていない。加えて、表 1-3 の名簿に載っている方も、ご存命なのは 2, 3 人と、滋賀県の竹刀製造業の様子を知る人が少なくなっている。

さらに竹刀職人を扱った研究は、数馬(2000)³¹⁾が竹刀についての研究を行った際、新潟・佐渡島の名竹刀師と言われた本間鉄心について紹介している以外に見当たらない。

このような現状を踏まえると、竹刀職人について研究をすることは非常に価値のあることだろう。

しかし、盛んに竹刀製造が行われていた地域で職人をしていた人たちが少なくなっていること、先行研究が無いに近いということを考えると、竹刀職人を研究対象として扱う場合、有効な手法が限られてくる。

1-2 ライフヒストリーについて

1-1-4 で述べたように、滋賀県における竹刀製造業を研究テーマに設定する場合、その様子を知る人々が少ないという現状があるため、アンケート調査のような多数の母数を必要とする手法は本研究には適さないと考えられる。

また、竹刀製造業について書かれた先行研究が少ないということ、竹刀職人自体も少ないことを考えると、当事者である竹刀職人から直接話を聞き、文献などからの裏付けを合わせて考察していく方法が有効であると考えられる。

そのような研究方法として、「ライフヒストリー分析」が挙げられる。

桜井(2003)によると、「ライフヒストリー研究法などと呼ばれる研究方法論は、まず何よりも変動する社会構造内の個人に照準している。これまで社会学的分析でいうと、人間は行為や役割といった構造の特定の要素に還元されて論じられてきたが、個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点をあわせて全体的(ホーリスティック)に、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとするものである。社会科学が「生きられた現実」から乖離してしまった反省から、主体の経験の主観的な意味やアイデンティティなどを重視するところに、なによりも大きな特徴がある。個人的なものを社会的なものに関連づけて解釈する手法にゆたかなストックと可能性を提供できるのが、これらの方法論なのである」³²⁾とある。ある特定の個人の人生の話を明らかにすることから、社会構造をあぶりだしていくという研究手法の一つである。

本研究でライフヒストリーを用いる理由として、第一に、先にも述べた本研究で取扱う竹刀職人に関する先行研究がほとんどなされていないということがある。先行研究がされていないと参考にできるデータも少ないため、当時を知る職人本人に話を聞き、その情報を使って少ない文献情報を補足することが有効であろう。

また、竹刀の材料となる竹や竹林と竹刀との関係性や、地域と職人の関係性など、様々な関係性に着目する。

以上の理由を踏まえ、ライフヒストリー分析を本研究の対象とする。

1-3 本研究の目的と意義

1-3-1 研究の目的

本研究の目的を以下に示す。

1. 研究の対象者である竹刀職人山口吉昭氏、元竹刀職人池田光信氏にヒアリング調査を行い、得られた情報を基に両氏のライフヒストリーを作成する。
2. 竹刀や剣道に関する文献、それら文献から得られた情報の裏付けや補足のためのその

他の文献を使用し、ヒアリングから得られた情報も合わせて、竹刀や剣道に関する基礎知識をまとめる。

3. 2 で得られた基礎情報を踏まえ、ライフヒストリーを読み解いて分析を行い、滋賀県を中心とする国内竹刀製造業は、竹刀がすべての人が使う日用品ではなく、工芸品のように残るものではない消耗品であり、ワザの転用もできなかったため衰退していったしまったことを、時代を追って明らかにする。

1-3-2 研究の意義

本研究の意義は、竹刀そのものに関する情報だけでなく、竹刀製造業という産業自体にスポットを当てた他にはない資料として、後世に情報を残すことができるということである。

また、竹刀流通量の9割が海外製という現状の中で、剣道をする人が国産竹刀に目を向けるきっかけづくりをすることもできると考えられる。

1-4 本研究の構成

本研究の構成を図 1-18 に示す。

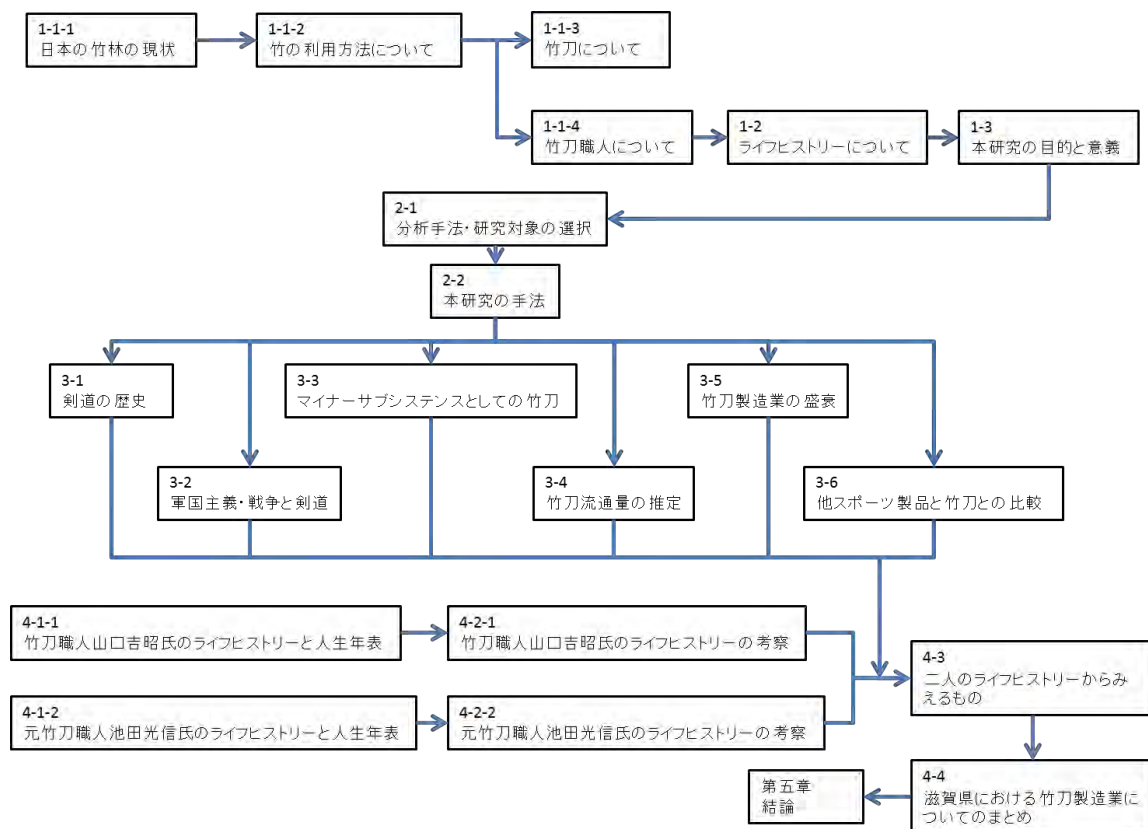


図 1-18 本研究の構成及び研究の流れ

参考文献

- 1) 鳥居厚志：周辺二次林に侵入拡大する存在としての竹林，日本緑化工学会誌，28(3)，pp.412-416 (2003)
- 2) 柴田昌三：竹資源の新たな有効利用のための竹林施業，森林科学，58，pp.15-19 (2010)
- 3) 香川県環境学習プログラム集 竹林を手入れしよう
<http://www.pref.kagawa.jp/kankyo/gakushu/program_7/program_7.pdf>，2011-11-30
- 4) 鳥取市公式ウェブサイト 放置竹林の整備と拡大・侵入防止対策について
<<http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1190794069342/files/tikurin.pdf>>，2011-11-30
- 5) 佐藤庄五郎：図説竹工芸 竹から竹工芸まで，pp.1-3，共立出版株式会社 (2010)
- 6) 風竹三光堂 茶せん<<http://lunagate.ddo.jp/take-roman/seihin/chasen.html>>，2012-01-10
- 7) 風竹三光堂 竹箒<<http://lunagate.ddo.jp/take-roman/seihin/houki.html>>，2012-01-10
- 8) 大塚忠義：日本剣道の歴史，p.6，窓社 (1995)
- 9) 有田良幸：竹刀と剣道具と竹，富士竹類植物園報告，44，pp.98-103 (2000)
- 10) 剣道日本，35(9)，pp.120-121 (2010)
- 11) 剣道防具工房「源」 竹刀の各部名称
<http://kendokyoto.com/shop_item/kendo_shinai.html>，2011-12-08
- 12) のうほう！【初めて】竹刀の選び方<<http://www.know-how.jp/martialarts/628/>>，2012-01-13
- 13) 滋賀県ホームページ 滋賀県の伝統的工芸品について
<<http://www.pref.shiga.jp/kakuka/f/chushoukigyo/kougeihin/kougeihin.html>>，2011-11-30
- 14) 滋賀県庁収蔵資料，2011-01-07，公文書
- 15) 数馬浅治：竹刀について，富士竹類植物園報告，44，p.109 (2000)
- 16) 滋賀県庁収蔵資料，前掲書
- 17) 数馬浅治：p.110，前掲書
- 18) 滋賀県庁収蔵資料，前掲書
- 19) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>，2012-01-17
- 20) 伊吹山文化資料館収蔵資料，2011-05-16，私信
- 21) 伊吹山文化資料館収蔵資料，前掲資料
- 22) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>，2012-01-17
- 23) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>，2012-01-17
- 24) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>，2012-01-17
- 25) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>，2012-01-17

- 26) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>, 2012-01-17
- 27) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>, 2012-01-17
- 28) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで
<http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601>, 2012-01-17
- 29) 米原市役所伊吹庁舎, 2012-01-26, 電話
- 30) 山口吉昭, 2011-05-21, 私信
- 31) 数馬浅治 : pp.110-111, 前掲書
- 32) 桜井厚 : インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方, p.14, せりか書房 (2003)

第二章 本研究の手法・研究対象

2-1 分析手法・研究対象の選択

2-1-1 ライフヒストリー分析について¹⁾

ライフヒストリー分析とは、個人の生活構造に焦点を当てた分析方法の一種であり、一生の一時期、一生、世代を超えた生きざまをも対象とし、そこで展開される生活構造の変遷や、世代間の文化の継承、断絶などを長いタイムスパンで探究していくものである。先行研究によって立てられたとりあえずの仮説(作業仮説)を、対象者へのヒアリングを通して得られた新たな情報を基に補足・立証して一步一步理論に近づけていく。

ライフヒストリー作成の手順は、対象者との対話を録音し、それを文字化(トランスクリプション)した後、逐語記録の重複や不要部分を削除したり、時間軸に沿って順序を入れ替えたりして編集を行うという流れである。

ライフヒストリー分析の大きな利点として挙げられるのは、マイノリティ・グループの声をすくい上げることができるということである。従って、異文化理解のような現代社会の側面に切り込むテーマに向いている。ライフヒストリーを研究としていち早く取り入れたアメリカでは、逸脱研究(非行少年やアルコール依存症、殺人者など)を対象としていた。

また、経験科学は事実に依拠して仮説の索出と検出を行うが、その「事実」には実証主義的な事実と解釈学的な事実があり、経験科学の一方法としてのライフヒストリー法は、これら両方の事実をとらえることができる。

上に述べたように、個人の人生に限りなく近づく手法であることから、特に注意しておくべき点が倫理問題である。たとえば、トランスクリプトした文章は、公表する前に一度本人にフィードバックして、削除や加筆、修正等自由に意見を述べてもらい、本人の納得の上公表しなければならない。

2-1-2 ライフヒストリーを用いた先行研究

ライフヒストリーを用いた先行研究を紹介していく。

落合(2004)²⁾は、九州にある海村で出産率が異様に高いなど、人口増加に特徴のある町がどのような婚姻体系であったかを 100 歳の女性にヒアリングを行うことによって明らかにしている。

中野(1995)³⁾は、水島工業地帯の石油化学コンビナートに隣接する田舎町に住む、明治生まれのおばあさんを対象者として、対象者が生まれた時代から 1970 年代までの時代の様子を語ってもらうという形式で、水島工業地帯の公害に関する隣接地域住民の考え方につい

て明らかにしている。

上の落合と中野の研究は、1 人の対象者にじっくりとヒアリング調査を行い、分析を進めていっている。本研究も対象にできる人が少ないので、まとめ方やアプローチの面が参考にできる。

塚田(1996)⁴⁾は、男性高校教師に聞き取り調査を行い、それぞれのライフヒストリーに基づいて被調査者を 4 つの異なったキャリア形成のタイプに分けている。ただし、考察で一人の教師が必ずしもずっと同じタイプであるということはないと記している。

塚田の研究は比較的大人数を対象者としており、簡単なライフヒストリーからそれぞれをタイプ分けし、4 つのカテゴリーに分けている。カテゴリー化することにより、上のような結論に至っている。

菅宮・岩佐(1995)⁵⁾は、ライフヒストリー法が近い過去の庶民の暮らしの具体的な姿を明らかにするのに適しているとした上で、あまり取り上げられないことのない菓子職人の暮らしについてアプローチしている。対象者の話から、菓子職人の修業はほかの職人業とは違い、自分の持っている技術を売り物にして広い地域を巡り歩くという特徴があるということを示している。

菅宮・岩佐の研究は、本研究と同じく対象者が職人であり、なおかつ戦争に関する話が盛り込まれている。本研究と近い点、参考にできる部分も多いだろう。

2-2 本研究の手法・研究対象

2-2-1 文献資料調査の手法

第三章では、第四章のライフヒストリーをより深く読み進めるための材料として、文献等の資料から得られた情報、またヒアリングなどによって入手した情報を基に、竹刀や剣道に関する基礎知識と情報から出した考察をまとめていく。

使用する文献などは、表 2-1 にまとめる。

表 2-1 三章に使用する文献一覧表

番号	著者	題名	年	内容
1	伊吹町史 編さん委 員会	伊吹町史	1995	滋賀県の旧伊吹町の町史。町内の歴史や産業について詳細に記述。
2		滋賀県庁収蔵公文書		昭和 59 年に旧伊吹町から滋賀県知事に提出された知事指定伝統的工芸品の指定に関する意見書。同町甲賀を中心とする竹刀工芸について詳細に記入されている。
3	大塚忠義	日本剣道の歴史	1995	日本における剣道の成り立ち・変遷などについて詳細に書かれた文献
4	加藤幸蔵	日本における武道教育の 史的動向	1977	軍隊と武道の関係について、時間を追って記述した文献
5	野上雅代	炭焼きについて	1991	炭焼きやその変遷についての文献
6	松井健	マイナーサブシステム 論	2000	本業とは別に、片手間としてする仕事(マイナーサブシステム)についての文献
7	内村悦三	タケを竹として活用する 時世に思う	2007	タケ(竹)の文献
8	相原基 大, 秋庭 太	産業集積における技術イ ノベーションの実現過程 —鯖江眼鏡産地のフィ ールド調査を通した予備 的考察—	2008	眼鏡枠製造量日本一の鯖江市における、産業変遷などをまとめた文献
9	織井文雄	在来箒工業地域の形成	1968	箒工業の成り立ち方についての文献
10	須永和博	マイナー・サブシステ ンスとしての観光	2009	タイ北部の町におけるマイナー・サブシステムの観光について紹介した文献
11	数馬浅治	竹刀について	2000	竹刀の作成工程や特徴などを紹介した文献

表 2-1 の文献選定理由を述べていく。まず、表 2-1 の番号 1 は旧伊吹町の町史であり、町の地域ごとの様子や特徴などが細かく記されているため、竹刀づくりが盛んに行われていた町がどのような様子であったかなどがよくわかると考え、使用する文献に選定した。

次に、表 2-1 の 2 は、昭和 59(1984)年に竹刀が滋賀県知事指定伝統的工芸品に指定される際に、伊吹町長から滋賀県に提出された書類である。伊吹に竹刀製造がもたらされた正確な時期や、書類が提出された際の職人の名前や竹刀製造の開始時期、竹刀づくりの工程など伊吹の竹刀づくりに関する情報が詳細に載っている貴重な資料である。たくさんの資

料の中でも、当時の伊吹地域における竹刀づくりの様子について知ることができる資料なので複数箇所を使用している。またこの書類には、昭和 56(1981)～昭和 58(1983)年の竹刀の生産額が載せられており、数少ない数量データとして用いることもできる。

また、表 2-1 の 3 は剣道に関する文献である。剣道に関する文献はたくさんあるが、今回はその中でも剣道技術に関するものだけでなく、歴史について記しているものを選定している。竹刀の用途である剣道の情報は、竹刀自体について言及する際に有効であると言える。

以上に述べた文献以外のものは、すべて文献資料調査で剣道や伊吹の竹刀製造に関する情報を補足するために選定したものである。たとえば、表 2-1 の 4 は日本における武道が教育にどのように用いられてきたかを述べている文献であり、剣道も武道の一種であるので、第二次世界大戦前に剣道が教育にどのように取り入れられていったかが記されている。よって、剣道と軍国主義の関係を述べる際に使用できる。

このようにして、文献やヒアリングで入手した情報の裏付けや補足としての情報を入手するための資料として使用していく。

以上のように第三章では、読んだ文献の情報を基に、項目ごとに複数の文献を使用して、

- 剣道の歴史
- 戦争と剣道の関係
- マイナーサブシステム(本業とは別にする、片手間の仕事)としての竹刀製造
- 竹刀流通量の推定
- 滋賀県における竹刀製造業の盛衰

などについて述べていく。

なお、上にも述べているように竹刀流通量の推定も行うが、職人の数やどれくらいの竹刀が生産されていたかなどの正確なデータは残っていないため、ヒアリングにおいて対象者にどれくらいの同業者がいたか、どれくらいの量を作っていたかを聞き取り、それに基づきおおよその推測を行う。

2-2-2 ライフヒストリーの手法

(1)研究方法の選定

本研究のテーマである「滋賀県を中心とする国内竹刀製造業」について、竹刀製造業や竹刀づくりを裏付けなども踏まえつつ詳細に記述された文献資料はまだない。また、現在国内に残る職人は少数であることから、アンケート調査などの量的調査を行うことが非常に困難である。加えて、国内に流通する竹刀の量、また過去の流通量などの量的なデータ

もほとんど残っておらず、当時職人をしていた人々におおよそこれくらいであった、という記憶を聞くということしかできない。

そこで本研究では、1-2, 2-1-1 で説明したライフヒストリー分析を手法として使用する。研究対象の母数自体が少ないので、特定の人にヒアリングを行い当時の様子を推測するという方法も効果的だと考えられる。

(2)対象者について

ライフヒストリー調査の研究対象として、2 人の人物を調査する。

一人目は滋賀県近江八幡市在住の山口吉昭氏である。山口氏は父親(山口政三氏)が戦前から竹刀職人をしており、会社勤めをした後本格的に竹刀職人の世界に入った。現在全国で数少ない、滋賀県内ではただ一人の竹刀職人である。山口氏の写真を、図 2-1 に載せる。

山口氏を本研究の対象者とした理由は、昔は竹刀製造が盛んに行われていた滋賀県において、現在唯一残る竹刀職人であるからである。

二人目は、以前竹刀製造が盛んに行われた滋賀県米原市(旧伊吹町、以下伊吹地域)において、父親(池田重成氏)と竹刀製造をしていた元竹刀職人の池田光信氏である。池田氏は昭和 38(1963)年頃から昭和 58(1983)年まで滋賀県米原市において竹刀職人をしていた⁶⁾⁷⁾。また、伊吹地域では最後の竹刀職人である⁸⁾。池田氏の写真を、図 2-2 に載せる。

池田氏を本研究の対象者とした理由は、現在は竹刀職人を辞められてしまったが、竹刀製造が盛んだった滋賀県伊吹地域において最後まで職人を続けていたこと、また池田氏の先祖が伊吹地域に竹刀づくりの技術をもたらしたことが挙げられる。

なお、山口氏池田氏ともに本研究の対象者として論文に名前等掲載することについては許可をいただいている。



図 2-1 山口吉昭氏(2010.10.17 筆者撮影)



図 2-2 池田光信氏(2011.03.20 筆者撮影)

(3) ヒアリングについて

本研究の対象者である山口氏、池田氏に行ったヒアリングの日時、時間について、表 2-2、表 2-3 にそれぞれまとめる。また、ヒアリングの様子を図 2-3 にまとめる。

表 2-2 山口氏へのヒアリング日時・時間

	日時	ヒアリング時間
1	2010 年 10 月 17 日	約 4.5 時間
2	2011 年 5 月 21 日	3.5 時間
3	2011 年 10 月 15 日	6.5 時間
4	2011 年 11 月 17 日	約 5 時間
5	2012 年 1 月 19 日	約 10 時間
6	2012 年 1 月 24 日	約 2.5 時間

表 2-3 池田氏へのヒアリング日時・時間

	日時	ヒアリング時間
1	2010 年 12 月 14 日	約 3 時間
2	2011 年 3 月 20 日	約 2 時間
3	2011 年 8 月 23 日	2.5 時間
4	2011 年 10 月 26 日	約 2 時間
5	2012 年 1 月 21 日	約 2.5 時間

ヒアリング場所についてであるが、山口氏はすべて自宅内にある竹刀制作スペースにてお話を伺わせていただいた。池田氏は、表 2-3 の 2 のみ以前住んでおられ、竹刀づくりに取り組んでおられた伊吹のお宅へお邪魔させていただいている。それ以外は長浜市の現在のご自宅にてお話を伺った。ヒアリングの様子を図 2-3 に載せる。



図 2-3 池田氏ヒアリングの様子(2011.10.26 栗谷瞳子撮影)

また, ヒアリングの際は両氏に許可を取り IC レコーダーを使用して会話を録音させていただいている。

(4) ライフヒストリーのまとめ方について

ライフヒストリー作成の手順は 2-1-1 で述べたが, まとめ方について決まったやり方はないため, ここで本研究のライフヒストリーのまとめ方について言及しておく。

本研究では, ヒアリングにおいて録音したテープを忠実に文字化し, 重複している内容などを省く編集作業をした後ライフヒストリーという形にしていく。ライフヒストリーは, 本研究では第四章において, 2 段組みの左側にヒアリングにおいて山口氏や池田氏が話してくださった言葉をそのまま会話形式でまとめ, 右側にその会話から考察できることや補足情報などを付け足していく方法を用いた。また, 会話はテーマごとに区切る形式で, 各々その会話の内容にふさわしい小見出しを付けていく。小見出しの順番は, 生まれたとき, 子供の頃, 竹刀職人を始めてからというように, 基本的に時間軸に沿った形で並べる。

また, 並行して人生年表を作成していく。人生年表はライフヒストリーとは別物であるが, 山口・池田両氏が話してくださった, 生まれてから現在までの流れを時間軸に沿ってまとめていく。こちらもヒアリングを基に作成していく。

参考文献

- 1) 谷富夫：新版ライフヒストリーを学ぶ人のために，pp.1-37，世界思想社（2008）
- 2) 落合恵美子：100 歳女性のライフヒストリー—九州海村の恋と生活—，京都社会学年報：KJS，12，pp.17-55（2004）
- 3) 中野卓：口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代—，御茶の水書房（1995）
- 4) 塚田守：高校教師のライフヒストリー分析—男性高校教師のキャリア形成のプロセスを中心に—，日本教育社会学会大会発表要旨集録，48，pp.260-261（1996）
- 5) 菅宮健・岩佐美和子：パーソナルライフヒストリーの方法による庶民の暮らしの研究 第一報 昭和初期の北海道における菓子職人夫婦の暮らし，北海道教育大学紀要(第 2 部 C)，46(1)，pp.11-23 (1995)
- 6) 滋賀県庁収蔵資料，2011-01-07，公文書
- 7) 池田光信，2010-12-14，ヒアリング
- 8) 池田光信，2011-10-26，ヒアリング

第三章 竹刀に関する情報

3-1 剣道の歴史

3-1-1 竹刀の誕生 ¹⁾²⁾

剣道をするうえで欠かすことのできない竹刀の誕生のきっかけとなるのが慶長20(1615)年の大阪夏の陣の終焉である。この後、二百数十年に及ぶ平和な時代に突入したことにより、徳川家に仕えていた柳生宗矩(1571～1646)は、剣道を、人を殺す技術「殺人剣(さつにんけん)」から、人を活かす技「活人剣(かつにんけん)」へと転化させていった。それまでは戦国時代だったためのんびり稽古をしているような暇はなく、いきなり実践において鍛錬をする必要があった。しかし、平和な時代の到来により、相手にケガをさせないように技を教えたり稽古をしたりするという概念が生まれた。

その流れから生まれたのが、現在の竹刀の前身とも言える「袋しない」である。「袋しない」は、ひきはだという筒袋に竹を入れたものである。これに竹が選ばれた理由は日本各地に密生していたことと、竹が良くしなるという特性から衝撃が少ない、それまで使っていた木刀に比べて痛くないということが挙げられる。

その後江戸時代後期に、「袋しない」よりも腰の強い「四つ割り竹刀」が発明された。四つ割り竹刀とは、1-1-3 で述べたような、数枚に割った竹を4枚合わせたいわゆる現代の竹刀である。

3-1-2 剣道の起源 ³⁾⁴⁾

剣道の起源として最も重要となるのが、平安時代の中頃の日本刀の出現である。日本刀は出現して以来、武士集団に使われるようになる。

室町時代の後半になると、応仁の乱が始まってから約100年間、天下は乱れ、剣術の各流派が成立する。その間天文12(1543)年に種子島に鉄砲が伝来したことにより、戦闘方式が重装備から軽装備へと大きく変化した。

3-1-1 でも述べたように、長い戦国時代が終わり、剣術は人を殺す技術から武士としての人間形成を目指す「活人剣」へと昇華し、技術論のみでなく生き方に関する心法まで広がった。ここで生まれた武士道の世親は264年に及ぶ平和の中で養われ、封建制度の幕府が崩壊した後も日本人の心として現代に生きている。

一方、太平の世が続き、剣術は実践的な刀法から華麗な技がつくられていく中で、新たな基軸をうちだしたのが直心陰流の長沼四朗左衛門国郷である。長沼は正徳年間(1711～1715年)に剣道具(現在の防具)を開発し、竹刀で打ち合う「打ち込み稽古法」を確立した。これが今日の剣道の直接的な源である。

こうして江戸時代後半には、「袋しない」よりも腰の強い「四つ割り竹刀」が発明され、胴もなめし革をはり漆で固めた現在の胴に近いものが開発された。

明治元(1868)年、明治維新が起こり、新政府が設置されて武士階級は廃止され、続いて帯刀が禁止されたことにより失業者は急増し、剣術は下火になった。しかし、明治10(1877)年に西南の役(西南戦争)が起こり、政府軍の警視庁抜刀隊が活躍したことにより、警視庁を中心に剣術復活の兆しが見え始めた。そして明治28(1895)年、剣術を始めとする武術の振興を図る全国組織として「大日本武徳会」が京都に設立された。

ここまで「剣術」という言葉が使われているが、「剣道」という名が初めて出てきたのが大正元(1912)年に制定された「大日本帝国剣道形」(のちの「日本剣道形」)である。これにより流派を統合し、日本刀による技と心を後世に継承するとともに、竹刀打ち剣道の普及による手の内の乱れや刀筋を無視した打突を正した。竹刀はあくまでも日本刀の替りであるという考え方が生まれ、大正8(1919)年に西久保弘道(文久3(1863)～昭和5(1930)、日本の政治家で警視總監、北海道庁長官、福島県知事などを歴任)によって「武」本来の目的に適合した武道及び剣道に名称を統一された。

3-2 軍国主義・戦争と剣道

3-2-1 第二次世界大戦前の剣道

剣道はその武道的性質上、戦前の軍国主義教育に利用されてきた。加藤(1977)によれば、「思うにこの時代の戦闘は、鉄砲が主であったはずであり、個人の武技が、戦場でさほど効果を納め得なかったはずである。然るにかく武道が奨励された理由は、その精神的教義が評価されたせいであったと思われる⁵⁾。」とあり、その頃すでに鉄砲を始めとする近代兵器が出現していたため、それに比べれば実用性はないが、単なる心身の鍛錬としてではなく、武士的特性と修業的態度を鍛錬するためのものと考えられていた。また、「国に非常事態が起こるか、あるいはそれが予想される情勢の時、武道が奨励されるのは常であり、日清戦争、日露戦争、満州事変、今次の世界戦争時もそうであった⁶⁾。」とある。この記述を裏付けるように、大塚(1995)によれば日露戦争後には「軍事思想を背景にして、その思想の投影をうけた剣術が軍隊で実施され、忠実にその思想を実現していくものになる。さらには一九一一(明治四四)年には軍隊のみならず、国民全体への尚武の精神の振興が求められ、剣道は学校体育の重要な教材として活用されていくことになるのである」⁷⁾とあり、第二次世界大戦前は「武道の教育的価値の認識、時代の影響等によって、文部省はついに、昭和6年、中等学校教育法令改正の中で、剣道、柔道を独立した必修科目としたのである」⁸⁾とあるように、法律において中等学校の必修科目として定められた。

学校教育の場で剣道が取り入れられた影響により、竹刀の需要も増えたことも推測できる。実際、山口氏はヒアリングで「親父が戦前にやっていた時は周りの職人含めてかなり良い思いしていたらしい。軍隊納めがあったからね。」と話している⁹⁾。

3-2-2 第二次世界大戦中の剣道

山口氏がヒアリングで「親父は戦争に行ったから、一回竹刀づくりを辞めている」¹⁰⁾と語っていることや、池田氏が「みんな戦争行くから作る人がいなくなってしまう」¹¹⁾と語っていることにより、竹刀製造が盛んな地域においても戦中は竹刀づくりが中断されたことがわかる。

以上より、昭和 14(1939)年に第二次世界大戦が開戦してから徐々に職人も出兵していき、竹刀づくりも中断せざるを得なかったということが言える。

3-2-3 第二次世界大戦後の剣道

(1)終戦直後

剣道は以上述べてきたように、政府の軍国主義教育の一環として利用されてきたため、連合国司令官総司令部(以下 GHQ)によって、武道は英語で **Military arts**「軍事的な技術」として禁止理由の一つにあげられ、昭和 20(1945)年に第二次世界大戦に敗戦した直後に武道が禁じられた¹²⁾¹³⁾。

「江戸時代後期に竹刀の基礎は作られていたが、伊吹町では大正末頃に京都の業者が弟子入りしていた人が技術を持ち帰り、伊吹町甲賀で 10 軒の農家が作っていた。終戦で一時中断、昭和 38 年頃から再び作るようになった。又甲津原地区の人は戦前奉公に習ってきたことを戦後だんだんと剣道の普及によって農業のかたてまに竹刀を作り始めた」¹⁴⁾

上の記述は、滋賀県知事指定伝統的工芸品に竹刀が指定される際に伊吹町(当時)から滋賀県庁に提出された文書(以下滋賀県公文書)の記述を抜粋したものである。これを見ても、滋賀県伊吹地域において終戦後竹刀づくりが中断していたことがわかる。

また、大塚(1995)が「(剣道の禁止に伴って)木刀や竹刀、そして防具はガソリンをかけられ焼却処分された。一部には『いずれの時にやれるのではないか』という望みのもとに隠されたりもしたが、占領軍に処刑されるとか、沖縄に送られるとかの脅えの中のことであった」¹⁵⁾としているように、禁止の徹底ぶりは強いものであった。

竹刀は剣道にしか使用されなかったため、一度出兵して帰国した竹刀職人も竹刀づくりを再開することができず、竹かごを編んだり、駄菓子屋を開いたり、他の仕事をして生計を立てていた¹⁶⁾。

その後、剣道に限らず戦前に武道を楽しみとしてやってきた人々の働きかけにより、徐々に柔道や空手などの武道の実施が解禁されていった。しかし、剣道のみ GHQ 統治下での解禁はかなわず、昭和 27(1952)年に GHQ が撤退した後に解禁され、部活動や授業など学校教育の場などの場においても再び剣道が取り入れられるようになった¹⁷⁾。また、同年に全日本剣道連盟も結成された¹⁸⁾。

以下に上に述べてきた流れに補足を加えた表 3-1 の年表を示す。

表 3-1 戦後剣道の禁止と復活の経過年表¹⁹⁾

年	月日	できごと
昭和 20 (1945)年	11 月 1 日	厚生省健民局体練課長から都道府県体育主事宛「戦後に於ける体力行政に関する件」1～3 省略，4 国民武道の奨励(町道場の復活を図ることほかのスポーツと同様競技的に指導すること等)
	11 月 6 日	文部次官通牒(発体 80 号) 学校における武道禁止
	12 月 26 日	体育局長通牒により，学校施設における学生一般人を問わず禁止
昭和 21 (1946)年	1 月	武道の免許状無効
	8 月 25 日	発体 95 号により社会体育としての剣道に制限(公私の組織あるいは団体にいて従来の携帯内容による県道を積極的に指導奨励なさざるをかとする。将来ほかの純粹スポーツと同様の方向に進められるよう充分なる努力をなすこと)
	10 月 31 日	大日本武徳会が解散
	11 月 9 日	大日本武徳会に解散命令
昭和 23 (1948)年	5 月 23 日	フェンシング並びに近県剣道懇親会
昭和 24 (1949)年	9 月	東京剣道具楽部が誕生
	10 月 30 日	原宿で第一回全国剣道大会
	11 月 10 日	警察剣道の訓練中止(警棒術の誕生)
昭和 25 (1950)年	3 月 5 日	全日本剣道競技連盟「撓競技連盟」と名称を変えて発足
	10 月	大猪飼全日本撓競技大会(名古屋)
		(朝鮮動乱。警察予備隊設置。第一次追放解除。レッドパージ。)
昭和 26 (1951)年	11 月	第二回全日本撓競技大会(東京・九段高校)

昭和 27 (1952)年	4 月 10 日	次官通牒により撓競技を中学校以上にいれる
	8 月 18 日	全日本剣道大会(日光)
	10 月	第 7 回国体に撓競技がオープン競技となる
	10 月 14 日	全日本剣道連盟が結成
昭和 28 (1953)年	2 月	再出発の第一回全日本撓競技大会と東西対抗(大阪)
	4 月 17 日	文部省に学校剣道研究会の発足
	5 月 1 日	保健体育審議会(保体審), 社会体育としての剣道を認める
	5 月 4 日～ 5 日	第一回京都大会と第一回都道府県大会の開始
	5 月 19 日	国家, 地方警察警官の訓練としての剣道を認める
	7 月 7 日	文部次官通知により高等学校以上体育教材として認める
	11 月 11 日	全国警察剣道大会(警視庁体育館)
	11 月 8 日	第一回全日本剣道選手権の開始(蔵前)
	12 月 13 日	全日本学生剣道連盟の結成, 第一回全日本学生剣道選手権大会
昭和 29 (1954)年		警察法, 防衛庁設置, 自衛隊法成立
	2 月	第二回全日本撓競技大会と東西対抗(大阪)
	3 月 5 日	全日本撓競技連盟と強盗して全日本剣道連盟
	9 月	剣道が第九回国体オープン競技として認められた
	10 月	第二回全日本剣道選手権大会(両国)
昭和 30 (1955)年	2 月	第三回全日本撓競技選手権大会(大阪)
	3 月 5 日	全剣連の日本体育協会の加盟が承認される
	11 月	第 10 回国体で撓競技を含む剣道は正式種目となる
	12 月	第三回全日本剣道選手権大会(両国)
昭和 31 (1956)年	5 月	日本三道会が結成される(29 年当時の武徳会再建反対を契機に, 武道, 武士道を趣意書にいれる. この後, 学校格技の普及活動)
	10 月	第 11 回国体で剣道, 撓競技が行われる(兵庫)
	11 月	第 4 回全日本剣道選手権大会(東京体育館)
昭和 33 (1958)年	7 月 7 日	全日本剣道選手権優勝者天皇杯が下賜
昭和 34 (1959)年	12 月	三道会に相撲が入り日本志道と改称(39 年に空手が入る)

(2)現代

剣道復活後、学校体育の重要な一部を構成するとともに、老若男女を問わずに数百万人に及ぶ幅広い年齢層の愛好家が竹刀を持ち、稽古に励んでいる。また、そのような愛好家は世界に広がり、昭和 45(1970)年には国際剣道連盟(International Kendo Federation, IKF)が結成され、世界剣道選手権大会が開催されている²⁰⁾。

現在の正確な剣道人口を示す指標として、全日本剣道連盟が創立 55 周年事業として平成 19(2007)年に行った全国規模の剣道人口調査の結果がある。これは初めて全国規模で行われた調査であり、それまでの剣道人口は全日本剣道連盟に登録されている有段者(剣道の段位を所持している人)の数で判断されていた。以下に調査結果の抜粋²¹⁾を示す。

- ①活動中の剣道人総数は 47.7 万名、そのうち有段者は 29 万名であり、段位取得者の約 2 割であること。
- ②うちわけは一般社会人 40%, 中学生以下が 45%, このうち半数が小学生以下である。
- ③男女構成では女性が 23%と 4 分の 1 を占めている。
- ④組織別には学校剣道部 28%警察関係 14%, 一般道場・スポーツ少年団が 58%である。
- ⑤総剣道人口としては、今回把握した無段者 18.3 万名を登録人員 148 万名に加えると、166 万名と見ることにしたい。

これを見ると、平成 19(2007)年時点で日本国内では 166 万人の人々が剣道の稽古に励んでいるということがわかる。

なお、これ以前の有段者の数について、全日本剣道連盟に問い合わせた結果を表 3-2 にまとめる。なお、統計上残っているデータは平成 15(2003)年度から平成 22(2010)年度のものということである。

表 3-2 平成 15(2003)～22(2010)年の有段者数 ²²⁾

年度(年)	登録人数(万人)
平成 15(2003)	134
平成 16(2004)	139
平成 17(2005)	143
平成 18(2006)	147
平成 19(2007)	151
平成 20(2008)	155
平成 21(2009)	158
平成 22(2010)	162

3-2-4 戦争と剣道についてのまとめ

ここまでの情報を、流れを追って順に考察していく。

まず、剣道が軍国主義教育(政策)に取り入れられた経緯として、伝統的に日本で行われてきた武道そのものが、ただ単に身体的な修業を行うというのではなく、人格や精神の鍛練育成のためのものであったということが第一にある。鉄砲など近代的兵器が欧米諸国から伝わって戦争における戦法が変化していても、精神の鍛練は古来より日本に存在している武道に頼っていた。

以上のように武道が国を挙げて取り行われていた時代は、竹刀を軍隊に納めるということをしていたこともあり、一定の需要があったと考えられるので、竹刀職人の収入は保障されていたと言って良いだろう。

また、日本が第二次世界大戦で敗戦した影響により、剣道が規制されるようになったことから竹刀づくりそのものができなくなったということは竹刀づくりの歴史においてとても重大なことであったと考えられる。つまり、昭和 20(1945)年の終戦から GHQ が撤退して剣道が復活した昭和 27(1952)年までの 7 年もの間、全国的に竹刀製造がなされなかったというブランクが発生していたことになる。ほかの産業で考えてみても、材料不足により中断されたものはあったが、進駐軍の取り締まりによって 7 年もの間中断されていたというものは例を見ないので、これは現在の後継者不足や竹刀製造業全体の衰退につながっているのではないかと考えられる。

3-3 マイナーサブシステムとしての竹刀

3-3-1 マイナーサブシステムとは²³⁾²⁴⁾

マイナーサブシステムとは、本業とは別に副次的に行う仕事のことをさし、いわゆる副業がそれに近い。しかしこのマイナーサブシステムという言葉は、副業といった相対価値の低さを排除するもの・人間生活の実態像の再構成には不可欠なものであり、より精緻な民族知識への関心を推進するといった役割を持っている。

3-3-2 滋賀県伊吹地域における竹刀製造の起こり

まず、伊吹地域の地図を図3-1に、特に竹刀製造が盛んだった集落の拡大図を図3-2に載せる。また、伊吹町史に載っていた旧伊吹町甲賀の出来事をまとめた年表を表3-3に載せる。



図 3-1 滋賀県旧伊吹町(旧伊吹村)地図²⁵⁾

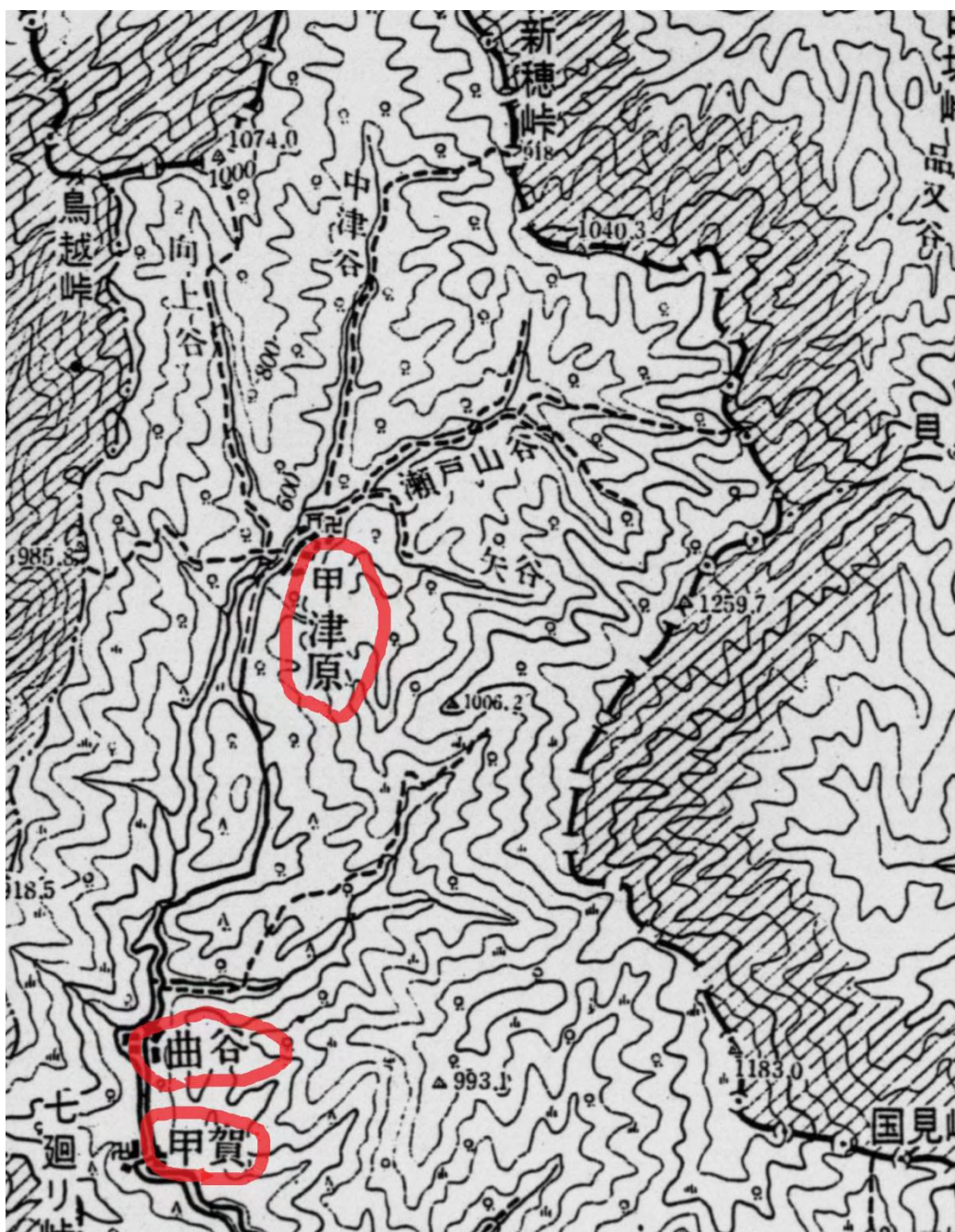


図 3-2 甲賀・曲谷・甲津原拡大図²⁵⁾(赤丸は筆者記入)

表 3-3 旧伊吹町甲賀 略年表 ²⁶⁾

年号	西暦	事項
		古墳時代士豪が住んでいたと考えられる
天正 19	1591	太閤検地免除，天領となる
元和 5	1691	小堀氏知行地となる
天明 8	1788	小堀藩改易 代官支配地となる
明治 38	1905	北山区長時代
42	1909	姉川地震がおこった．甲賀は震源地．
昭和 3	1928	御大典記念として白山神社拝殿を建立した
6	1931	火災で 10 戸が全焼した
10	1935	竹刀工芸がとりくまれはじめた
11～15	1936	関西配電の水道トンネル工事が始まった．多数が工事に参加
		現場には飯場が設けられ，朝鮮人も労働者として働いた
19	1944	寺の梵鐘を供出した
19～20	1944	疎開者によって戸数，人口が減少した
22	1947	火災で 4 戸が全焼した
34	1959	川西，川東にそれぞれ簡易水道が設置された
		伊勢湾台風で甲賀橋が流失した
38	1963	カン谷に区有林が設けられ，植樹が始まった
45	1970	曲谷分校が改築された
51	1976	白山神社，鳥居が建設された(東谷学校跡)
		長浜～吉槻バスが曲谷まで運行
		松茸山，留山として各組単位で入札
56	1981	豪雪
58	1983	原子力送電鉄塔 黒谷，ホヶ谷に建つ
60	1985	カン谷農道竣工
61	1986	曲谷分校休校(曲谷 1，甲賀 3，計 4)
		白山神社の御神木等，危険性のあるものを伐採
		本堂鞘殿，拝殿建立，狛犬奉納

伊吹地域は図3-1の斜線で囲まれた部分であり，岐阜県との境界に位置し，伊吹山にほど近いところにあり，雪深い地域である．なお，市町村合併により2005年2月14日より坂田郡伊吹町から米原市となっている．

人口の推移を表3-4にまとめる．これを見ると，昭和35(1960)年から徐々に人口が減ってきていることがわかる．

表 3-4 滋賀県坂田郡伊吹町(当時), 米原市伊吹地区の人口推移²⁷⁾

年	人口(人)
昭和35(1960)年	7,412
昭和40(1965)年	6,742
昭和45(1970)年	6,587
昭和50(1975)年	6,513
昭和55(1980)年	6,354
昭和60(1985)年	6,305
平成2(1990)年	6,155
平成7(1995)年	6,041
平成12(2000)年	5,959
平成17(2005)年	5,685
平成22(2010)年	5,519

滋賀県公文書に、伊吹地域の竹刀製造業の流れについて記されている。

「江戸時代後期に竹刀の基礎は作られていたが、伊吹町では大正末頃に京都の業者に弟子入りしていた人が技術を持ち帰り、伊吹町甲賀で 10 軒の農家が作っていた。終戦で一時中断、昭和 38 年頃から再び作るようになった。又甲津原地区の人は戦前奉公にいて習ってきたことを戦後だんだんと剣道の普及によって農業のかたてまに竹刀を作り始めた」²⁸⁾

また、伊吹町史の村里のあゆみの部分に、さらに詳しい起源や戦前の竹刀製造業の様子について記述されている。

「甲賀に竹刀工芸をはじめたのは池田九左エ門(当時九〇歳)とその子政太郎である。京都深草で修業した彼は日露戦争後郷里に帰り竹刀の制作につとめた。昭和一四・五年ごろからは需要が増大し木炭の生産よりも安定した収入源となった」²⁹⁾(下線は筆者加筆)

以上 2 つの文献の記述と、本研究の対象者である池田光信氏へのヒアリングから得た情報を併せて考察していく。なお、上の記述中に出てくる池田政太郎氏は、池田光信氏の大叔父にあたる人物である。

まず、伊吹地域では日露戦争が終わって数年後の大正末頃から農家が副業的に竹刀を製造していたということがわかる。ここに書いてある農家以外にも、山で炭焼きをしていた人々も同様にマイナーサブシステムとして竹刀を製造していた³⁰⁾。伊吹地域は雪深い地域であり、冬季は農業および炭焼きをすることができない。その期間、少しでも収入を得るために数軒が始めたものと考えられる。そのように片手間の仕事ではあったが、昭和 14～15(1939～1940)年頃から終戦によって竹刀製造が一旦中断されるまでの期間は、竹刀の需要増で本業として行っていた炭焼き業よりも安定した収入源となったようである³¹⁾。

また、伊吹地域で行われていた竹刀製造は、戦前丁稚奉公として京都にある竹刀工房へ働きに出ていた人が複数いたことから始まっているということがわかる。

3-3-3 滋賀県伊吹地域における竹刀製造の転換期

伊吹町史には、さらにこのような記述がある。

「終戦によって一時途絶えたもののまもなく復旧し、中・高教育現場での剣道復活とともに三〇年以降急速に需要が伸び始め四〇年前半に最盛期を迎える。生産者も次第に増加、甲津原にも同業者が生まれた。甲賀の五軒十二人に加え甲津原でも三軒を超えたが、生産が追いつかない時期もあったという」³²⁾

この記述やヒアリング結果を併せて考察していく。

まず、伊吹地域において大正時代から続けられてきた竹刀製造業であったが、第二次世界大戦が始まると出兵などの理由で中断されてしまった。終戦後も、GHQによって武道が禁止されたため、戦争から帰ってきた人々もほとんどの人は竹刀製造を再開することはなかった。中には剣道が復活してすぐに作り始めた人もいた³³⁾が、1人しか確認できない。再開しなかった人々は炭焼きなどの本来の仕事をして生計を立てていた³⁴⁾。

その後、1960年頃エネルギー革命が起こり家庭燃料としてプロパンガスが使われるようになり、それまでの家庭燃料の主流であった木炭の需要が減り、炭焼きが有名な街でさえも炭焼きを辞めていく人が続出した³⁵⁾。伊吹地域でも、池田光信氏を始めとして同じように収入減を理由に炭焼きを辞めていく人が出てきた。その中でも戦前竹刀づくりをしていた人たちは、その後の仕事としてかつてマイナーサブシステムとして行われていた竹刀づくりを本業として再開し、昭和 38(1963)年前後から池田氏を中心となって伊吹地域での盛んな竹刀づくりが始まった³⁶⁾。

また、伊吹地域において竹刀づくりが始まる少し前から、中・高教育現場で剣道が復活したことにより急速に需要が伸びたことがわかる。特に新学期の前は大口の注文

が入り、竹刀職人のもとには納品先の武道具店から催促が来たり、まったく交流のない武道具店からいきなり注文が入ったりするくらいであった³⁷⁾。

3-3-4 竹刀製造業とその他のマイナーサブシステムの例との比較

竹刀製造と同じようにマイナーサブシステムから本業へと変化していった産業として、箒製造やメガネフレーム製造が挙げられる。

箒も農家の副業として日本各地において行われてきた副業である。その形態としては、農家の人々が、自分が使う分だけを作るというものが主流であり、余分に作って街に売りに行くということもあった。その後、一部の上農層(裕福な農家)が箒製造の企業化・経営規模の拡大を図ったことにより、箒製造が本業に変化していった地域も出てきた³⁸⁾。このように箒が本業となった代表的な産地として、神奈川県厚木市などが挙げられる。

福井県鯖江市は、メガネフレームの名産地であるが、こちらも 1905 年に農閑期の農家の生活向上を意図して大阪から職人を招いて、技術を数名が習得するところから始まった³⁹⁾。その後、それぞれが技を競い合い、腕を磨くうちに分業化が進み、現在のような大産地となった⁴⁰⁾。

ここで確認しておきたいのが、箒・メガネは日用品であり、竹刀は日用品ではないということである。比較のために、図 3-3 に横軸に価格の高低、縦軸に人々の生活に根付いているかどうかを取ったポジショニングマップを示す。

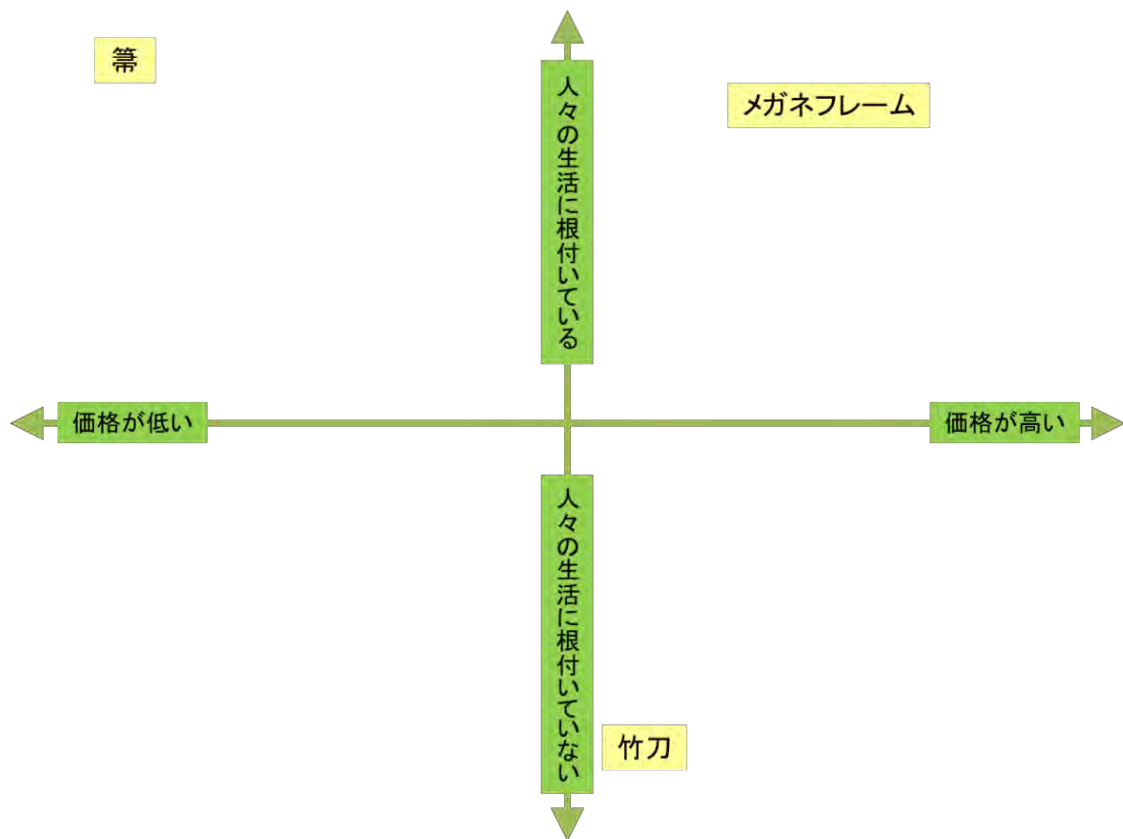


図 3-3 ポジショニングマップ(価格の高低／生活に根付いているかどうか)

このことから、竹刀は日用品ではないため、本業になったとしても事業規模が拡大するほどの規模になることができず、そのまま海外製竹刀に押され、結果的に衰退してしまったと考えられる。

また、マイナーサブシステムとしての仕事は、以上に挙げたようなものづくりだけではない。須永(2009)の研究では、タイ北部の山間部に居住するカレンと呼ばれる人々によって行われているエコツーリストの受け入れはマイナーサブシステム化された観光であるという⁴¹⁾。多くの観光開発がローカルな社会を観光という不安定な市場に従属させるといういびつな構造を作り上げてきたという側面を持っているが、このカレンの人々は、観光をあくまで副業、副収入として位置付けている。カレンの人々にとって重要なことは、観光収入の最大化ではなく、もともとの生業である自給的な焼き畑との両立であるという。カレンの人々のこのような姿勢は、観光のマイナーサブシステム化であると言える。

3-4 竹刀の流通量の推定

3-4-1 海外製竹刀が入ってくるまでの竹刀流通量について

海外製竹刀が国内に入ってくる以前の竹刀流通量の推定をする。なお、正確なデータはほとんど残っていないため、おおむねこれくらいであった、という指標を示すという前提のもとで行う。

池田氏によると、「おおむね 1 日 10 本くらい、月に 20 日間ほど竹刀を完成させていた」⁴²⁾ということであるので、単純計算で、

$$200(\text{本}) \times 12(\text{ヶ月}) = \underline{2,400(\text{本})}$$

の竹刀を 1 軒の職人が製造していたことになる。滋賀県内で単純計算すると、

$$2,400(\text{本}) \times 17(\text{軒}) = \underline{40,800(\text{本})}$$

の竹刀が、年間滋賀県内で製造されていたことになる。

全国的に当時職人がどれくらい存在していたのか正確なデータがないため確実な推定はできないが、滋賀県のほかに職人がいたのは京都(戦前に滋賀から丁稚奉公へ出向く人が多かった)、佐渡島、東京(どちらも数馬(2000)⁴³⁾の研究で言及されている)、福岡、宮崎、静岡(1984 年 12 月 7 日付の朝日新聞滋賀版に明記⁴⁴⁾)には確実に職人がいたことがわかっているので、仮にどの地域でも滋賀県と同じ生産量があったと考えると、

$$40,800(\text{本}) \times 7(\text{地域}) = \underline{285,600(\text{本})}$$

の国産竹刀が流通していたと概算できる。

3-4-2 現在の竹刀流通量について

海外製竹刀も含む現在の竹刀流通量を推定する。

まず、現在の日本全体の竹刀は、九州にある 3 社の武道具卸売業者のものが 8 割であると言われる⁴⁵⁾。この 3 社に電話にて問い合わせたところ、それぞれ年間おおむね 30 万本の海外製竹刀を販売しているということであった⁴⁶⁾⁴⁷⁾⁴⁸⁾。ということは、

$$300,000(\text{本}) \times 3(\text{社}) = \underline{900,000(\text{本})}$$

の海外製竹刀がこの 3 社のみで 1 年に流通していると概算できる。加えて、この 3 社で日本の 8 割の竹刀を賄っているということなので、

$$900,000(\text{本}) \div 0.8 = \underline{1,125,000(\text{本})}$$

の竹刀が年間国内に流通しているということになる。

また、海外製竹刀は竹刀流通量の 9 割である⁴⁹⁾ので、

$$1,125,000(\text{本}) \times 0.1 = \underline{112,500(\text{本})}$$

の機械製を含む国産竹刀が国内に流通していることになる。

続いて、現在職人である山口氏は年間約 800 本の竹刀を手作りで製造している。

また、全国の武道具職人や武道具店などが集まる全日本武道具協同組合のホームページで会員名簿⁵⁰⁾を見ると、竹刀職人は山口氏しか登録していないが、2008 年 7 月 29 日付の西日本新聞夕刊を見ると、福岡県大川市の竹刀職人を紹介した上で、「竹刀職人の数は今や全国でも 10 人足らず」と言われると述べられている⁵¹⁾。

具体的な数字が述べられていないため、シミュレーションのために竹刀職人が全国に 10 人いると考えた上で、仮に 10 人の職人が山口氏と同じように年間 800 本竹刀を作っているとすると、

$$800(\text{本}) \times 10(\text{人}) = \underline{8,000(\text{本})}$$

の職人手作りの竹刀が 1 年間に流通しているということになる。

ということは、国産以外の竹刀(主に中国から輸入された機械製竹刀)は、単純計算で

$$112,500(\text{本}) - 8,000(\text{本}) = \underline{104,500(\text{本})}$$

ということになる。

3-4-3 考察

3-4-1 と 3-4-2 を考察していくと、海外製竹刀が入ってくる前の職人の竹刀製造量が、1 軒単位で見ても全体で見ても圧倒的に多いことがわかる。これは、製造作業時間の

問題だけでなく、需要が圧倒的に違ったことが原因だと推定される。また、現在の竹刀職人の正確な数が把握できないとは言え、職人手作りの竹刀の流通量も圧倒的に違うと考えられる。

また、現在の竹刀流通量が年間 1,125,000 本と推定されたことに関して、ヒアリングの情報からおおまかな推測とは言え、3-2-3 で述べたように、剣道人口は現在 166 万人いると考ええると、まったく足りていないという結果になった。

山口氏によれば、大手の会社は年契約で竹刀を仕入れることが多いので、前年余ってだぶ付いた分が入っていないのだろうとのことだった⁵²⁾。そう考えると、毎年のだぶ付く竹刀の量は、最少でも 535,000 本はあるということになる。

3-5 竹刀製造業の盛衰

3-5-1 滋賀県伊吹地域における竹刀製造業の発展

戦後、GHQ によって禁止された剣道が、昭和 27(1952)年に再度実施するのを承認されてから徐々に剣道人口が増え始め、同時に竹刀の需要も増加した。それに伴い竹刀職人の仕事も盛んになり、その時期は材料を購入してから使い切るまでの期間が短くなっていた。特に教育の場において剣道が再び取り入れられるようになったことによって、新学期前になると大口の注文が一気に入るようになったので、竹刀職人の仕事に大きな影響を及ぼしたようである。これに関して、池田氏が保存していた、購入した竹材の領収書⁵³⁾を表 3-5 に、表 3-5 を年ごとに分けたものを表 3-6 にまとめ、図 3-4 に領収書の一例を示した。

表 3-5 池田氏の竹材購入年月日・金額・本数一覧

購入年月日	購入金額(円)	購入本数(本)
昭和 39 年 1 月 27 日	85,200	2,000
昭和 39 年 4 月 18 日	86,430	2,000
昭和 39 年 6 月 28 日	80,000	2,500
昭和 39 年 11 月 22 日	100,000	3,000
昭和 40 年 3 月 17 日	115,000	2,000
昭和 40 年 5 月 28 日	86,000	2,000
昭和 40 年 12 月 29 日	95,000	2,000
昭和 41 年 4 月 6 日	94,500	2,000
昭和 41 年 6 月 1 日	93,900	2,000
昭和 41 年 10 月 15 日	14,400	記述なし
昭和 42 年 1 月 20 日	126,850	記述なし
昭和 42 年 4 月 21 日	123,800	記述なし
昭和 42 年 12 月 11 日	154,600	記述なし
昭和 43 年 4 月 7 日	76,600	記述なし
昭和 43 年 5 月 18 日	332,000	4,000
昭和 44 年 2 月 27 日	206,000	記述なし
昭和 44 年 5 月 20 日	135,000	記述なし
昭和 44 年 8 月 4 日	65,000	記述なし
昭和 45 年 7 月 27 日	100,000	記述なし
昭和 46 年 3 月 13 日	81,000	記述なし
昭和 46 年 3 月 27 日	91,000	記述なし
昭和 46 年 4 月 27 日	50,000	記述なし
昭和 46 年 5 月 15 日	30,000	記述なし
昭和 46 年 5 月 29 日	91,000	900
昭和 46 年 6 月 14 日	48,000	470
昭和 46 年 8 月 15 日	44,000	430
10 月 23 日	78,500	750
11 月 21 日	13,000	記述なし
11 月 21 日	110,000	記述なし
11 月 23 日	75,600	記述なし

表 3-6 年ごとの竹材購入金額・本数(年の記載がある分のみ)

購入年	購入金額	購入本数
昭和 39 年	351,630	9,500
昭和 40 年	296,000	6,000
昭和 41 年	202,800	4,000
昭和 42 年	405,250	記述なし
昭和 43 年	408,600	4,000
昭和 44 年	406,000	記述なし
昭和 45 年	100,000	記述なし
昭和 46 年	435,000	2,550

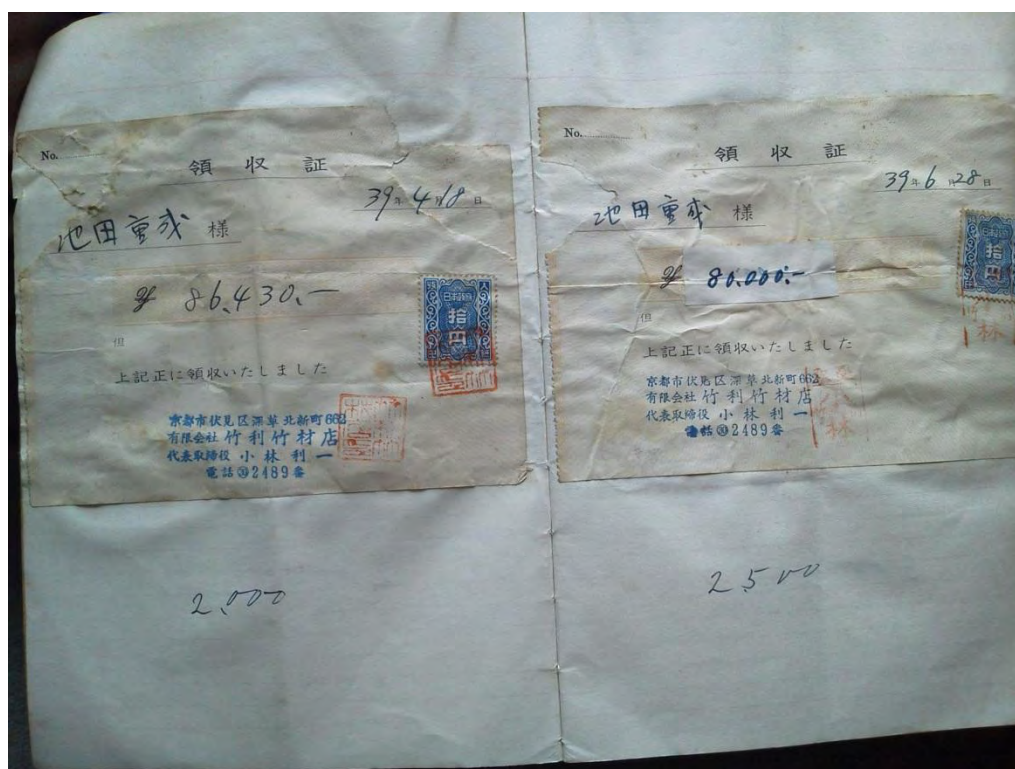


図 3-4 池田氏の領収書写真例(筆者撮影)

表 3-2 を見ると、購入本数のデータがある昭和 39(1964)年 1 月～昭和 41(1966)年 6 月の期間は、一回に 2000 本～3000 本購入しているということがわかる。3-2-2(2)でも述べたように、伊吹地域の竹刀製造は昭和 30(1955)年～昭和 40(1965)頃が最盛期である。その最盛期の時期には、材料となる竹材も一気にたくさん購入しておく必要があったということがうかがえる。同時に、それだけたくさんの竹材を購入しても、すぐに竹刀を製造していたということもわかる。

次に表 3-5 を見ると、記述のなかった年を除いて竹材の購入本数が年々減少していることがわかる。

また収入に関しては、池田氏が「当時は毎月 3 万円の貯金をしていて、一般的な会社員の給料が 3 万無いくらいやったからかなり良かったよ」⁵⁴⁾と話すように竹刀職人は収入が良く、伊吹地域においては、竹刀職人は憧れの職業であった。また、この時期の竹刀職人は竹刀の需要に供給を追いつかせるため、竹刀を量産していたので竹細工などの他の製品を作る余裕はなかったし、また収入が十分にあったため作る必要もなかった。

3-5-2 滋賀県伊吹地域における竹刀製造業の衰退

3-5-1 で述べたように、伊吹町史には伊吹地域における竹刀製造業の起源などについてまとめられているが、衰退の様子についても言及されている。以下に記述を示す。

「四〇年後半からは台湾、朝鮮等から安価な輸入品が出廻りはじめ、しだいに練習用竹刀の需要がおちた。師範級や教室などから特別注文が入ることがあっても、質量ともに注文も少なくなり生業を営むことが出来なくなり、しだいに姿を消すこととなった」⁵⁵⁾

昭和 40(1965)年後半に台湾、朝鮮などが竹刀製造を始めた背景として、昭和 45(1970)年前後から始まった竹の全国的な開花枯死による日本各地での竹材の深刻な不足がある⁵⁶⁾。伊吹地域の竹刀職人が使用していた京都や高島の竹も例外ではなく、やむなく台湾製の竹を輸入して代用した。台湾製の竹は質が日本のものより劣るため材料単価と出来上がった竹刀の質が下がり、出し値が低下したために職人の手元に入ってくる収入自体も減少してしまった。

再び池田光信氏へのヒアリングから得た情報を補足しておくと、輸入品竹刀の販売価格は池田氏を始めとする職人による手作りの竹刀の材料価格と同じであったそうだが、当然使用者は安い台湾製竹刀へ流れていき、徐々に職人手作りの竹刀は需要が減少していき、売り上げが落ちた。これまで竹刀しか作ってこなかった竹刀職人は、別のものを作って収入を補助することができず、だんだんと竹刀づくりを辞める職人が増えていった。また、竹刀は消耗品であることから、竹刀職人は竹刀の修理で収入を得るということがないことも要因の一つとして考えられるであろう。

結果として、現在は竹刀製造がこの伊吹地域や、伊吹の人たちがかつて竹刀製造の技術を習いに行った、いわゆる本場の京都ですら 1 人も職人が残っていないという状況になっている。昭和 59(1984)年の第 1 次指定から指定されていた滋賀県知事指定伝

統的工芸品も、製造者が全員辞めたため平成 22(2010)年の第 9 次指定をもって解除されている⁵⁷⁾。

3-6 竹刀と他製品との比較

3-6-1 他スポーツ用品と竹刀との比較

先にも述べてきたように、剣道は武道の一種なので一般的なスポーツとは違うが、ここでは道具としての竹刀という観点から他のスポーツ用品との比較を行う。

竹刀は、野球のバットや、様々な球技のボールと同様消耗品である。そこで、同じ消耗品である「野球のバット」と「ボール」比較をしていく。

まず、図 3-5 に横軸に価格帯の幅の広い・狭い、縦軸に製品の値段にばらつきがある・ないを取ったポジショニングマップを示す。

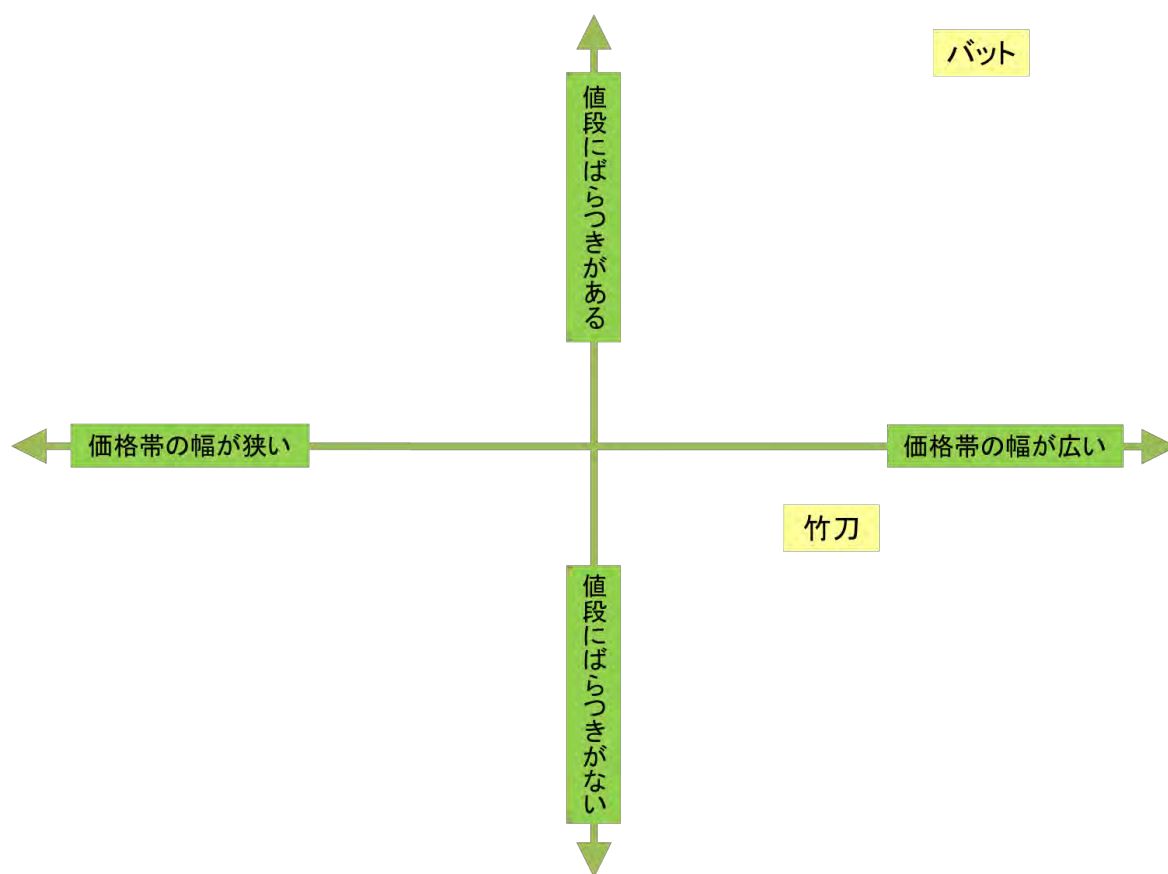


図 3-5 ポジショニングマップ(価格帯の幅の広さ／値段にばらつきがあるかないか)

これを見ると、竹刀はバットよりも価格帯の幅は少し狭いということがわかる。しかし、製品の値段にばらつきがあるかどうかは2つに大きく違いが出ている。つまり、竹刀はバットと比べて、価格帯の幅が少し狭く、値段にばらつきがみられない、ある値段に集中していると言える。

これを基に、図 3-6 と図 3-7 を作成した。図 3-6、図 3-7 は、それぞれ野球用バットと竹刀の特徴をピラミッド状に図式化したものである。

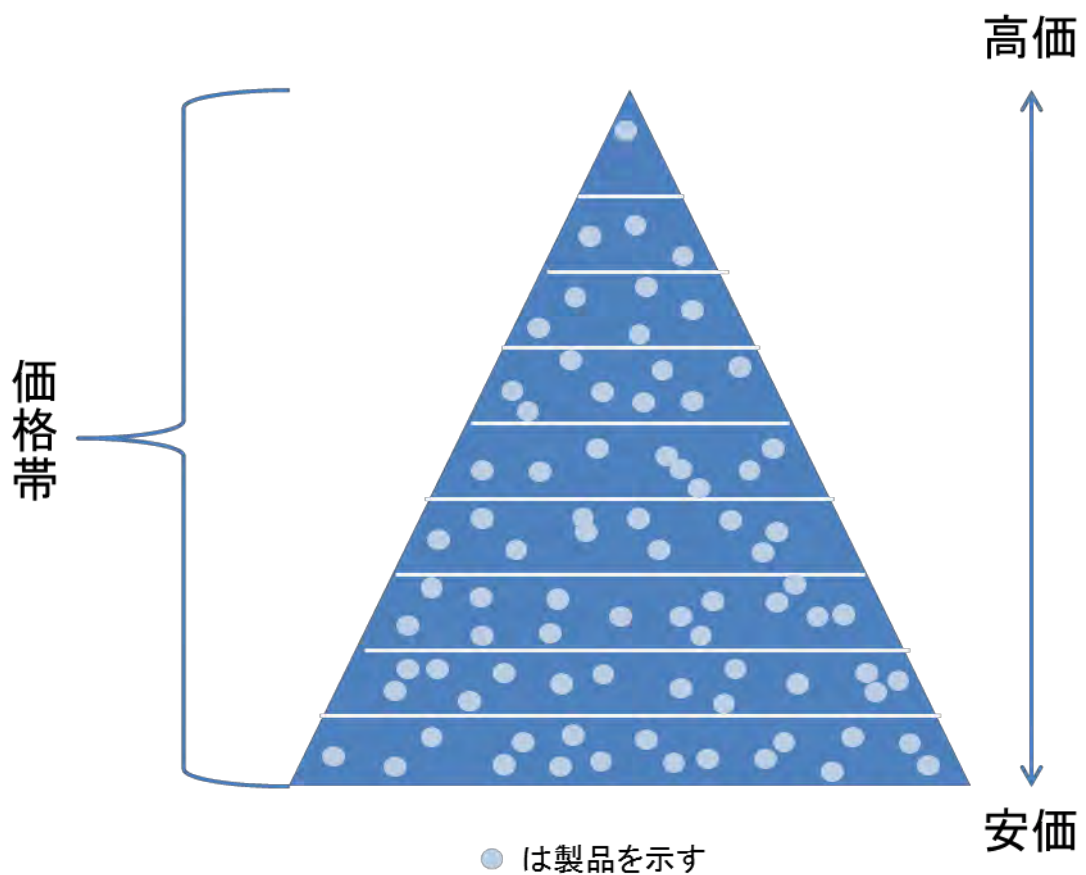


図 3-6 野球用バットの価格帯と製品分布

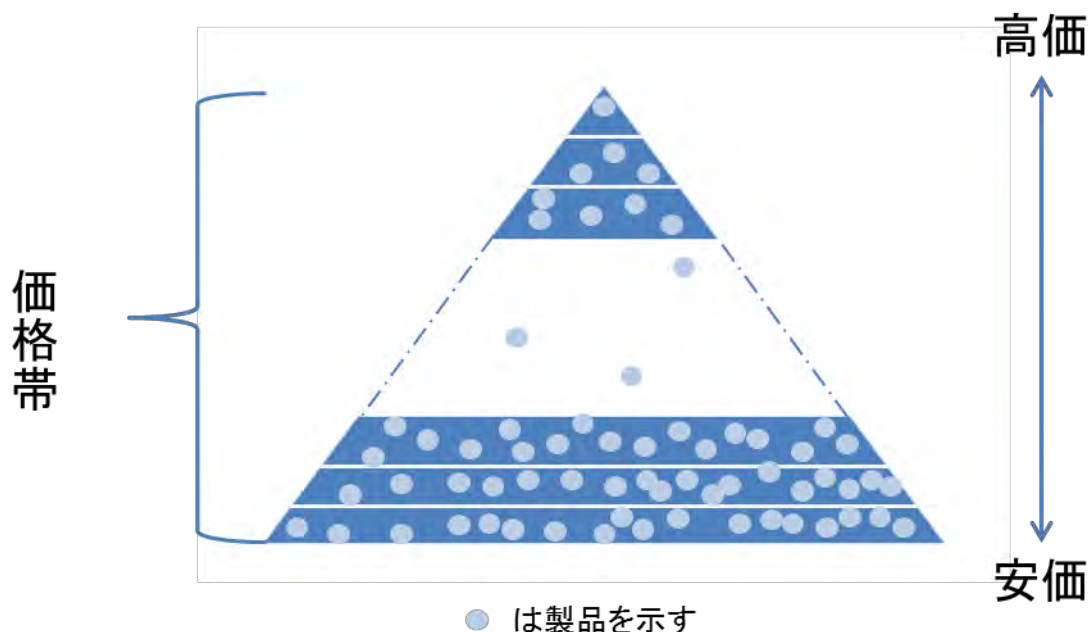


図 3-7 竹刀の価格帯と製品分布

図 3-5, 図 3-6 のピラミッド内の点は、それぞれバットと竹刀を表している。バットはピラミッド内にほぼ均一に点が分布しているが、それに対し竹刀はピラミッドの上部と下部に点が集中している。

これにより、製品を選択する消費者への影響がわかる。バットは幅広い価格の製品があるので、自分の技術のレベルに合わせるなど、商品選択の幅が広がるが、竹刀は安いものは安い、高いものは高いという風な価格分布になっているので、商品選択の幅が狭くなってしまう。

3-6-2 日用品から工芸品になった製品との比較

次に、日用品として使われていたものが工芸品になった製品と竹刀との比較を行う。具体的には、竹刀がその役割を代替している日本刀、兜、お茶立てに用いられる茶碗、つい立の役割から飾りになった屏風、その他日用品から工芸品にもなっている塗碗、扇子の 6 つに竹刀を加え、図 3-8 のポジショニングマップに配置した。ポジショニングマップの横軸は工芸品化されているか、縦軸は人々の生活に根付いているかどうかを取っている。

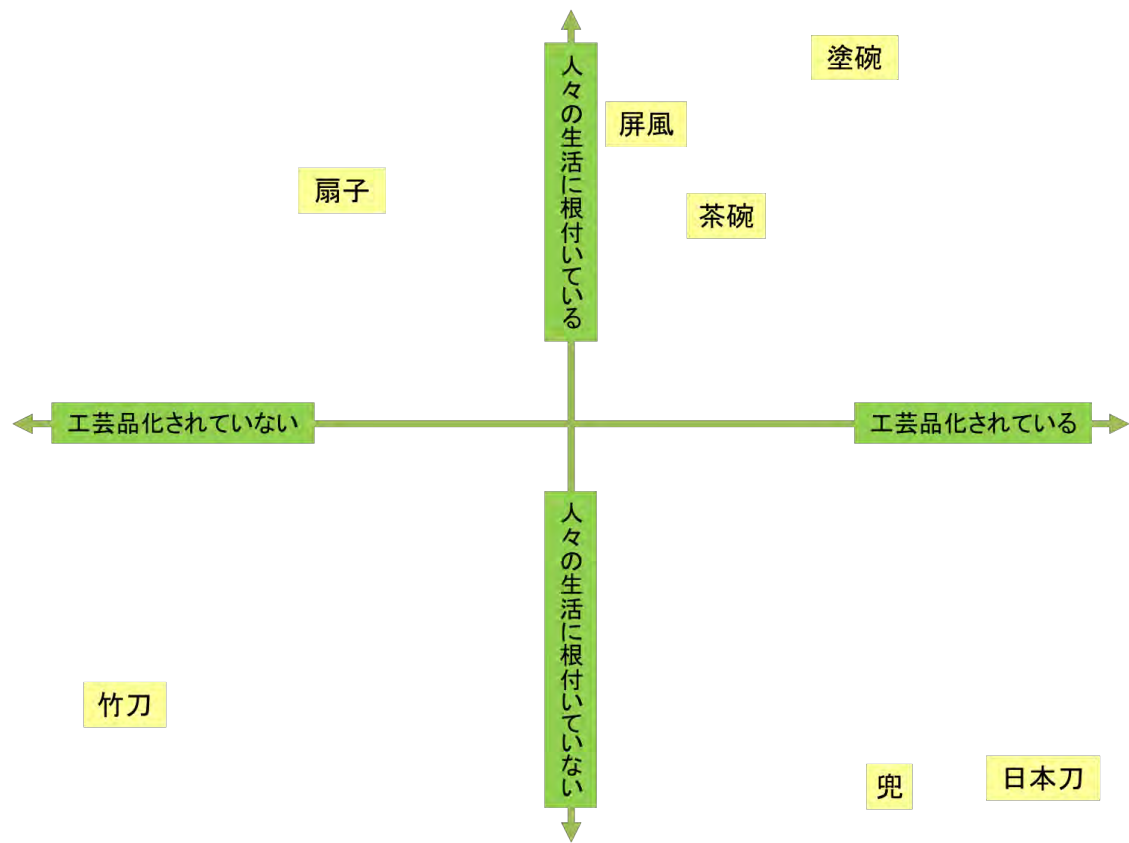


図 3-8 ポジショニングマップ(工芸品化されているか／生活に根付いているか)

図 3-8 を見ると、3 つの群ができていることがわかる。兜や日本刀は、人々の生活に根付いていない、つまり日用品では全くないが、その分完全に工芸品化、美術品化されている。扇子や屏風、塗碗、茶碗の 4 つはまとまっており、人々の生活に特に根付いた日用品であり、ある程度工芸品化されているということがわかる。そして、以上に挙げた 2 パターンどちらにも当てはまらないのが竹刀であり、人々の生活に根付いた日用品にもなれず、また工芸品化することもできなかったということが言える。

参考文献

- 1) 百鬼史訓, 中村民雄: 竹刀, 全日本剣道連盟 (2004)
- 2) 全日本剣道連盟ホームページ 剣道の歴史
<<http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html>>, 2012-01-14
- 3) 全日本剣道連盟ホームページ 剣道の歴史
<<http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html>>, 2012-01-14
- 4) 大塚忠義: 日本剣道の歴史, pp.25-38, 窓社 (1995)
- 5) 加藤幸蔵: 日本における武道教育の史的動向, 東海大学紀要.体育学部, 7, pp.9-13 (1977)
- 6) 加藤幸蔵: pp.9-13, 前掲書
- 7) 大塚忠義: p.33, 前掲書
- 8) 加藤幸蔵: 日本における武道教育の史的動向, 前掲書
- 9) 山口吉昭, 2011-10-15, ヒアリング
- 10) 山口吉昭, 2011-10-15, ヒアリング
- 11) 池田光信, 2011-10-26, ヒアリング
- 12) 加藤幸蔵: 日本における武道教育の史的動向, 前掲書
- 13) 大塚忠義: p.155, 前掲書
- 14) 滋賀県庁収蔵資料, 2011-01-07, 公文書
- 15) 大塚忠義: pp.155-156, 前掲書
- 16) 山口吉昭, 2011-05-21, ヒアリング
- 17) 大塚忠義: p.164, 前掲書
- 18) 全日本剣道連盟ホームページ 剣道の歴史
<<http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html>>, 2012-01-14
- 19) 大塚忠義: pp.172-174, 前掲書
- 20) 全日本剣道連盟ホームページ 剣道の歴史
<<http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html>>, 2012-01-14
- 21) 全日本剣道連盟ホームページ 寄稿「まど」平成 20 年 5 月号
<<http://www.kendo.or.jp/column/250.html>>, 2012-01-14
- 22) 橋本健治<hashimoto@kendo.or.jp>: Re:全日本剣道連盟九段事務所御中, 2012-01-16, 私信
- 23) 松井健: マイナー・サブシステム論(地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究--日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業), アジア・太平洋の環境・開発・文化, 1, pp.23-28 (2000)
- 24) 菅豊: 「水辺」の技術史—水鳥獲得をめぐるマイナー・サブシステムの民族知識と社会統合に関する一試論—, 国立歴史民俗博物館研究報告, 61, p.265 (1995)
- 25) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会: 滋賀県市町村沿革史第四巻, p.238 (1960)
- 26) 伊吹町史編さん委員会: 伊吹町史 通史編下, p.614 (1995)
- 27) 米原市ホームページ 人口の推移

- < <http://www.city.maibara.lg.jp/index.php?oid=80&dtype=1006&pid=56> >, 2012-01-13
- 28) 滋賀県庁収蔵資料, 前掲書
 - 29) 伊吹町史編さん委員会 : pp.611-612, 前掲書
 - 30) 池田光信, 2011-08-23, ヒアリング
 - 31) 池田光信, 2011-08-23, ヒアリング
 - 32) 伊吹町史, p.612, 前掲書
 - 33) 滋賀県庁収蔵資料, 前掲書
 - 34) 池田光信, 2011-08-23, ヒアリング
 - 35) 野上雅代: 炭焼きについて, 金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書, 1990, pp.60-70 (1991)
 - 36) 池田光信, 2011-08-23, ヒアリング
 - 37) 池田光信, 2011-10-26, ヒアリング
 - 38) 織井文雄: 在来箸工業地域の形成, 地理, 13(9), pp.109-112 (1968)
 - 39) 相原基大, 秋庭太: 産業集積における技術イノベーションの実現過程—鯖江眼鏡産地のフィールド調査を通じた予備的考察—, 経済学研究, 58(2), pp.113-130 (2008)
 - 40) 鯖江市ホームページ 眼鏡の歴史, 現状
< <http://www3.city.sabae.fukui.jp/jiman/sangyo/megane/syousai/syousai.html> >, 2011-09-16
 - 41) 須永和博: マイナー・サブシステムとしての観光—タイ北部の山地カレン社会におけるコミュニティ・ベース・ツーリズム—, 立教大学観光学部紀要, 11, pp.53-67 (2009)
 - 42) 池田光信, 2010-12-14, ヒアリング
 - 43) 数馬浅治: 竹刀について, 富士竹類植物園報告, 44, pp.108-115 (2000)
 - 44) 朝日新聞(滋賀), 1984-12-07, 20 面
 - 45) 山口吉昭, 2010-10-17, ヒアリング
 - 46) N 社, 2010-12-08, 電話
 - 47) S 社, 2011-01-05, 電話
 - 48) T 社, 2011-01-05, 電話
 - 49) ジャパン武道用品工業会, 全日本武道具連合会: 竹刀及び剣道具規格, 全日本剣道連盟 (1998)
 - 50) 全日本武道具協同組合オフィシャルウェブサイト 会員一覧
< <http://zenbukyo.jp/index.php?act=memberlist> >, 2011-12-01
 - 51) 西日本新聞 玉竜旗 「竹刀職人」会場で技披露 武道の精神伝承 この道一筋 32 年 大橋さん
< http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/photo/0729/20080729/20080729_0001.shtml >, 2012-01-18
 - 52) 山口吉昭, 2012-01-19
 - 53) 池田光信, 2011-08-23, 私信
 - 54) 池田光信, 2011-08-23, ヒアリング
 - 55) 伊吹町史編さん委員会 : p.612, 前掲書

- 56) 内村悦三：タケを竹として活用する時世に思う，森林技術，784，pp.2-7 （2007）
- 57) 滋賀の伝統的工芸品，2011-10-27，私信

第四章 ライフヒストリーの考察と滋賀県における竹刀製造業のまとめ

4-1 竹刀職人と元竹刀職人のライフヒストリーと人生年表

4-1-1 竹刀職人山口吉昭氏のライフヒストリーと人生年表

ここからは、山口氏のライフヒストリーを紹介した後、人生年表を表 4-1 にまとめる。なお、ライフヒストリー中の空欄部分に図 4-1～図 4-5 を載せていく。これは、ヒアリングの際筆者が撮影した山口氏の作業の様子などの写真である。

<うまれ>

——生年月日教えてください。

山口：昭和 25 年 2 月 6 日。西暦 1950 年か。

——出身...お生まれは長浜ですか？

山口：うん，長浜。

*昭和 25(1950)年生まれなので，
山口氏は現在 61 歳である。

<家族構成>

——ではその時の家族構成は？お父さんお母さん，おじいちゃんおばあちゃん...

山口：おじいちゃんはいなかった，おばあちゃん。兄が二人，姉一人，妹一人。私は三男坊。

——5 人兄弟ですか。

山口：7 人いたらしいんやけど，2 人死んだんや。昔栄養不足で。法事だけはしとる。名前して。

——山口さんだけですよね，竹刀職人なのは？

山口：いや，2 番目の兄貴がちょっとだけやってたらしい。
だから写真もあるわ。やったけど，やっぱそれが...
安いしな。どれくらいやってたか知らんけど，それ
から会社勤めのほうに。

*ここで，竹刀職人をやっていたのは山口氏だけではないことがわかる。しかし，入ってくるお金の安さからすぐ辞めている。

——今も交流があるんですか，みなさんとは？

山口：姉と妹はすぐ近くにおるから。

——たまにあったりとか？

山口：姉はしょっちゅう来る。おかずもって。で，妹は八日市だから。

——お兄さんたちは長浜ですか？

山口：そうそう，二人とも死にかけとる。

＜小学生になるまでの思い出＞

——小学校上がるくらいまでの話なんですけど、自分で
どんな子供やったとおもいますか？

山口：あのね、親父らの話では、泣き虫やったらしいよ。
俺はその部分は記憶ないんやけど、そういう時分は
よう泣いてたらしい。

——やっぱ男兄弟の中で一番下やから喧嘩よくしてとか
ですか？

山口：いや、そういう記憶はないんやわ。年が離れて過ぎ
てるから。

——そうなんですか。いくつ離れてますか？

山口：いくつやろ....

——10 はないですか？

山口：10?もっと超えてる。だって太平洋戦争があったじゃ
ないですか。俺らは後やから。だからみんなあの間
空白があるんやわ。徴兵とか。

——じゃあもう一番お兄さんと妹さんとかはもっと離れ
ているんじゃないですか？

山口：離れてる。妹と俺と姉と、この間は 3 年開いてんね
や。その上の兄貴と姉貴は 5 つか 7 つくらい間空い
てる。でその上が兄貴やから。ほて、遊んだ記憶も
ない。会話もほとんどない。ただ、結婚してからも
う大人だからぼちぼち会話はあるけど、若いとき会
話なんかない。話す内容も違うでしょ。共通点がな
いと話すことがないねん。

*兄弟でも、年があまりにも離
れすぎていると仲良く遊んだ
り話したり喧嘩したりするこ
とがなかったようだ。

——じゃあ兄弟って言ったら山口さんとお姉さんと妹さんという感じですか？

山口：そうそう。ほて女としゃべることなんてないしね。

なんか俺だけ浮いとした感じになってたみたいよ。

姉と妹とは話はすんのや。面倒見たり。俺らは別に妹とか...ただ小さい時分は遊んだりとかはあったけど。小学校くらいは。だけど小学校高学年くらいになってくるともうなあ。今思うと...親父らとも会話ってそんななかったなあ。

——仲が悪いというわけではないんですよね？

山口：悪くは全然ないよ。話す共通点がないから。

ただ親父の印象で残ってるのは、知り合いから映画のタダ券もらうんよ。風呂屋が遠い親戚にあたるわけや。近くのなら。昔風呂屋に映画の古いポスターとか、あるやん？でタダ券が風呂屋に来るわけや、何枚か。で、自分の行きたいやつは行くんやけど、あんま行きたくないやつは。で、日がもう一日か二日しかないやつとかも。で、そういうのをもらってきて連れてったろって。連れてったろって行きたくもないんやけど。ただお菓子買ってもらってバリバリ食べて。昔やったら片岡チエゾウかなんかとかの映画とか。

——子供の頃って見てもそんな楽しくないですよ。

山口：そんな楽しくもなんもない。

——でもお菓子買ってもらえるしって。

山口：そうそう。それくらいの記憶しかないな。

——それは何回もですか？一回ですか？

山口：結構回数あったよ。小さいときな。こっちも知恵がついてくると行かんようになるけどな。

*上の2人の兄弟とは年が離れすぎていて、年が近い兄弟は女兄弟ということで、兄弟の仲では浮いていたようである。

＜あそびと新聞配り＞

——じゃあどんなことして遊びましたか?小学校上がるくらいまで、小さいとき。

山口：途中から遊びの流れが変わったな。というのは、昔は何人かで走り回ったり、探検とか、ビー玉とかね、メンコとか。ああいう遊びをしてたんだけど、車が通るようになってから、友達が一人はねられて大けがしたし。うちの前8号線でしょ?ほて、三菱樹脂ができたでしょ?ああいうので車の流れ全然変わってくるんだから。ほんで今まで遊んでたところ遊べないし。

——じゃあ家で遊ぶようになったんですか?

山口：そうやなあ…あれからみんなバラバラになってきたな…。だんだんと遊ぶ場所がなくなってきた、ほて俺らの下で男の子があんまりおらんかったんや。それかもっと下の子やったんや。

——ばらばらになってから家で何を?

山口：何しとったやろ?学校終わって、どっちみち友達とぶらぶら。まっすぐは帰ってこんかったわな。ほて小学5年から新聞配りしとったから。

——お小遣い稼ぎですか?

山口：いや、そなんじゃない。あの、上の知り合いが中学に入って辞めるから、お前これせえって。2つか3つ年上のな。まあこっちも対した理由もなしにうん、って。だから、学校帰ってきて、それから新聞配りしたでな。

——夕刊ですか?

山口：そうそう、夕刊のな。

* 山口氏は長浜市の三ツ矢町というところで育った。三ツ矢町には昭和 21(1946)年に現在の三菱樹脂(株)の前身である長浜ゴム工業(株)という会社ができ、その後昭和 33(1958)年からは長浜樹脂(株)、昭和 37(1962)年から現在の三菱樹脂(株)の工場がある¹⁾。山口氏はこの工場の向かいにある県道 556 線(旧国道 8 号線)を挟んで反対側に住んでおられた。そのような環境であったので、車の普及と工場の設立によって遊びの様子や友達付き合いがガラッと変わったようだ。

——それは無償ですか?

山口：ううん，無償じゃない．そんなもんお菓子ちょっと買ったら終わり．

——それは毎日やってはったですか?

山口：そうそう，毎日で，夕刊だけやったから日曜は休み．

——じゃあ日曜日は何をしておられたんですか?お友達と遊ばれたり?

山口：そんな記憶もないな．小学校くらいにやってたのは釣り．朝4時ごろ起きて琵琶湖へ．

——そういう釣りの道具って自分で作られるんですか?

山口：いやいや，ほんで，自分の新聞配るやろ?その金で買った．釣竿買って，針も買って，エサも買って．

——ほかの友達はどうしてたんですか?ほかの子も新聞配りしてたんですか?

山口：うん，それもいた．ほてもっとまじめなやつ…まじめっておかしいけど，牛乳配りするやつもおった．
あれは金になるんや．

——朝早いからですか?

山口：朝早いのもあるし，自転車ですっと積んでかなんでしょ．重いから．そういうやつもおったよ．

——そういう釣竿買えるような子と釣りに?

山口：いやいや，一人．そいつらは何やってるか知らん．

——メンコとかは?

山口：新聞配り行くまではそうやって遊んでた．新聞が，薄い紙のタイプで．それやとったから，時間拘束されてしまうわね．そんなもんやな，小学生．ほて向かいに同級生がいたんやけど，勉強のほうに走るから．小学校の高学年くらいから遊ばんようになったわ．

*この時代に，小学生が新聞配りや牛乳配をするのは一般的だったようである．

<竹刀職人の父>

——小っちゃい頃お父さん竹刀職人しておられたんですよね?

山口：あの、マッカーサーのあれが下りるまで、マッカーサーの剣道してもいいっていう許可が下りて、

——すぐ再開されたんですか?

山口：と思うよ。自分の本業ができるんやし。あの、ほかのことなんかやってた記憶がないから。

——池田さんも言っておられました、昔は米原にも長浜にも高島にもおられたって。

山口：そうそう。俺は高島の人知らんのやけどな。名前しか。

——作ってやあるの見たりしたんですか?

山口：うちの裏でやってたから。そんなじっくりは見てないけど、流力的には見てるよね。朝こういことして、昼はこんなことして、夜はこれやったな、あれやったらもうじき終わるんやなって。

*後にまとめるが、山口氏は職人になるまできちんと竹刀に関わったことはない。ただし、父親が家で竹刀を作っていたことから、幼いころからの作り方の流れは見ている。

<剣道>

——してはらへんのですよね、剣道は?

山口：うん。田中もやってたけど辞めた言うてたやろ?

——そう、辞めたって言うておられました。

山口：やっぱな、これすると上下関係があるでしょ、この世界。

——そう、作ってって言われると断れへんし。

山口：文句だけ言われるし。だからやってる人はしょっちゅう喧嘩してた。自分の好みがあるでしょ?

*ここにある「田中」というのは、京都で塗り胴職人をされている田中敏和氏のことである。山口氏と田中氏は仲が良く、よく情報交換をするそうだ。竹刀職人である山口氏に限らず、山口氏の知り合いの職人たちも剣道はしていないことのほうが多いのだそう。理由は、剣道が上下関係を大事にするというところにあると思われる。特に山口氏は自分の仕事に対して文句を言われるのを嫌うようである。

<竹刀との関わり>

——別段竹刀触ったりはしてなかったですか？

山口：小さいときは、触ったことはあったと思うけどそんな記憶ないな。竹は触ってたよ。いらんやつを。弓つくっとったから。

——それで遊んでたんですね。

山口：うん。子供の遊びなんかそんなんしかない。

——それが小学校上がるまでですか？

山口：小学生くらいやな。小学校の低学年くらい。

<小学生のときの様子>

——じゃあ、小学校くらいの時ってどんな子でしたか？

山口：...普通じゃないかな？特別活発でもなかったし、リーダーシップ取ったりするようなこともなかったし、みんなとふつうに遊んでたし。普通に活発な子。

*竹刀との関わりは、記憶にな
いくらの関わりしかないよ
うだ。ただ、竹自体は弓を作
るのによく使っていたという
ことである。

<中学生>

——中学校に入ってからどう変わりましたか?

山口：ころっと変わった。今で言う不良になったな。

違うねん、俺はな、何もしてないんやで?でもなんや知らん目つけられんねん。何か問題があると俺のせいになるし。中学入って...2月くらいからなんや知らんごちゃごちゃなってきた、2年になったらもうあかんようになったな。で、3年になるでしょ。俺は別に何にもなりたくないんやけど勝手に番格に上げられるわな。ほてよその中学ともめるし。

で、俺学校行くやん。向こう(教師)は出席とるやん。それもいてるのにみんな欠席になるんよ。

ほて学校でほかのもんが色んな悪さするやん?ガラス割ったり、鍵壊したり。全部俺のせい。ほて教師とも喧嘩するしな。

山口：だからよう保健室で寝てた。妙に気が合う先生いるやんか?前仲の良かったのが保健室の先生と国語の先生。中一の時の担任やったんや。まだその時はよかったんやけど、急に辞めたんや。

んで、違う先生が来てまた仲悪くなって。そいつがどスケベやったんや。自分(筆者)らの時知らんけど、昔持ち物検査ってあったわけ。持ち物検査して、何もおかしなもん持ってへんやろかって。昔はナイフくらいのもんしかあらへんやん。でも女の子なんて持つわけないしな。今は知らんけど昔セーラー服あったやん?で、胸のところに小さいポケットあるやんか。入ってたらわかるのに指突っ込んで遊んどるんや。まあほんで俺は見てるわな。笑いながら違うほう行って。で、そうやって見てるとあほらしくなってきた、「嬉しいんか」って言いよったら、それから(目を付けられるようになった)。ほて他の先生にも言うやろ。

* 中学時代は山口氏自身(悪い意味で?)思い入れがあるらしく、とても饒舌に当時のことを語ってくださった。

山口：でもおばさん先生は仲良かったんや。ほんで、自分ではわからんのやけど、小学校の点数があるやんか？それで(入学時に)クラス分けしたんやて。俺が一番いいほうのクラス入って、でも終わりごろからおかしなってきた... でも勉強せえへんわな。テストみたい書かへんもん。

山口：ほて、保健室の先生が、今はどうや知らんけど昔知能指数テストっていうのあったんやけど、それ見て「あんたなあ、あたしびっくりしたんやけど、あんた(IQ が)130 あんねやで」って。「あたしあんたがほんなあるって思わなかったんやけど、あんた、やったらできるんやで」って。っていうてもそなん言われても 130 の意味がわからんもん。130 が普通よりちょっと上なんか、もっと上なんか全然わからんやん。「130 あるんやで、賢いんやで、ちゃんと勉強しい」って。

山口：ほやけどアカンわね。勉強する環境じゃなかったし。でも今から思たら 130 やったら、まじめに勉強したらそこそこのとこいけたんやなって。ほんで言うんやで、俺勉強してないからバカやねんで。けど根本バカとは違うよって。人の話と分別つけて話すし。やればできる子。

*IQ の平均値は 100 であるので、130 というとかなり良い値である。

<中学時代の過ごし方>

——じゃあそんな中学生時代はどんなことをして過ごしましたか?

山口：いや、中学でも新聞配りしてたから。ほんで、中学で辞めたんよ。また妙なもんで、次いるやんか?3年生とかな。なんか妙に俺のとこくるんやわ。俺もう辞めてほっとしてたんやけど、断れんような感じもあつたし、まあええわと思って。

——三年間ですか?

山口：そうそうやってた。結構まじめなんやよ。受けたことはきちとしてるから。だからクラブにも入っていない。クラブ知り合いおるから、遊びには行くで。最初は体操部に入ってたの。

——辞めたんですか?

山口：今は知らんけど体験的なのに入って、ほて辞めたの。バク転の仕方とか教えてもらって。できるようになったんやで。

*一般的には新聞配達は小学校までで、中学に上がれば年少の子たちに引き継ぐそうだが、山口氏は中学も3年間新聞配達を続けた。このような言葉から山口氏がまじめであること、引き受けたことは最後までやり通すという責任感の強さがうかがえる。

<卒業後、一番最初の会社>

——で、中学卒業してすぐ就職されたんでしたっけ?

山口：うん。

——そのままもう名古屋ですか?

山口：あ、一番最初はね、自動車修理工場。それは親父の兄貴の知り合いで。ただ、俺はシンナーとかあの類がアカンのや。塗装するでしょ。俺合わんわって思っ。すぐやめたんや。あれ頭くらくらするでしょ。やっぱ合わんのやって思っ。長期でおったら迷惑かかるし。一週間ほどで辞めたんや。

＜二番目の会社＞

——じゃあ辞めはってから名古屋，愛知ですか？

山口：ううん．いや，ほんで，仕事して，会社行って，会社で喧嘩して辞めて．

——その喧嘩した会社は滋賀県の会社ですか？

山口：あの…千代田ミシン．彦根のね，東沼波か．もう潰れたらしいけど．

——何の仕事してはったんですか？

山口：ミシンを作る仕事．あれも工程がいろいろあってさ．精密なほうと，いものかたがあってそれを広げたり．で，こいつらは気が荒いのよ．重いもんもつでな．女の方は繊細なほう行ってる．塗装とか．

——何が原因で喧嘩されたんですか？

山口：気の合う人間がいるやん？その中の人間がやられるやん，喧嘩して負ける．俺が仕返しする．またそいつらと仲良くなるやん．でまたやられる…の繰り返しで会社が手焼いてた．あと，気の合うやつも死んだでな…日本脳炎で．あいつは１つか２つ上やったで18か19．で，事務所の女の子も仲良かったしで俺らも3人3人であっちこっち遊びに行ってたんやけど一番仲良かったやつが日本脳炎でおかしいなって言って．でも治るやろって．でも死んだぞって．そうすると気が落ちるやん？

——それもあったんですね．

山口：うん．いろんなことがある．

＜三番目の会社＞

山口：彦根の千代田ミシン行って、辞めて、名古屋の剣道着とか柔道着とか作ってる会社があるのよ。親父の知り合い、取引先でもあるんやけど、そこに姉も勤めてたのよ。

——それはお父さんの知り合いやからって行ってはったんですか？

山口：と思うよ。要は仕事関係の。姉は事務をやってたんや。俺は工場で働いてて。で、そのまたな、工場長を殴って。いやな、俺は俺なりの理由はあるんやで。寒いでしょ、冬にね。ストーブ付けるやん。向こう(工場長)は経費節約で(付けさせない)。でもみんな寒いって言うてるんだから、かまへん、俺付けたるってつけて。どうやこうや言って。そやけど先殴ったのは向こうやしね。先やけど倍返して。鼻血出しながらお前クビやって。辞めたるわって。

——それもどれくらいおられたんですか？

山口：どうやろ。一年はいなかったと思う。そんなもん。ただ...津軽弁...あそこな、青森弘前から集団で仕事来んねん。女の子がな。で、入ったときはみんな喋っとるん何言うてるかわからなかったんや。ほやけど、こっち喋ってくるときはある程度標準語喋ってくるから、その時期が終わって、集団就職で若い子が入ってきたんや。ああいうのはなまりが強いし、標準語も少ないし、ああ、余計わからなかったって記憶があって、それからしばらくしてからたぶん辞めたから、下手したら1年半くらいいてるかもしれへんし、いなかったかもしれへんし....

——2年はいてなかったということですね。

山口：そうそう。そういう記憶がある。大雑把にな。で、それからまた親父に引っ張り戻されて、そして仕事をちょっとしてたんや。親父の仕事を。

<一度目の竹刀職人>

——竹刀ですか？

山口：うん。嫌やったんやけど。

——作るほうですか？

山口：そうそう。

——この時期に初めてですか？

山口：そうそう。いや、親父がこうせなあかんって言ってたんや。だからやって。ただそれも...親父も昔の人間でしよ。初めのころは家もあるし、飯も食わしてやってるんやから、あの時は最初にもろたのが三千円やったかな。で会社に行ってる人間が一万五千円から一万八千円もらってるわけや。当時ね。で、しばらくしてから、3か月か4か月経ってから五千円になったんや。でもそれじゃ遊べへんわな。でそれからまたしばらくしてから次八千円になったんや。でも半分やわな。で、その時分に毎晩不良仲間な、それと集まってなんや知らんけど目つけられるんやな。いろいろ問題あって家出たんや。

——家出。

山口：うん、家出。

*三度目の名古屋の会社を辞めてから、山口氏はお父さんに引き戻され竹刀職人の仕事を手伝っていたようだった。このことから、山口氏は今までに2回竹刀職人になっていて、現在はそのうちの2回目であるということがわかる。しかし、この一回目の時は賃金が3000円～5000円と、一般的な会社員の3分の1以下だったため、満足に遊べなかったという。



図 4-1 柄をやすりで削って整える山口氏

<家出、四番目の会社、結婚>

——で、家出してどこ行かはったんですか?

山口：名古屋行ったん。やっぱな、どっか知ってるとこ行かんかったら身動きとれんやん。大阪行っても。

それからそこで、名古屋で錦っていう場所があるんですよ。そこ問屋街。そこで働いて。で、逃げた女房もそこで働いてたからそこで知り合って。

——で、結婚しよかってなってっていう感じですか?

山口：結婚しよかって...子供できたんや。わかりやすいやろ?ほやけどな、その流れで結婚したんだけど、結果的に嫁さんが生理不順で生理が止まるやんか、で子供ができたって。そうじゃなかったんや。「あなた...子供はできてないみたい」っていう。あとからの話やけど。そんなもん出来とると思うやん。今やったら試薬にとってわかるけど、昔はそんなんなかったから。ほて、名古屋やとやっぱ家賃とかあるし、給料も安いし、んで住みにくいと思って。田舎のが住みやすいと思って。こっち来たわけ。

——それはなんで近江八幡なんですか?

山口：いや、姉がこっちで結婚してたから。別に俺が姉を頼ったわけじゃないんやで。親があいつに任そうって。その流れ。その後に結婚して、住んでて。

*家出をした後、見知った土地ということで三番目の会社があった名古屋に向かったという。現在は離婚されているが、そこで以前の奥さんと出会ったそう。結婚するに際して、名古屋は家賃などの問題があり、地元滋賀に戻ることにしたそうだ。

*親心としては少し心配なところがあつたのか、姉が近江八幡で結婚していたのでそっちのほうに住ませたようだ。

＜五番目の会社と六番目の会社＞

山口：それで段ボール会社行ってん。大王製紙の。あれの流れで。

ほんでその後に引き抜きで、竜王スケート場の前に竜王パッケージって会社あったんや。マックスファクターの化粧品のパッケージの会社が品川かどっかから野洲に移転してきたん。でそれにつれて下請けも一緒に移転してきてん。

——それに引き抜かれて。

山口：(職人が)死んだりしてるから。技術職やし。で、移転してきたから職人いないでしょ。だから引き抜かれて。それももめたんやけど。退職金やらんぞって。でもどうしてもそこもいるし。で、そこにずっといたんやけど、景気が下がるじゃないですか。で、交通事故にあって。ちょっと入院したら、帰っても仕事ないのよね。景気悪いし。だからもう辞めるわって言って。で、最初は竹刀も作りの、会社も行き、ってアルバイト感覚でしようと思ってたんやけど、両手じゃアカンて。一人前になれんって親父が。じゃあこっちするわって。

* 六番目の会社を辞める前、山口氏は交通事故にあっている。それに加え、その頃景気も悪く、小さい会社だったために人手を切ることもしていたので、居づらくなったというのが会社を辞めた理由である。

* 景気が悪く収入が思わしくなかったのか、最初はアルバイト感覚で竹刀職人をするつもりだったそう。

<父に弟子入り>

———すぐもうずっと作ってていう形ですか?

山口：半年くらいね、親父のところで。通うのしんどいし、5日くらい親父のところにおって、ほて帰ってきて。月曜日になったらまた行ってって。帰ってきてほしなかったかどうかわからんけど。半年くらい行って、一応形になるようになってから自分でこっちで始めて。作ってまた親父のところに持って行って。夜。親父が出荷して。さっき言った単価で。で、親父も若干は銭があったんや。2,500 円でしょ、俺が 1,500 円あるやんか。で材料代引いても月 10 万くらいあったわけ。

———その時どのような指導がありましたか?

山口：俺は見て覚えた。自分で言ったら笑われるかもやけど、どの職人でも優秀な人ほど見て覚えるからね。本当に難しいところだけを聞いて、一人前になっていくの。できない人はいつまでもそのまま。

<台湾竹>

山口：でその時分...俺が向こうに習いに行ってたやんか。それより 5, 6 年くらい前かな?逆算して。それくらいから台湾製が入ってくるようになったんや。大雑把にな。当時はもの悪かったんよ。だけど安かったわね。だけどその時分はマダケがいつぺんに全部枯れたから。だから台湾やむなしって。

———その時はじゃあ山口さんも台湾の竹を使っておられたんですか?

山口：そうそう、台湾竹。

*毎週月曜日～金曜日はお父さんの所で竹刀づくりを学び、週末は近江八幡の家に帰る、という形で半年ほど弟子入りをしていた。半年で一人前のものが作れるようになったというのは、竹刀職人になるのが 2 回目だったことはもちろん、小さい頃から父親の作る様子を見てきたことがあると考えられる。

*当時の出し値が 2,500 円で、山口氏の取り分が 1,500 円であったので父親の取り分(賃金)は 1,000 円であった。

*竹刀づくりを学ぶにあたり、上にある通り父親から具体的な指導はなかったそうだ。

*山口氏が職人を始められたのが昭和 55(1980)年前後なので、だいたい昭和 50(1975)年頃から台湾製竹刀が流通するようになったという推測ができる。

*「やむなし」という言葉から、当時の人々は安いから喜んで台湾製竹刀に移行したというわけではなく、マダケがないので仕方なく台湾製ということだったようだ。

<マダケへの転換>

——じゃあそれからどれくらいでマダケに戻されたんですか?

山口：俺が始めて...5, 6...?ん?まあ仮に俺が始めるとするやんか. 親父に習ってたときな. あれから 1 年ぐらいからマダケまたあった.

——じゃあ始めてから 1 年くらいで?

山口：いや, マダケはあったんだけど, 単価的にね. やっぱどうしても店は安いほうでいくし. あの時台湾竹って安かったんよ. だけどたまたまマダケがあって俺が作ったら吉昭お前マダケ作れるんかって. 作れるんかって, 俺作ったやんって. (マダケでは)作れんと思ってたらしい. 性質が違うから. でそれからマダケ入れよかってことで. ほんで俺が一番最初に... 喧嘩して連れてこられた時は高島から買ったの. 高島もマダケ. だけど, 高島の河原に今でもあるんだけど, 昔はマダケいっぱいあったわけ. でもそれをモウソウに植え替えたの.

——なぜ植え替えたんですか?

山口：高島は扇骨の町でしょ. (モウソウは) まっすぐだし. 単価も安いし. ほて肉も厚いでしょ. 先のほうが余計使えるわけよ. ほんで, だから昔割合はどんなもんかわからないけどぐーっと取っちゃったから. モウソウのが安いし. 作りやすいし. そういう流れで変わってしまって. 今でもあるのはあるのよ. だけど昔ほどないわな. だから俺がこっちでやってる時でも高島から入れてたよ, 材料は. 今でも入れようと思ったら入るよ. だけどそんなに仕事もないしな. ほんで高橋さんが辞めたから業者が取ってくれて来るし.

* 山口氏が竹刀職人を始める 5, 6 年前に開花枯死が起こって海外製竹刀が入ってきたということなので, 合わせて考えると 7 年前後, 昭和 52(1977) 年でまたマダケの生産が始まっていることになる. ただ, 会話にもあるようにまだまだ単価的に台湾竹と比べると高かったようで, 竹刀づくりがマダケに戻されるようになるには時間がかかったと考えられる.

* 山口氏の言葉から, 高島(滋賀県西部地方)の植生が, 地場産業である扇骨づくりに力を入れるために人の手によって帰られたということがわかる.

* ここで出てくる「高橋さん」というのは, 山口氏の実家の近くで竹刀職人をされていた方. 昨年夏に引退された.

＜竹の購入＞

——材料の竹はどこで買っておられるんですか？

山口：京都のね，泉涌寺にある業者．そこは本来扇子の骨の業者なんやけど，扇骨の竹って，上の節の長い，細いところしか使えんのよ．だから，下の部分って捨てたん．逆に竹刀は下のほうの節の短いところを使うから，持ちつ持たれつの関係やな．

山口：あと，使う竹は芽が出てから３年から５年経ったモンな．で，これはその親父さんから聞いたんやけど，あんな長い竹，どうやって何年経ったか見るんやって言ったら，竹のそばに目が出た年の干支を書いて目印を指しとくんやって．

*山口氏からすれば，竹材を売ってくれる大事な取引先，扇骨業者から見れば廃棄物を買ってくれる大事な取引先というように，持ちつ持たれつの関係が見える．

<労働時間>

山口：で、最初はまだ職人いっぱいいたから高くは売れないわな。まあそのうち人も減って、ものも上がってくるやろって思ってたんやけど、職人減ってもなんも変わらん。ほやけどまじめに働いてたんやで。朝だいたい8時ごろから夜8時9時まで。毎日。休んでないで。1年365日で、朝から休んだっていうのは正月三が日か四日くらいのもん。盆も仕事よ。日曜日も仕事よ。

<竹刀職人全盛期>

——山口さんの中で竹刀づくりの全盛期ってどれくらい作っておられたんですか？

山口：俺の全盛期は毎月200本作ってたからね。というのもそのときは作るだけで、親父が判押したり出荷してたから。夜長浜に品物持って行って。だから年間2400本やね。



図4-2 柄頭を削り、竹刀を仕上げる山口氏

*かなりの労働時間である。朝8時ごろから夜8時9時までだと、1時間の休憩をとったとしても11時間働いていたことになる。しかも、一日休んだのは正月のみと、時間・休みの両方から考えて当時の竹刀需要が多かったということが言えそうである。

*全盛期に毎月200本作れたのは、竹刀自体を作る作業以外に必要な焼き印押しや出荷などを父親がやっていたからだということがうかがえる。

*1984年12月7日号の朝日新聞滋賀版に、山口氏の父親である山口政三氏の特集が組まれている²⁾。そこには月産約800本で年間生産額が1200万円と書かれている。山口氏が月産200本ということなので、4分の1を山口氏が製造していたことになり、年間生産額を山口氏だけで考えると、年間300万円ということになる。

<現在の出荷量>

——年間どれくらい作っておられるんですか??

山口：年間の製造量かぁ.... それは時期によって違うからなァ. 今はものすごい少ないぞ. 今年でいえば全盛期の3分の1やね. 買う人が景気悪いから安物のほうに移行するやろ?小売りになると当然高くなるしね.

今は年間1000本もないもん. 俺だけじゃなくて, 他の職人さんみんなそうだった. この前九州の業者関係としゃべっていたら, もうあきません, と言っていた. 注文が小口だから.

——来ても三本くださいとかですか?

山口：うん, だから俺は5本以下はせんぞ, と言ってる. というのも1本注文きて, それに重さやなんやら言ってくるから. 細いのが一本というのならそれで構わないけど. 重さは関係ないから. でも重さまで言われるから大変だよ. お客様の気持ちはわかるけど, わかるけども作るほうの身になってみろって.

*会話にも出ているように, 武道具関連の店や職人が店じまいをするケースが近年増えている.

*山口氏のもとに送られてくる竹刀の注文は, 単なる本数だけでなく規定の長さ, 重さをクリアした上に, 持った時のバランスや竹刀の太さまで指定されている. それらの注文を一つ一つ小口で聞くことは採算が合わなくなるそう.



図 4-3 竹の曲りを整える「矯め」の前に竹をバーナーであぶる

<出し値>

山口：あの時でね、売値がね 2,500 円やったんよ。2,500 円で、材料費があんときまだ 200 なんぼとかやったんよ。そこから運賃とか工賃とか親父の手間もかかるし、俺が一本あたり 1,500 円やったんよ。俺の工賃が 1,500 円。だから 200 本作って月 30(万)でしょ。
だけど労働時間から考えたら合わんぞ。だけど高橋さんはもっと安かったんや。うちが 2,500 円でやってたとするでしょ。あそこは 1,800 円とか。
ほんであと 500 円高く売ってりゃ月 10 万増える訳やん。親父が死んで、ちょっとしんどいし、っていったら俺の知らんところでみんな 500 円あげたもん。何にも言わんと。取引先が。最初に言うときって。親父は昔堅気の間人やからな、あんまり金勘定が好きでないんやな。だから、もっと高くしとったところは儲けてる。で、小売りやったらあれから 1,000 円上げたって、いいよ一って。ほな俺よっぽど安くやってたんやなって。
ほやけど池田とか、向こうの人はもっと安かったんやな。俺も知らんかったんやけど、あとから聞いたらもっと安い。山の衆は 1,400 円 500 円。出し値がね。そっから材料費引かなアカンでしょ。でもみんな辞めるに辞められんしやってたけど。

*この会話を見てもわかるように、職人によってかなり売値に差があったようである。

*もう 500 円でも売値を上げられたところを上げなかったのは、山口のお父さんがこのような性格だったからだと考えられる。

*先に職人によってかなり売値に差があったと書いたが、池田氏を始めとする伊吹地域で職人をしていた人々は、その中でも特に安い売値で竹刀を納めていたようだ。

＜戦前・戦後の職人＞

——でも一時期すごい儲かってたんですよね？

山口：あれは戦前だけ。

——戦前だけなんですか？解禁されてからすぐ位にピークがあったって。あれは、ピークはピークやけど儲かってないんですか？

山口：あの、俺が聞いている話では、商売的なことと言うと剣道したい人はいっぱいいるやん。でもみんな防具は持ってるんよね。でも竹刀は持ってなかったわけ。だから業者は一応ほかさんと(捨てないで)置いとくわな。それを曲がってるからぎゅーっと押して、それがみんな売れたって。で、子供がしたから。ほんで、あの時はまだ外国産がなかったから。まあいえばすべて国産で賄ってたでしょ、时期的に。

——で、この時期がよう売れて...

山口：そう、業者が儲かった。

——職人は別に儲かってない？

山口：職人は儲かってない。職人が儲かったのは戦前だけ。軍隊納め。そやけど軍隊納めでも、作ってる職人の人の利益はないわけ。職人を扱っている職人…元締めっているやん。だから要するに戦前の人が儲けてるわけや。だから戦後はアカン。戦後始めた人って…そんなおらへんやろ。

* 剣道解禁直後、剣道をしたい人がたくさんいたが、するための道具(特に竹刀)は禁止になった際にすべて処分しなければならなかったの、隠しておいた曲がった竹刀を無理やり戻したような品でも売れたようである。

* 後に示す池田氏のライフヒストリーや第三章の文献調査によれば、戦後間もなくから海外製竹刀が入ってくるまでは職人も儲かったということであったが、山口氏からは反対の意見が出ている。職人の利益よりも業者の利益のほうがはるかに上回っていたことや、伊吹地方だけ特殊だったなどが考えられる。

* 戦後に竹刀づくりをしていた人は、ほとんどが戦前からやってくる人であり、その中で戦後から始め、一人前のレベルまで続けられたのは池田氏や山口氏などごく少数である。

＜竹刀職人を辞めずに続けてこられた理由＞

——じゃあ、そんな中山口さんが今も竹刀職人を続けて
いられるのは何ですかね？

山口：それは組合に入ってたから。何でかって言ったら、
組合に入れば情報交換できるから。情報交換で
きることやね。俺ら関係ない話でも、物の流れを読
むために入れとくんよ。直接関係なくても、結果的
に関係してくることもあるしね。どこが何をやろう
としているとか、誰と誰がタッグを組んでるか
とかがわかれば、あ、じゃあ物の流れがこう変わるな
ってというのがわかるし。安物があればどう対処して
いくとか。職人も言えば商売人だから、そういうの
を考えんといかんのよ。あとはほかの奴と話すとき
に話の話題にできるやんか。組合に入れば会員
とそのつながりで人間関係ができるから、いろいろ
情報が入ってくるのよ。あと、顔が広がれば取引先
も増えるしな。

——じゃあ、山口さんにとって組合というのは竹刀職人
を続けていく上で欠かせないものであったと。

山口：まあ最初はね。ある程度つながりが広がったらあとは
なくてもいいけどね。

*この組合というのは、「全日本
武道具協同組合」というもの
である。これは武道具制作メ
ーカー、職人、材料屋、小売
店からなる団体で、現在東日
本で 61、西日本で 53、九州・
山口で 22 の会員が登録して
いる³⁾。

*ここで山口氏は、山口氏にと
っての組合について話してく
ださった。組合は商売上欠か
すことのできない情報を手に
入れるための人間関係を築く
場であり、なくてはならない
ものであったと言っている。

*加えて山口氏は、顔が広がる
ことで販路が広がるとも言っ
ている。竹刀が足りていない
武道具店が山口氏の知り合い
に相談し、そこから新しい取
引先になるということもある
そうだ。狭い業界なので、組
合の役割は大きいということ
がうかがえる。

*つながりを持っていなかった
竹刀職人を初めてすぐの時期
は、竹刀職人を続ける上で必
要な情報を得られる情報源と
して、組合は欠かせないもの
だったと振り返っている。し
かし、つながりが十分に広が
ってしまえば、あとは組合抜
きでも付き合いがあるので、
別になくても大丈夫だという。

——最初はゼロからのスタートですもんね。

山口：そら最初はしんどいんよ。だってみんな初対面なわけだから。だから、俺はそういう時バカになんねん。知ってることでも知らないフリして相手に教えてって言えば、相手と会話できるでしょ？そこから仲良くなってって、今度はその相手と仲良いやつが話してる時に中に入っていけるでしょ。

——そうやって輪を広げていくわけですね。

山口：そうそう。まあ、バカになるってったってほんまのバカになったらアカンから、中の下くらいにしとくんやけどね。あとは肩書きを出さないこと。たとえばアンタなんかでも、大学生なんて肩書き出したら、向こうはちょっとむっとするから。だから総会とかそういうなんには出席するようにしてる。会えるときに会っとかないと。友だちの友だちはみんな友だち、じゃないけど、みんな大事な情報源。情報がなかったら判断材料がないっちゃうことやから。情報って大事よ。

——じゃあ、情報をもらう代わりに情報を教えるということもあるんですか？

山口：そらそうよ。俺が知りたいことあったら、電話して聞くもん。仮に電話した奴が知らなくても、そいつが知ってるやつにかけて聞いてくれるもん。そのかわり、俺もなんでも教えてあげる。

*初めて組合の総会に出席したときに取った作戦だそう。

山口氏は、組合に入る前から情報交換というのは大事だということがわかっていたようだ。

*今まで築きあげてきたつながりを大事にするためにも、みんなが顔を合わせられる組合総会には出席することになっているそうだ。

*このようにして、相手からも情報をもらうが、自分も相手に情報を教えてあげるそう。ここから、山口氏が一方的に情報を得て得をしているのではなく、情報源となるほかの会員たちも山口氏から情報得ることができ、ギブアンドテイクの関係になっているということがわかる。

<購入者との交流>

——じゃあ(業者に)卸して、それを買った人たちとの交流
ってありますか?購入者との交流.

山口：基本的にはしてない.

——ダイレクトに来たりするからとか?

山口：それもある。ほて、うるさいからね. めんどくさい.
剣道のえらいさんって結構上から目線なのね。すべ
てじゃないよ、すべてじゃないけど。上から目線だ
し、買ってやってんだからって。いらんっちゃうの
こっちは。ほんで紹介の電話あるよ。結構。でも滋
賀県のもんは誰も買いに来んよ。うち. あそこは売
らんってなっとるさかいに. 一人に売るとみんなに
売らんとあかんやん.

<エピソード>

山口：あの当初(職人を初めてすぐ)は楽しかったよ、それ
なりに. 始めた当初はやっぱ習うだけでしょ. 一人
前のものを作れるようになってからは楽しかったよ,
今から思うと、遊び心があったでしょ. だから刀式
作ったり, いろんなものを作ったから. いわゆる基
本的な基礎はしっかりできてるから。そこからあと
は応用でしょ。作ったかてそれが売れるわけでない
けども、いろんなものが作れるっちゃう楽しみがあ
ったんやね.

山口：だけど今は遊び心ないもん. もうめんどくさいやん.
だから職人はもっと上手に使えっちゃうの。言葉悪
いけどちょっとおだてりゃそれなりに損得抜きに動
くんだし、文句だけいうと逆に反発するしね。
いろいろ注文来るけど、作るのは技術的にもってる
よ。だけど金出すのかって言ったらそうじゃないで
しょ。

* 山口氏は面倒なこと(自分の
作った竹刀に対して文句や要
望を言われるなど)は最初か
ら避けて通られる人である。
なので購入者との交流もして
おらず、直接小売りも気に入
った人に、気分が乗った時に
しかしておられない。

* 「刀式」というのは、文字通
り通常まっすぐな竹刀を日本
刀に見立てたような形にした
ものである。このような遊び
心があるものを作るなど、始
めた当初はいろんなものが作
れるという喜びを十分に楽し
んでいたことがうかがえる。

* が、現在はそんな遊び心もな
くなってしまったようである。
ただ、これは業者に向けての
言葉かもしれないが、たとえ
ば気分の良くなるような頼み
方をするなど、おだてれば自
分の損得なしに持っている技
術を出してくれるともおっし
やっている。

山口：こっちが作ったろうっていう気があって作るとまた違うでしょ。どっちかっていうと良い材料使って。ほて、俺が自分(筆者)らに作ったるやん。ああいうのはどっちかっていうとまじめに作ってるねん。良い材料のほう使って。そんなもんよ。かえって金もらほうが。

山口：もう一つあんのよ。良いものばっか作るやろ、そうするとこれはこういうもんだってなって後がしんどいのよ。竹もいろいろあるし、体調もいろいろあるし。だからこの辺(6, 7 割)でおいてんのよ。んで自分らは1本か2本やしその場限りやん。もし悪かったも文句言わへんし。タダやから。だから店屋に、通常このレベルで送るやろ。そうすると当然次もそのレベルを要求してくるわけや。当たり前やけどこっちもしんどいし。できるんやけど、ここで抑える。その中でやればいいじゃんかって。ああ、今度のよかったな、今度のはちょっと悪かったなって。しゃあないなって。許容の範囲でコントロールして。商売ってそうやってやってかな。自分らだって常に最高の状態でやってたらしんどいやん。

*驚いたのが、山口氏は常に自分の持っている技術をすべて発揮して商品を作るのではなく、ある程度のレベルにとどめているそうだ。これも商売をしていく上での一つの知恵なのだろう。



図 4-4 柄(つか)を削る山口氏

山口：で、たまにこうしてくれっていうのがあるんやけど
(特注)，(業者が)金取ってもいいよって言うのよ。だ
けどなんぼ取るんやってなるんや。微妙でしょ。

じゃあもう手間かかるんやけど，おんなじ値段で。
だから文句は言うなよって。で，業者も言うんや。「山
口さん，あんま金もらうと(文句)言われたときしんど
いぞ」って。

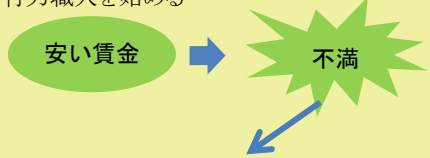
なまじ 500 円でも 1000 円でもな，かけると，単価上
がるでしょ。そうすると店もお客さんも文句言う。
だからうちはほぼ一定にしてる。めんどくさいから。

山口：(商品の値段が)店でも高いとこと安いとことあるよ。
古いところは安い。だってそれ以上上げられんやん? だ
からああいう古いところっていうのは大事にせなア
カンね。



図 4-5 「矯め」をする山口

表 4-1 山口氏人生年表

西暦	和暦	年齢	できごと	全国の動向
1950	昭和 25	0	滋賀県長浜市に誕生	
1956	昭和 31	6	小学校に入学	
1962	昭和 37	12	小学校を卒業, 中学校に入学 中学校を卒業, 自動車修理工場に就職 自動車修理工場を退職, 滋賀県彦根市のミシン会社へ再就職	
1965	昭和 40	15	ミシン会社を退職, 父親の紹介で, 名古屋の武道具会社へ再就職	
1970	昭和 45	20	武道具会社を退職, 父親に長浜に連れ戻され竹刀職人を始める  家出をし, 再び名古屋へ向かう 問屋街で働くようになり, 奥さんと出会う 結婚することになり, 住みやすい環境のため, 姉のいる滋賀(近江八幡市)へ 段ボール会社に再就職	
1972	昭和 47	22	引き抜きで化粧品のパッケージ会社に転職	
1978	昭和 53	28	 再び竹刀づくりを父に習い始める 近江八幡で独立	

4-1-2 元竹刀職人池田光信氏のライフヒストリーと人生年表

次に、池田氏のライフヒストリーを紹介する。山口氏と同様にライフヒストリーの後に人生年表を表 4-2 にまとめる。

また、図 4-6 から図 4-13 に池田氏の竹刀づくりに関する写真を載せていく。

<誕生>

——生年月日はいつですか？

池田：17 年の 3 月 21 日。

——生まれた時から伊吹の甲賀ですよね？

池田：伊吹の甲賀。

——どこかここ(長浜)以外に引っ越したかされましたか？

池田：いや...ない。

*池田さんは、現在生まれ故郷である米原市(旧伊吹町)甲賀から離れ、長浜市にある仕事場の近くに住んでおられる。

<兄弟>

——家族構成...ご兄弟は何人おられますか？

池田：自分入れて 4 人。姉と妹と弟。2 番目やね。

——じゃあ長男ですね？

池田：いや、二男。長男は 1 歳かそこらでいってしもた。

——そうなんですか。ほか亡くなられたご兄弟は？

池田：兄貴だけやね。1 番上やったんやわ。

——何で亡くなられたんですか？

池田：何やったやろ？

——じゃあ病気かもしれない？

池田：うん。

＜小学校に上がるまで＞

——学校に上がるまではどんなことをして遊んでおられましたか？

池田：今頃やったら松茸取りとか...川遊びとか魚釣りとか。

——この時点でお父さんは竹刀職人をされてたんですか？

池田：親父は...いつごろからやってたのかな...それは定かでない。戦前にやってたのは間違いないけど。

——戦前にやっておられて...で、戦争に行かれたんですよね？

池田：うん。いつごろ行ったのか知らんけど。...ただ、帰ってきたときは、知ってる。

——どんな感じでしたか？？

池田：母親が川で洗濯していて、曲谷のおっさんが兵隊から帰ってきて、おっさん(池田さん)道で遊んでたら「お父さん帰ってくるぞー」って。母親は「嘘やー」って。でその時の土産...じゃないんやけど、金平糖って星形の飴があるやん？それを持って帰ってきて。

——それをもらったんですね。じゃあ、小さい頃別段竹刀とかかわりがあったわけではないんですね。

池田：ない。

——では自分自身どんな子供やったと思いますか？

池田：うーん...今で言うたら...いじめられっ子みたいな感じかな。おとなしかったんや。

——おうちの手伝いとかはよくされてましたか？

池田：昔はみんな手伝いしてたでなあ。

——さっき言っておられた松茸取りとかも手伝いになるんですか？

池田：それは友達同士で。子供のころは行ったり。

——それをおうちで晩御飯で食べられたり？

池田：そうやね。ものすごいいっぱいとれた。

——近くの山ですか？

池田：前のほうもあるし後ろのほうにもあるし。親父が上手やったんや。

*やはり父親が戦争から帰ってくるところは印象的だったようで、その時の会話やお土産にももらったものなどをよく覚えておられた。

*ここで池田氏が答えているように、小さい頃から竹刀との関わりがあったわけではないそうである。後に出てくるが、池田氏が竹刀と初めて関わったのは竹刀職人を始める 22 歳ごろであり、小さい頃から竹刀、もしくは剣道に慣れ親しんだ結果、竹刀職人になりたいと考えたわけではないということになる。

——(松茸取りを)教わったりしたんですか?

池田：そうやね。で、冗談みたいに思うかもしれんけどあそこ松茸あるぞーって、わからんのや。見た目だけでは。

——それは長年の経験でわかるんですか?

池田：そうやね。んで、また余談になるんやけど、松茸取り言う自分の場所があって。そこへ取りに行くんやけど、ところがそれが自分の場所思ってるけどほかの人も自分の場所と思ってるかもしれん。だからちょっとだけ取ったり、小さいのだけ取ったり。

——松茸は昔も高級品だったんですか?

池田：いや、昔はそんな高級品でなかった。

<小学校時代>

——小学生になったときは?

池田：小学生もそんなことしてたなあ。

——松茸とか魚釣りとか?

池田：うん。

——じゃあその時別段竹刀とかかわりがあったわけでは?

池田：ない。竹刀との関わりは22からやな。

——では、小学生の時は、勉強は好きでしたか?

池田：勉強?勉強嫌いやで今でもアホなんや。

<中学校時代>

——中学校に上がってからも松茸取りに行ったりしましたか?

池田：そうやね。

——川遊びもされましたか?

池田：いや、川遊びはもうしてなかったね。

——何か新しくはじめられたこととかは?

池田：いや、なかったね。

——勉強もあまり好きではなかった??

池田：(うなづく)

<中学卒業後>

——お父さんが竹刀づくりを再開されたのは、池田さんが言われたからまたされたんですよね?

池田：うん.

——その間お父さんは何をされてたんですか?炭焼きですか?

池田：戦争帰ってきたら…竹刀アカンやん?だから炭焼き.

——炭焼きだけをされてたんですか?

池田：だけ.

——で、それを池田さんが中学卒業されたら一緒にされるようになったんですか?

池田：うん.

——お父さんを手伝うために炭焼きを?

池田：そうそう．でも先生は「お前高校行けー」って．とにかく貧しいで親の手伝いせなアカンから、行かんって．

<炭焼きの仕事>

——じゃあ、仕事…山仕事というのは、木を切って、それを焼いて炭にするという仕事なんですか?

池田：そうそう．炭窯に入れてな．

——木炭にして．それをどっかに売っておられたんですか?

池田：(うなづく)

——どこに売っておられたんですか?

池田：物心ついたころには親父が売ってたのは農協やったけど、そのうちにおっさんも仕事するようになったから曲谷という在所で木炭とかを扱ってる人がいたからそこに．

——曲谷にそういう業者のような人がおられたんですか?

池田：商売人やね．

*第二次世界大戦終了後、GHQによって武道が禁止されたため、剣道も禁止になってしまった．当然、剣道にしか使わない竹刀は需要がまったくなくなってしまったので、出兵前に竹刀職人をしていた人々は手近にできる炭焼きをしていたと考えられる．

<竹刀職人になろうと思ったきっかけ>

——じゃあ、炭焼きをやっておられて、何年ごろに竹刀職人のほうに変わられようと思われましたか？

池田：22 頃やったと思うけどな。17 年から 22 年やから...39 年くらいか？

——そうですね。で、きっかけが炭が売れなくなったから。

池田：そうそう。

——炭が売れなくなったから、お父さんに相談されたんですね。

池田：うん、周りにやってるものがいたから。これやったら食べてけるやろって、やろやろ言うて。親父はやめとけやめとけいうて。

——なんでやめとけって言われたんですかね？

池田：それをやってみても食べるだけやろって。そんなことせんと、なんか人を使うような...いわゆる商売人やね。それをせえて。

——会社勤めをしろと。

池田：こんな田舎に全然あらへんのに。

——でももう言い負かして(竹刀職人を)一緒にしたんですね。

池田：そうそう。言い負かして。

<竹刀職人になってから変わったこと>

——じゃあ炭焼きやってた頃と竹刀職人を始めてから何か変わったことありますか？

池田：まあ一つ言えるのは、炭焼きっていうのは雪深いところやから冬場は仕事ができんやん？

——冬場も仕事ができるようになったと。

池田：で、当時はかなり金になったな。

——なるほど。一回剣道が禁止になって、それが解禁されてからだんだんだんだんやる人が増えてきた時期ですもんね。

*第三章でも言及しているが、ちょうど池田氏が竹刀職人を始めようと思った昭和 39 年が当てはまる、1960 年代にエネルギー革命が起こっている。

*意外なことに、池田氏の父は池田氏と共に竹刀職人を再開することを反対していたようだ。また、「商売人になれ」と池田氏に言っている。職人業よりも商売人のほうが儲かると感じたことがあったのだろうか。

*池田さんが住んでいた伊吹地域は伊吹山にほど近い場所であり、近隣市町村の中でも特に雪深い場所である。当然雪が積もれば山仕事はできないので、冬場の収入はほとんどなかった。

＜竹刀職人の仕事＞

——やっぱ売れて、たくさん作ったんですか？

池田：まあ手で作るもんやで限りはあるけどね。

——どれくらい作ってましたか？

池田：甲賀だけで...7 軒かな。

——で、それをどこに売っておられたんですか？

池田：おっさんは名古屋。

——それは 7 軒あるけど、納めてる場所は別々なんですか？

池田：別々。大阪に売る人、岐阜に売る人。

——(売っていたのは)名古屋だけでしたか？

池田：おっさんは名古屋だけ。

——それはなぜ名古屋だったんですか？

池田：一番最初は山口君のおやっさんに紹介してもらって。

——紹介してもらって、ずっとそこに売っておられたんですか？

池田：そうそう。

——じゃあそこと何か交流がありましたか？

池田：交流いうのはなかったけども...まあはよ送ってこいとかがすごい時期はあったね。

——それだけ売れてたってことでしょうね。

池田：子供用が多かった。36 とかね。

——それはだいたい何年ごろかわかりますか？始められてから何年経ってたとか。

池田：何年ぐらいかな……。でも始めてから 3, 4 年したら右肩上がりやったから...それから数年の間は 4 枚つながってたらいいっていうくらいやった。で、そんな言い方ではよう欲しいはよう欲しいって。

——電話がかかってくるんですか？

池田：当時は電話なかったから。電報とか手紙やね。ただ、一回だけ、あれは...名古屋の店やったかな。全然送ったことないような店なんやけど、何々を送れって。名前書いてないんや。「甲賀南竹刀製作所」とか。池田っちゅう名前知らんから。そのくらい。

*池田氏が「7 人」ではなく「7 軒」という答え方をしたのは、池田氏のように家族で製造しているところがほとんどだったからである。つまり、竹刀製造はいわゆる家内制手工業だったということが言える。

*この「山口君」というのは山口氏である。このように納め先を紹介するなど伊吹・長浜の職人たちはつながりが強かった、交流をよくしていたということがうかがえる。

*この「36」というのは、竹刀のサイズを示しており、3 尺 6 寸の意味である。子供用の竹刀の注文が多かったということで、剣道人口も子供の割合が大きかったと考えられる。

*職人を初めて 3, 4 年した後のピーク時は 4 枚の竹がつながっていて打てればよいというほど竹刀不足だったということになる。

——知らんけどとりあえず作ってるところにっことで
すね.

池田：そうそう。でも忙しかったでうちのちゃうやろって
ほかしてもた。

——生産が追い付かない時期は徹夜で作ったりしたんで
すか？

池田：8 時くらいまでは作ったけど徹夜っていうのはなかつ
たけど…。

——朝は何時くらいに始めてたんですか？

池田：7 時には始めてたなあ。

——早いですね。で、遅かったら 8 時くらい。

池田：ただ一番忙しいときには…昔焼き印押してたやん？手
で書くとかしてたし、焼き印なんか入れるのも夜中 1
時とかしてたし。明くる日に出したい、出荷したい
というときには。もう親父は寝てるし、おっかあも
寝てるし。

——お母さんも手伝っておられたんですか？

池田：いやいや、家内のことや。

<結婚>

——ちなみに結婚はいつされたんですか？

池田：うーん…45 年.

——何がきっかけで知り合われたんですか？お見合いで
すか？

池田：見合い.

*以上の池田氏の言葉から、当
時の竹刀取扱店の切羽詰った
様子がうかがえる。同時に、
「忙しかったので、送られて
きた注文書を捨ててしまった」
という池田氏の言葉からも、
竹刀職人が新たな取引先を増
やそうとしていない、忙しそ
うな様子も想像できる。

*労働時間は朝 7 時から夜 8 時
ごろまで、休憩を 1 時間取っ
ても一日約 12 時間働いてい
ることになるので、かなりな
作業量であったと考えられる。

<お父さん、奥さんとの仕事>

——で、奥さんも手伝われてたんですか？

池田：うん。

——どういう作業を手伝わられてたんですか？簡単なところとかですか？糸結んだりとか…

池田：とか、最後こそぎ言うてはびきしたりとか、やすりかけるとか、こそぎとか。

——で、お父さんと3人で仕事されてたんですね。

池田：うん。

——じゃあお父さんとは分業されてたんですか？

池田：分業でもなかったな。

——同じ作業をしてたんですね。

池田：おなじように矯めして、自分がしたのは自分で仕上げて。

——結婚するまでに職人をされてた時期もあるんですよね？その時期は2人でされてたんですか？

池田：うん。2人。

——お子さんが手伝われることは？

池田：子どもって、ここらはすぐ出て行っちゃうから。学校通えないから、下宿。

<父からの竹刀づくりの指導>

——始めるときはゼロからの状態ですよ？

池田：まったく知らん。

——指導とかあったんですか？

池田：指導はあったような…どういう指導があったかはわからんなあ。

——ここはこうするんだよっていうような…

池田：うん、そのようやな。ここをこうせなアカンということはあったな。

——どの作業が一番大事っていうのはありました？

池田：やっぱり矯め。

*前述したように、竹刀づくりは家族ぐるみで行われることが多かった。竹刀を作る職人だけでなく、その妻なども難しくない簡単な作業を手伝っていた。

*妻が仕事を手伝う一方、子どもが仕事を手伝うということではなかったようだ。池田氏が住んでおられたところは伊吹山の奥の集落であり、学校に通うために子どもの頃から下宿をするというケースは普通だった。

<竹刀職人をしていて困ったこと>

——竹刀職人をしていて困ったこと，エピソード，体験談などありますか？

池田：まあ仕事そのものでは息詰まるが多かったな。
(竹刀が)蛇がカエル飲んだ時のようにぽこんとした形になったりとか....

* 難しい職人業だからこそその悩みであろう。

<竹刀職人をしていて嬉しかったこと>

——逆に嬉しかったこととか，よかったこととかありますか？何か印象的なこととか。

池田：仕事そのものではなくて...テレビが取材に来たりとか，何回か新聞も出て。

——何新聞か覚えておられますか？

池田：たぶん中日。

——いつごろか覚えておられますか？

池田：わからんなあ。



図 4-6 池田氏が紹介された町内広報(職人を辞めてから取材された)

＜同業者との交流＞

——じゃあ、同業者の方との交流というか情報交換とかありますか?聞いた話によると関西竹刀組合の名簿ですよ?

池田：うん。

——全部知っておられる方ですか?

池田：全部知ってる。ただ...この辺(京都など)はあんまり会わんな。年に一回くらいやけど。

——顔見知りではあったんですね。

池田：うん。

——で、よく会ったのはこの人たち(伊吹地域・長浜の職人)?

池田：この辺はもう...おんなじ在所とか...しょっちゅう顔合わせてたなあ。だいたい年に2,3回は集まってたな。集まるとだいたいおっさんとか。

——それはなんか理由があったんですか?

池田：なんでやろな?

——そういうどうぞっていう性格やったから誰でも集まりやすかったとか?それとも何か別の理由が...?

池田：まあ...地理的にも甲津原からやったら甲賀近いし、あとは、長浜は2,3人しかおらんし。もう一つは山口君のお父さんが案外大事にしてくれたで、ついおっさんのほうに電話が入ってくるし。で、うちが元祖みたいになってたし。でも...もう生きてる人って2,3人やで。

——みんな年上の方ですか?

池田：全部年上。

——戦前からやっておられた方もおられるんですか?

池田：そうそう。

——ほとんどそうですか?

池田：うん。

——あんまり戦前やってなかった人っていうのは少なかったですか?

池田：みんなやってたと思う。

*このとき、山口氏が残しておられた「関西竹刀組合」という主に米原・長浜の竹刀職人同士で組織された組合の名簿を見ながらお話いただいた。この組合については第三章で詳しく述べている。池田氏はとても懐かしそうにされていた。

*第三章でも述べたが、伊吹町史に伊吹地域に最初に竹刀づくりの技術を持ち帰ったのは池田氏の先祖だという記述がある。

*関西竹刀組合に所属していた職人は、ほとんどが戦前から職人をやってきていた人々だった。池田氏や山口氏はその中でも若く、目立ったそう。

<同業者について>

——周りの職人の人っていうのはどんな人でしたか?みんな話しやすい人でしたか?

池田：グループ?

——はい、気の知れた人たちでしたか?

池田：うん、冗談言い合ったり。

——勝手なイメージなんですけど、職人さんっていうと気難しいイメージなんですけど、竹刀職人の人って山口さんもそうですし、案外...

池田：うん、案外気難しいのはおらんよ。

<竹刀組合>

——こういう組合とかは誰が提案して作られたんですか?

池田：だいたいこれ(山口氏のお父さん). 世話好きやったんや.

——あ、息子さんもそうですね. なんか組合があってよかったとかありますか?知らない人と交流できるとか.

池田：近所の職人は知ってるけど…遠い人は知らんでな。

*「周りの職人はどのような人だったか」という問いに対して、「冗談を言い合っていた」「気難しいのはいない」という答えが返ってきたのは意外であった.

*米原や長浜など、近いところでたくさんの職人が固まっていたため、遠い土地の職人と交流できたというのは組合のメリットとしてあったようである.



図 4-7 小学生に竹刀づくりの講義をする池田氏⁴⁾

<手先>

——あと、みなさん手先が器用なんですか？

池田：どうなんやろなあ。

——池田さんはどうですか？もの作ったりするのは好きですか？たとえばちっちゃいころ。

池田：ちっちゃいころはどうやろなあ。たとえば竹のスキーとか。

——雪がいっぱい降るから。

池田：うん。あとは竹トンボとか。 木で作るのは覚えがな
いなあ。

——竹が扱いやすかったんですかね？

池田：子供のころはどうしても自分で作ってたけど。昔はスキーなんか売ってるのを知らんくらい。

——ではスキーでも遊ばれたんですね。

池田：したねえ。

——あと職人をされてた時に頼まれて他のものを...たとえば近所の人にこういうものを作ってほしいんやけどっていうのはなかったですか？

池田：なかったね。

——では関係ない遊びで作ってみたということはなかったですか？

池田：子供のころにみんな遊びで作ったのは鳥の籠。あれは作ったね。

*先に池田氏は小さい頃竹刀に慣れ親しんでいなかったと述べたが、小さい頃から様々な遊び道具を竹で作るなど、竹自体には慣れ親しんでいたと考えられる。



図 4-8 小学生に「矯め」を見せる池田氏⁵⁾

<剣道>

——では、剣道はされてたわけではないですよね?イメージなしで作れるんですか?

池田：先の重たいほうがいいっていう人やら手元が重いほうがいいっていう人やらいるけど…それが最後までつかめなかったね。

——辞めるまで分からなかったんですね。

池田：だからもう…普通の竹刀と中太っていう竹刀あるやん?真ん中のほうを太くせっていうもの。そういうのをやったけども感覚がわからんね。

——特にでもつながってたらいいから納めてくれっていう時代は、先を重くしてくれとかいう注文はなかったんではないですか?

池田：そんなものはない。とにかく、新学期になると入札で業者のために学校に納めなアカン。数さえあったらいいって。授業で使うで、重たかろうが軽かろうが。

——あ、じゃあ新学期はもう追い込みの時期ですね。

池田：そうそう。

——やっぱ時期によって変動…新学期前はたくさん納めるとか、逆に割と落ち着いてた時期とかあったんですか?

池田：それは…ないな。

——なかったんですか。もう一定してっていう感じですか?

池田：一定してって…新学期の前後になると、早いこと作れって言うんでその時が特に忙しくなるっていうだけで、一日に作れる量って決まったるし。今の時代なら自動で夜中にでも作れるけど、手作りはそういかんでな。

*竹刀の使い道である剣道をまったくしてこなかったことから、使用者の細かい注文(好み)に合わせた注文にこたえる事が難しかったようである。

*新学期になると追い込みになるほど竹刀の注文が増えたということは、

*新学期は追い込みの時期だということだったが、常に忙しいところにさらに注文が重なり、忙しさに拍車がかかるといった状態だったようだ。

＜海外製竹刀の登場＞

——じゃあ海外製が入ってきてからだんだん売れなくなっただけですか？

池田：右肩下がり。前言ったか知らんけど、台湾が作ってきたものは我々が買う材料代くらい。

——いつごろからだいたいだんだん下がってきたんですか？

池田：いつごろからやろ。

——竹の花が咲いてからですよ。

池田：うん。

——あれが45年前後やったんで、結婚されてからですかね？

池田：(結婚してから)5年くらいはまだ大量に作ってたで。まあ、また領収書調べて。

——あ、はい。短くなってたら下がってきてるっていうことですよ。

池田：まあその50年...親父が死んでから一人になったさかい、量も減ってきたと思うで。

*当時池田氏は〇〇円で竹刀を売っていて、材料代が〇〇円なのでかなりの値段の差があった。当時の台湾製の竹刀の出来はかなり悪かったが、その安さから授業用竹刀を中心に台湾製に移行していった。

*前述したが、池田氏はお父さんが亡くなるまでは奥さんも含めて3人で作業されていたので、当然亡くなられた後は、製造量は減少している。



図 4-9 竹を削る池田氏⁶⁾

＜海外への竹刀づくり指導の依頼＞

——前、台湾に教えに行ってくれっていうのはいつごろですか?結婚される前ですか?

池田：前.

——結婚される前ということは、昭和 45 年より前で、40 年くらいに職人を始められたって考えたら...

池田：何年頃かはわからんな.

——40 年から 45 年頃の間くらいということで. 誰から言われたんですか?

池田：それは...岐阜の商社. 竹刀扱こうてる.

——商社...何かその商社とは交流があったんですか?

池田：そこへも何回か納めたことあるし、で、向こうがいろんなところ買い付けに来るんで、ついでに....

——で、その人に台湾に教えに行ってくれんかという感じで...

池田：うん. ほかに人にもそういう話がいったらしい.

——そうなんですか. その方も断られて. 理由はやっぱりみんな共通ですか?

池田：この人はどういう理由で断ったんか知らんけど、おっさんの場合は国技っちゅうか…日本のものをよそに出したないっていう. のと、外国へは行きたないっていう.

——あまり外国へのあこがれはなかったんですね.

*池田氏は台湾製竹刀が日本に出回り始める少し前に台湾での竹刀づくり指導を依頼されている.

*池田氏は竹刀づくり指導の依頼を受けたものの、左記のような理由で断っている. これ以外にも、「職人魂から断った」ということもおっしゃっていた.



図 4-10 竹をあぶるための炭火(現在はバーナーだが、昔は炭火だった)

<弟子入り希望>

——竹刀職人されてた時は弟子入り希望はありましたか？

池田：うん、2人はいてた。それも冬場2人いてて、で、その人らも夏は炭焼き。そのうちの1人はふた冬。もう一人は竹刀できる人やったで、教えてくれって言ったけどもうできるんやさかい自分でやれって場所だけ貸して。材料与えて。

——お父さんに習われたということですか？

池田：いや、どっかで習ろてきたみたい。で、もう一人はおっさんらより8つくらい下の子どもやったで、教えてくれ、テレビでも見ながら息子にやらせたいて。テレビ見ながらできる仕事でないでって。

——じゃあ合計4人ぐらい。

池田：うん。

——弟子入りしたのに辞めていった人とかいたんですか？

池田：みんな辞めてく。

——それはやっぱり食べていけへんのと難しかったからですか？

池田：難しかったのと、性に合わなんだっていうのと。

*後にも述べるように、竹刀職人は地域の中であこがれの職業の一つだったため弟子入り希望も地域の人で、竹刀職人をするまでの池田氏と同じく炭焼きをしている人だった。

*弟子入り希望者も来ていたが、その人たちはみんな辞めていってしまったようである。



図 4-11 池田氏が使用していたカンナ

<あこがれの職業>

——近所の人とかに取ったら(弟子入り希望が)4人も来て
るくらいやし、あこがれの職業やったんですか?

池田：ほうやね。うん。だから習いに行ってた人もおるし
…結構習いたっていう人が。

——戦前からやってない人でもやりたいっていう人がい
て…難しかったからそういう冬場だけしたいってい
う人とか、ずっとしたいっていう人とかがいたんで
すか?

池田：弟子入りすれば、金あたらへんやん?ごはん食べるだ
けのお金もあたらんに。冬場やったら食えんから、
その場で習おうって。

——特に組合に入ったりする人はそういう弟子入りして
た人ではないですか?

池田：この人らはちっちゃい頃弟子入りしてる。

——じゃあ近所の人にとってあこがれの存在やったって
いうのを示す具体的な出来事とかあれば教えてほし
いんですけど。

池田：ただ、周りの人よりはかなりいい金になってたで、
冬場も稼げる。

——いいねって言われたりとか?

池田：うん。前言ったかしれんけど、月々3万の貯金ができ
るって言ってたやん?そんときの(会社勤めの)給料が
…3万より多くなかったと思う。それから徐々に給料
は上がってるけど、勤めてたらやはりそんだけでき
る金じゃなかった。結構よかったのはよかった。

*池田氏以外の職人にも弟子が
来ていた。

*弟子入りをする人はたいてい
炭焼きをしている人で、冬場
はもともと収入がないから、
弟子入りで賃金がもらえなく
ても一緒のことだ、というこ
とで冬場に習いに来る人が多
かった。

*竹刀組合に入っている人たち
はほとんどがちっちゃい頃に
弟子入りしている、丁稚奉公
に行っているということは、
裏を返せば戦後に弟子入りし
た人は竹刀組合に入るレベル
に至るまでに辞めてしまっ
ているということである。

*池田氏が職人をしていた当時、
生活するお金のほかに3万円
の貯金できていた。一般的
なサラリーマンの給料以上の
貯金できたということがか
なりいい思いをした、と池田
氏自身おっしゃっている。こ
れも地域の中であこがれの職
業だったという理由の一つだ
ったようだ。

<出荷>

——池田さんが住んでおられたところは山奥ですよね?

出荷作業はどうしておられたんですか?

池田：おっさん家の近くに、雑貨やらなんやら扱こうてる商店があつたんや。そこが仕入れは長浜でしてたで、仕入れのついでにトラックに竹刀乗せて、運送屋さんに運んでもらうよう頼んでたんや。

<竹刀職人を辞める時>

——竹の花が咲いてから、だんだん台湾製に押されて売れなくなってきて、やめられたのが 58 年で、辞めようと思ってすぐ辞められたんですか?

池田：粘ったね。

——周りの人は結構すぐにやめられたんですか?

池田：もう全部やめた。

——もう最後ですか?

池田：おっさんが最後まで粘ってたんや。何とか食べられんかって。

——辞める時に名残惜しいとか思われましたか?

池田：やっぱり未練はあつたね。

*第三章でも述べているが、池田さんが竹刀職人をしておられた甲賀というところは、積雪の多い地域である。

*伊吹地域の職人は、立地的に出荷が大変だったので、周りの人の協力によって成り立っていたということがうかがえる。

*第二章などでも述べているが、池田氏は伊吹地域最後の竹刀職人である。竹刀職人という仕事への思い入れがうかがえる。

<職人を辞めたもう一つの理由>

池田：それから、もう一つあったんや。田舎の方やと区長とか、副区長とか、会計みたいのとか…役があるんですよ。おっさん(池田氏)、それにしょっちゅう当たるん。何でかって言ったら、「お前家で仕事しとるんやで、自由きくやろ」って。だからなんかあるとしょっちゅう呼び出されたね。

——頼りにされてたということですか？

池田：そんなええもんじゃなくて小間使いや。それでも毎回行ったのはおっさんの性格もあるんかもしれんけど。

池田：(第三章の表 3-3 を見ながら)この時なんか一番仕事にならんかったね。この(原発から送電してくる)鉄塔が建った時。段取りやら警備やら、こっち(自治会側)でせなアカンかったんよ。だからしょっちゅう呼ばれて、ひどいときは30時間とか起きてたなあ。

——徹夜、ということですね。

池田：そうそう。それから、たとえば午前中「矯め」するとするやん。で、午後そういう集まりに呼ばれるとすると、次の日その後始末で一日かかるんよ。ということは、2日で1日分の仕事しかできんの。だから、ただでさえ需要ないのに、思うように竹刀も作れんでストレスが溜まっていくわな。ほて、半端仕事があるとその日は何となく気分が上がらんし。ダブルパンチどころか、トリプルパンチくらいの打撃やったわ。

*この「家で仕事をしているから自由がきく」という言葉から、地域の人が竹刀職人をどのように見ていたかがわかる。先に述べたように、山仕事より収入が良い「憧れの仕事」であり、時間の融通の利く仕事だとも見られていたということがわかる。

*頻繁に呼び出しをされても断らずに毎回集まりに出向いて行ったのは、池田さんの性格もあると本人もおっしゃっている。

*第三章の表 3-3 は、池田さんが住んでおられた甲賀での主要な出来事をまとめた年表である。

*半端仕事で終わると、その後始末で、2日で1日分の仕事しかできなかったと発言している。また、半端仕事があると気分が上がらず、仕事に支障が出るということもわかる。ここで池田氏が述べている「トリプルパンチ」というのは、「本当は大変なのに、時間の融通が利くという理由で、地域の集まりごとに頻繁に呼び出される」、「竹刀の需要が下がっている」、「半端仕事の処理などがあり、竹刀が思うように作ることができない」の3つである。

＜竹刀職人を辞めてから＞

——辞められてから、すぐに今の仕事につかれたんですか？

池田：いやいや、違う仕事.

——では辞められてから何の仕事につかれましたか？

池田：何の会社...(近所に)セメント会社があったで. そのの下請け(の会社). おおむねその清掃をする会社. おっさんは、伊吹山があって、そこ削ってるやん?そこをまた緑にする仕事.

——木を植える仕事？

池田：そうそう.

——削り取った後の緑化をする仕事はいつまで続けられましたか？

池田：10 年ほど.

——じゃあもう平成に入って...平成 5 年くらいまでですよ.

池田：で、41、2 くらいからおおむね 10 年くらいやで...51 か.

——そのあとまた違う会社ですね.

池田：うん、それを 9 年ほどやって...60 過ぎたで定年やから. 1 年嘱託で. もう体持たん. そして今のとこ. 61 から 8 年ほどになるなあ.

——今は何のお仕事でしたっけ. 回収ですか？

池田：うーん、回収もやってるし、こういう古い家を壊したりとか大きい会社の設備するときの手伝いとか、買い付けとか、それをいわゆる工場で処理したりとか...

——定年まで働いておられた会社は何の会社ですか？

池田：えーっと...炭酸カルシウムっていうのを作ってたんや. 別名炭カル.

——製造の仕事をされてたんですか？

池田：製造工程.

*池田氏は現在、長浜市にある古い家屋の解体業や回収業などをしている会社に勤めておられる.

＜辞めてから＞

——じゃあその間に竹刀職人をまたやりたと思ったことは？

池田：ああ、あった。

——どっちかっていうと作りたい？

池田：そういう欲望はあったな。

——戻るかって言われたらそこまでは？

池田：金にならんから。金になるなら今でも続けてるな。

——竹刀作るのは楽しいというか...

池田：まあ今作ったとしたら道楽やな。

——もう竹刀作る予定はないですね？

池田：もうないなあ。道具も...一応は残してあるけど。

——甲賀のおうちに残してあるんですか？

池田：うん。

*池田氏は、食べていける、お金になるなら今でも職人をしたいという思いが強いようである。一方で、「今作ったとしたら道楽」とおっしゃるようには、もう竹刀では食べていけないとも思っておられるようである。



図 4-12 池田氏の竹刀の銘「行光」

表 4-2 池田氏人生年表

西暦	和暦	年齢	できごと	伊吹や全国の動向
1942	昭和 17	0	滋賀県米原市(旧伊吹町)甲賀に誕生	終戦 剣道の解禁
1945	昭和 20	3		
1948	昭和 23	6	小学校入学	
1952	昭和 27	10		
1954	昭和 29	12	小学校卒業，中学校入学	
1957	昭和 32	15	中学校卒業，父の炭焼きの仕事を手伝い始める	
1960	昭和 35	18		
1964	昭和 39	22	父に習って竹刀職人の仕事を始める	
1970	昭和 45	28	結婚	
1978	昭和 53	36	滋賀県知事から県知事より伝統的物産品の技術保存おび承にかかる奨励金を贈呈される	
1980	昭和 55	38	父が亡くなり一人で家業を継ぐ	
1983	昭和 58	41	自治会の集まりに頻繁に呼び出される ↓ 仕事が思うように進まない	甲賀に原子力送電鉄塔が建つ
1984	昭和 59	42	竹刀職人を辞め，伊吹山の緑化の仕事につく	
1993	平成 5	51	炭酸カルシウムの製造の仕事に転職	
2003	平成 15	61	現在の会社(古い家屋の解体や回収業者)に	

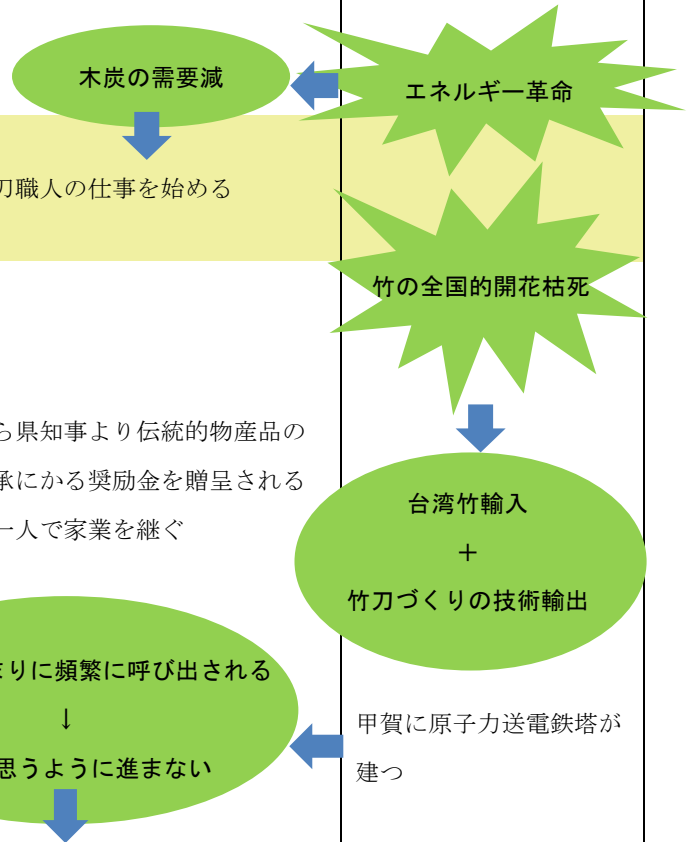




図 4-13 池田氏が作成した竹刀⁷⁾

4-2 ライフヒストリーの考察

4-2-1 竹刀職人山口吉昭氏のライフヒストリーの考察

4-1-1 の山口氏のライフヒストリーを、全体的に項目立てをして考察していく。

まず、ヒアリングを行うまで筆者自身は小さい頃から竹刀に慣れ親しんで職人になろうという決意をしたのだという予想を立てていたのだが、父親が竹刀を作る工程の流れは見ていても、竹刀自体にはあまり興味を持たなかったということが、話から伺える。ということは、幼いころの竹刀との関わりが、竹刀職人に過程に関係していないということがわかる。ただ、「じっくりは見てないけど、流れは見てる」という父親が職人であったことから竹刀づくりの流れは幼いころから理解していたことや、「竹は弓を自分で作るためにしょっちゅう触ってた」という竹刀の材料となる竹との関わりはあったということは、職人になる過程・また弟子入り中に大きな影響を与えていると考えられる。

また、剣道もしたことがなく、これも職人になる過程に剣道をしているかしていないかは関係がないということが分かった。また剣道をしない理由については、剣道では特に上下関係を重んじるため、自分がした場合に上の立場の人たちと関係しにくくなることを挙げている。おそらく、上の立場の人たちであっても、自分の製品に対して文句を言われることを避けているのではないかと話を聞いていて感じた。同じような理由で、他武道具の職人や武道具の小売りに従事する人々はあまり剣道をしない、やっても辞めることが多いという話も聞くことができた。

竹刀とは直接関係がないが、中学時代の話は筆者があれこれと質問せず、相槌をするのみでたくさん話を聞くことができた。山口氏自身人生の中でそれがいいい思い出か悪い思い出かに関わらず特に印象に残っているのではないかと推測される。

また、山口氏は小学5年生から中学3年生までの約5年間、新聞配達をしていた。近所では新聞配達は中学に上がると同時に下の学年の子に引き継ぐというのが一般的で、山口氏も小学校5年生の時に中学に上がる先輩から引き継いだ。頼まれて中学入学時に一旦引き継いだ新聞配達を中学3年間続けたということである。このことについて、「俺は案外まじめ、受けたことはきちっとやる」と山口氏自身が話すように、新聞配達を継続してやったことから山口氏のまじめさや一度引き受けたことはやり通すという責任感の強さがうかがえる。もしかしたら、職人がほとんど残っていない現在においても山口氏が竹刀職人続けているのは、このような性格も関係しているのかもしれない。

山口氏は2度職人になっていて、現在は2度目になった時から続けておられる形になるが、1度目と2度目で竹刀に使う竹が変わっていることがわかる。1度目は滋賀県高島のマダケであったのに対し、2度目は台湾竹を使っておられる。山口氏が2度目に職人になられたのは海外製竹刀が入ってきた5,6年後であるので、その時点ではまだまだマダケは不足の状態にあったということがうかがえる。

次に、山口氏が現在購入している竹について考察していく。山口氏は京都の扇骨業者から竹材を購入し、竹刀づくりを行っている。仕入れ先は職人によって変わってくるようだ。

ここで、山口氏が竹を購入している京都の扇骨業者へのヒアリング情報を補足しておく。

扇骨業者が扱っている竹は、自分たちで竹林に切りに行くのではなく、竹の切り出しをする人が別にいるとのことであった。

竹は芽が出てから3~5年経ったものを切り出す。切り出す時期は、9月から例年11月下旬頃の雪が降るまでであり、切り出した竹は竹林からすべて持ち出すのではなく、一部竹林に置いたままにしておく。そして、雪が解けた3月ごろに再び竹林に入り、置いておいた竹を下してくるとのことだった。

山口氏へのヒアリング情報を併せて、山口氏の竹刀が消費者へ届くまでの流れ図を作成した。図4-15に示す。

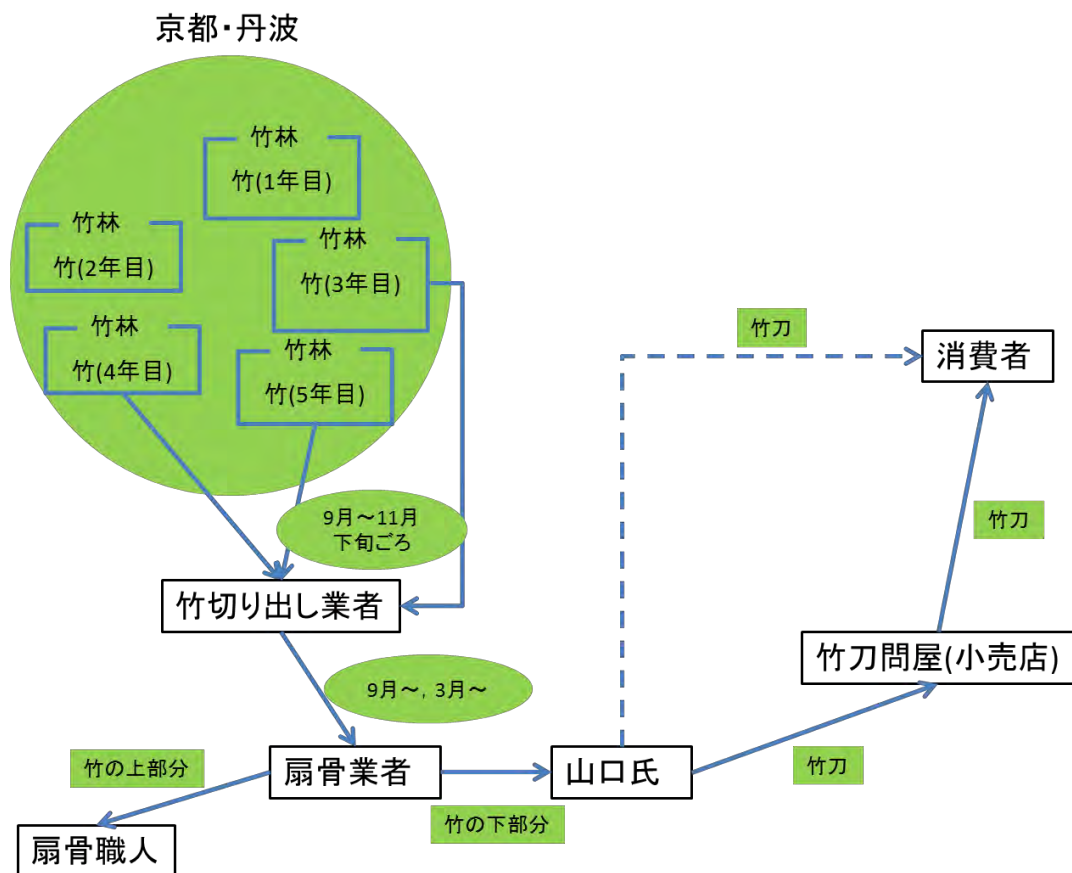


図 4-14 山口氏の竹刀が消費者へ届くまでの流れ図

また、扇骨は竹の上部分しか使うことができず、山口氏が竹材を購入する前までは下の部分は捨てていたようだ。扇骨業者へのヒアリングでは、いらない部分はすべて産業廃棄物として捨てているとのことだったので、おそらく以前は下の部分も産業廃棄物として捨てられていたと考えられる。産業廃棄物として捨てるには費用も掛かってくるため、それを買ってくれる山口氏は扇骨業者にとっては大事な取引先であるとわかる。

山口氏もまた、良質な竹が少なくなっている現在安定して竹材を購入できる相手として、扇骨業者は大事な取引先であると言える。

以上から、山口氏が言うように、山口氏と扇骨業者との間には持ちつ持たれつの関係が成立していると言える。

このように、山口氏と扇骨業者は持ちつ持たれつの関係であり連絡も取りあうという中である一方、山口氏と竹の切り出し業者とは面識もなく、連絡を取ったことも無いという。また、山口氏は消費者と直接的に交流することは基本的に無いと話しているということがライフヒストリーからわかる。このことから、図 4-15 の一連のシステム図に登場する人々は、竹であったり竹刀であったり、自分が直接売るところ・買うところ以外との交流は無いということが言える。

労働時間についてであるが、「全盛期は朝 8 時から夜 8, 9 時まで。休みは正月だけ。」と話すように、現在から考えたらとんでもないような労働をこなしていた。加えて「当時の出し値が 2,500 円で、そこから材料代や親父の手間賃を引いて、工賃が 1,500 円。月 200 本作ったら 30 万。でも、労働時間から考えたら合わない」と話すように、それだけの労働時間に見合ったお金が稼げたかという点で最盛期でもそうではなかったようだ。

また、山口氏は全日本武道具組合に加入していることについて、商売をしていくために必要な情報を手に入れるため欠かせないことだと言う。一見竹刀の仕事と関係のない仕事でも、物の流れを推測するのに使えるなど、間接的に関係してくる場合もあるという。山口氏が組合に入って人脈を広げ、積極的に情報交換をしてきたことは、山口氏が現在も竹刀職人を続けてこられている理由の一つだと言う。

それと合わせて、「職人もいわば商売人だから」という言葉も聞くことができた。上に挙げたような物の流れを読むなどの行為は、職人氣質というよりも、商売人氣質に基づくものだと考えられる。全国の現在職人をやっている人がすべてそうなのかを調べることはできないが、少なくともかつて竹刀製造が盛んだった滋賀県において唯一山口氏が竹刀職人を続けていられるのは、自分の技術を使って良い製品を作るという職人氣質の他に、自ら物の流れを読んで対処法を考えるという商売人氣質を兼ね備えていたことは大きいのではないかと考えられる。

ライフヒストリーには載せていないが、以前山口氏は中国製竹刀が大量に入ってくるという情報を仕入れ、対処法を考えたことがあったそう。竹刀製造業は特に海外製竹刀の脅威が強いため、製品を作る職人自らが商売人氣質を以て海外製竹刀への対処を考えることが重要となると考えられる。

4-2-2 元竹刀職人池田光信氏のライフヒストリーの考察

4-1-2 の池田氏のライフヒストリーを全体的に項目立てて考察をしていく。

まず、前提条件として池田氏から得た情報から池田家の簡単な家系図を作成した。これには竹刀職人だった人のみ名前を載せてある。家系図を図 4-15 に示す。

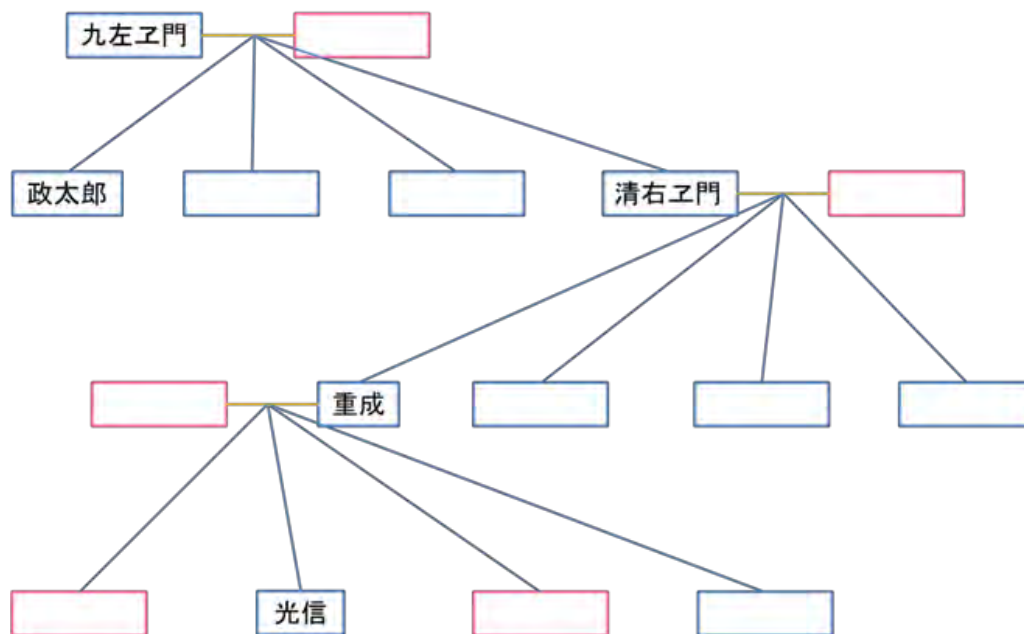


図 4-15 田家の家系図(竹刀職人だった人のみ名前を明記)

池田氏もまた、職人になるまで剣道はしたこともない、竹刀も触った覚えすらないということが分かった。ただ竹自体は近所にたくさんあったこともあり、スキー板を作ったり竹トンボを作ったりと関わる機会が多かったようだ。このことから、池田氏も職人になる過程で幼い頃剣道をするかどうかや、竹刀とかかわりがあったかどうかは全く関係がないということが分かった。

池田氏が竹刀職人へ転換するときが一番の鍵となったのが 1960 年代に起きたエネルギー革命であるということがライフヒストリーからわかる。「周りにやっている者がいたから、これなら食べていける、やろうやろうと親父に言った」という池田氏の言葉から、それまでやっていた炭焼きの仕事では、冬場は食べられない、エネルギー転換によって収入も減るから、食べていけている・冬場も収入があるという竹刀職人に転向したいという思いが読み取れる。

また、池田氏のライフヒストリーからは、職人をされていた当時の、特に子供用竹刀の需要の大きさ・竹刀不足がうかがえる。「とにかく 4 枚(の竹)が合わさっていたらいいという物言いで、新学期前は催促がすごかった」「いつも忙しいけど、新学期前は特に」と言うように、形になってさえいれば出来は求められないというほど竹刀の需要が高く、また不足していたということがわかる。

納入先はどこか尋ねると、池田氏は「納入先は名古屋。山口君のおやっさんに紹介して

もらった」と話してくださった。ここから、長浜と伊吹地域の職人同士の交流が深かったことが読み取れる。

また、簡単な作業を奥さんが手伝っておられたということもわかった。池田氏に限らず、山口氏も銘を入れる作業は奥さんがしていたと話してくださったことがあり、竹刀づくりにおいては夫婦間、また親子間の協力は大事なことであったと考えられる。家庭において家族の協力のもと成り立っていたということは、竹刀づくりは家内制手工業であったと言える。

池田氏は竹刀職人を辞めた理由について、2つ挙げている。1つは海外製竹刀の普及による需要減であるが、もう一つは自治会の集まりごとに頻繁に呼び出されることであるとしている。「家で仕事をしているから、時間の自由がきく」という理由で呼ばれることや、仕事の途中で村の集まりに呼ばれ、半端仕事を残して集まりに行くと、次の日はその後始末で一日潰れてしまい、ただでさえ竹刀の需要が減少している中で思うように竹刀を製造できなかったということが二重、三重のストレスになり、結果的に職人を辞める事となったということがわかる。

4-3 二人のライフヒストリーからみえるもの

2人のライフヒストリーの考察を見てみると、いくつかの共通点が見られる。まず、山口氏も池田氏も、幼い頃別段竹刀と関わったことはない、また剣道をしたことがないということがある。ということは、職人になるまでの過程に、必ずしも竹刀との関わりや剣道をしているということは必要でないということが言えそうである。ただ、2人とも父が職人をしている、幼いころから竹というものを使って何かを作るという経験はしているので、それらは職人になる際に大事な鍵となると考えられる。

また、2人の父親は両方京都の竹刀工房へ丁稚奉公に行って技術を習得したということである。戦前の職人たちは、丁稚奉公へ出向き、地元へ帰ってそこで職人を始めたということがわかっている。2人の父親以外にも京都へ丁稚奉公に行っている人々がいるため、当時伊吹地域では丁稚奉公へ行って竹刀職人になるということはよくある例だったということが考えられる。

以上のように共通点もある中で、山口氏と池田氏の話が食い違う部分もある。戦後の職人についてである。山口氏は「職人が儲かったのは戦前だけ、戦後は儲かってない」と話しているが、池田氏は「台湾製が入ってくるまではよかった。普通に勤めていたらできないくらいの貯金もできた」と話している。不確かな推測ではあるが、これは労働時間に対する意識ではないかと考えられる。2人の労働時間は山口氏で約11時間、池田氏で約12

時間と、ほぼ一緒ではあるものの(現在で考えればかなりの労働時間であるが)、山口氏は「当時の出し値が 2,500 円で、俺の工賃が 1,500 円。月 200 本作って 30 万やね。でも労働時間から考えたら全然合わん。」と話しているのに対し、池田氏は労働時間についての文句は特に言っていなかった。

4-4 滋賀県における竹刀製造業についてのまとめ

今回の調査で分かったことを基に、2 人のライフヒストリーやその考察を踏まえ、滋賀県における竹刀製造業についてのまとめを、項目立てて行っていく。

<滋賀県で竹刀製造が盛んになった理由>

まず滋賀県において竹刀製造が盛んになった理由は、伊吹地域の甲賀・甲津原において、農家の二男、三男坊が京都の竹刀工房へ丁稚奉公に行き、一人前になって故郷へ帰ってそこで職人をするというケースがたくさんあったことだと考えられる。

<竹の開花枯死と海外製竹刀>

また、これは滋賀県に限らず言えると考えられるが、昭和 45(1970)年の竹の全国的な開花枯死は竹刀製造業に大きな打撃を与えていると言える。ほかの産業でも考えても、これほど材料が一気に生産できなくなってしまった例はないだろう。

その影響は、最初は職人に対する注文の増大とプラスの影響もあったが、すぐに海外製竹刀の進出という脅威へ変わっていったと考えられる。この海外製の進出によって、古くから続いていた滋賀県における竹刀製造業が衰退の一途をたどったと言えるだろう。

<滋賀県において竹刀製造がマイナーサブシステムから本業へ変化した理由>

一番大きな要因として考えられるのが、マイナーサブシステムとして竹刀づくりをした人たちの本業が炭焼きなどの山仕事であったことである。伊吹地域は伊吹山の奥の山村であった為、できる仕事に限られていた。しかし、冬は積雪量も多く、仕事をするのができず収入はゼロになる。そのため、最初は冬の間の収入源として始められた竹刀づくりが、竹刀の需要増大も相まって、本業よりも多くの収入が得られるようになったことから、本業に取って代わったと考えられる。

<竹刀の製造形態>

職人以外にも、職人の妻などの家族が竹刀づくりを手伝うということは一般的であった。

このように、滋賀県における竹刀製造業は家内制手工業の一種であったと言える。

その一方で、竹刀職人の子どもが仕事を手伝うということは伊吹地域においてはなかった。その理由は、伊吹地域の立地にある。学校までの距離も長く、冬場の積雪量も多かったことから、早くから下宿をして学校に通うのは普通のことであったため、竹刀づくりを手伝える年齢に達したときにはすでに親元を離れていることが多かったようだ。

このことから、技術が親から子へ伝わるのが困難で、結果的に後継者不足につながったということも考えられる。

参考文献

- 1) 三菱樹脂(株)ホームページ 会社情報 沿革
＜<http://www.mpi.co.jp/corporate/history.html>＞, 2012-01-07
- 2) 朝日新聞(滋賀), 1984-12-07 20 面
- 3) 全日本武道具協同組合 オフィシャルウェブサイト 会員一覧
＜<http://zenbukyo.jp/index.php?act=memberlist>＞, 2012-01-24
- 4) 伊吹山文化資料館収蔵資料, 2011-05-16, 私信
- 5) 伊吹山文化資料館収蔵資料, 前掲書
- 6) 伊吹山文化資料館収蔵資料, 前掲書
- 7) 伊吹山文化資料館収蔵資料, 前掲書

第五章 結論

5-1 各章のまとめ

●第一章

本章では、日本の竹林の現状や竹の利用方法についてまとめた上で、竹刀について、竹刀職人についてまとめ、本研究の目的・意義について述べた。

●第二章

本章では、本研究の手法として用いる「ライフヒストリー分析」について紹介し、先行研究について触れた上で、本研究におけるライフヒストリー分析の妥当性について述べた。

●第三章

文献資料調査の結果と、ヒアリングによって得た情報を基に、剣道の起源について、戦争と剣道の関係、伊吹地域におけるマイナーサブシステムと竹刀製造の関係、国内竹刀流通量の推定、竹刀製造業の衰退についてまとめる。

●第四章

本研究の対象者の山口吉昭氏、池田光信氏に行ったヒアリング調査を基に、2人のライフヒストリーを作成し、考察も合わせてまとめている。

また、そこから滋賀県を中心とする竹刀製造業についてのまとめをしており、滋賀県で竹刀製造業が盛んになった理由、竹の開花枯死と海外製竹刀、滋賀県において竹刀製造がマイナーサブシステムから本業へと変化した理由、竹刀の製造形態についてまとめをしている。

5-2 本研究のまとめ

(1)国内竹刀製造業の変遷について

本研究のまとめとして、国内竹刀製造業は日本の多くの産業の中でも特殊な経路をたどって変遷してきたということが言えるだろう。その原因となるのが戦争と竹の開花枯死である。第二次世界大戦敗戦によって竹刀の使い道である剣道が全面的に禁止されてしまったこと、材料となる竹が全国的に開花枯死し、材料不足により海外製が進出してきたということは竹刀製造業に大きな影響を与えた。

この2つの出来事により、国内竹刀製造業は戦争前の軍国主義政策の強化による竹刀の

需要増による発展期，第二次世界大戦敗戦後の剣道の禁止による衰退期，剣道解禁に伴う剣道人口増加による発展期，竹の全国的開花枯死による海外製竹刀の普及による衰退期という変遷をたどってきており，アップダウンの激しい産業であったということがわかる。

(2)山口氏の職人継続要因

山口氏と池田氏のライフヒストリーを分析したことで，かつては竹刀製造が盛んだったが，現在は衰退してしまった滋賀県において，山口氏が現在も竹刀職人を続けていられる理由について推測できた。

山口氏は本人も話すように，情報交換を積極的に行ってきたということが現在も職人を続けていられる理由であると考えられる．山口氏は父親の影響で，池田氏も所属していた関西竹刀製造組合の他に，全日本武道具協同組合に所属している．全日本武道具組合は竹刀職人だけでなく，他の業者(材料屋や武道具小売店など)も所属しており，多方面の会員とつながりを持つことができる．つながりを持てば，そこから情報が入ってくるようになり，その情報を使って物の流れを読むことができると山口氏は話していた。

一方，山口氏の言葉から間接的に読み取れることとして，職人を続けていられる理由は以上の理由だけではないのではないかと考えられる．ものの流れを読み，業界全体の動向を読む．これはある種商売人としての気質とも取れる．海外製竹刀が国内に普及してから，いいものを作るなどの職人としての気質だけではやっていけなくなったのではないだろうか．つながりを自分から持ち，そのつながりを使って情報を得る，業界の動向を読む，ということをつづいて進んでやっていかなければ，生き残れなかったのかもしれない。

また，情報源となる人たちには，自分が情報をもらうだけでなく，相手が知らない情報を提供する．このように持ちつ持たれつの関係が，竹刀職人の周りにはよくみられる．職人というと，頑固で気難しい，というイメージを浮かべる人が多いかもしれないが，竹刀職人の場合，周りの人との関係性を大事にしながら仕事をしていると言える。

(3)竹刀の特殊性による竹刀製造業の衰退

また，竹刀製造業が衰退について，竹刀そのものの特殊性が原因の一つとして挙げられる。

第三章でも述べたように，竹刀は他のスポーツ用品と比較しても，他の伝統的工芸製品などと比較しても，竹刀と同じようにマイナーサブシステムから本業に変わった他の例を比較しても，似通っているものが無いということがわかった．つまり，何らかの共通点があるものと比較しても，同じような位置付けになるものが無いことがわかり，他のものにはない性質があるということが言える。

また，職人たちのライフヒストリーから，2人とも他の製品(竹細工など)を作るというこ

とはほとんどしたことがないということがわかっている。つまり、竹刀づくりの技術を他の製品のワザに転用することができなかったということが言える。

このことから、竹刀はすべての人が使う日用品でなく、完全に工芸品化することもできず、ワザの転用も不可能だったために衰退してしまったということが考えられる。

(4) 剣道愛好家へ向けて

最後になるが、竹刀職人が少なくなっている現在、彼らの持つ伝統的な製造技術が絶えてしまうということが憂慮されている。剣道をする人々は、いまいちど国産竹刀、職人による手作りの竹刀の価値に目を向けるべきではないだろうか。

5-3 本研究の課題

本研究の課題として挙げられるのは、まず手法であるライフヒストリー分析の難しさがある。

第一章、第二章でも触れているように、ライフヒストリーを作成するということは、対象者が生まれてから現在に至るまでの出来事を事細かに聞いていく必要があり、それらを聞き出すためには信頼関係が何よりも重要なこととして挙げられる。また、聞き出した情報は紛れもなく個人情報であり、それらの取り扱いには細心の注意を払うべきである。以上2点に関して、対象者に語っていただいた出来事をどこまで研究材料として取り入れていくべきかを考えるのが難しい点であった。

また、これは筆者自身の課題でもあるが、対象者の言葉をすべてそのまま受け取るのではなく、その裏に隠された考え、気持ち、意図などを読み取るということが非常に難しく、一番大事な考察部分が今一つになってしまったことが課題の一つ挙げられる。対象者に起こった出来事や、対象者が語る言葉を主観で見ることは適しておらず、対象者との関係を良好に保ちつつ、客観的な判断ができる力が重要であると感じた。

ライフヒストリー以外のところで言うと、剣道及び竹刀に関する情報があまりにも少なかったということも課題として挙げられるだろう。たとえば竹刀の流通量などは全くデータがなかったため、対象者の方々にかつての様子や現在の竹刀製造量を尋ねたり、大手竹刀卸売会社に年間製造量を問い合わせたりし、そこからの推測をして対応した。しかし、これはあくまでも記憶を頼りにした情報であったり、企業側が主張している数量であったりするので、必ずしも正確な推測ができたとは言えない。竹刀流通量に限らず、剣道人口などの情報を残していくことは、今後の剣道に関する研究にとって非常に大きな財産となるだろう。

引用 WEB ページコピー

第一章

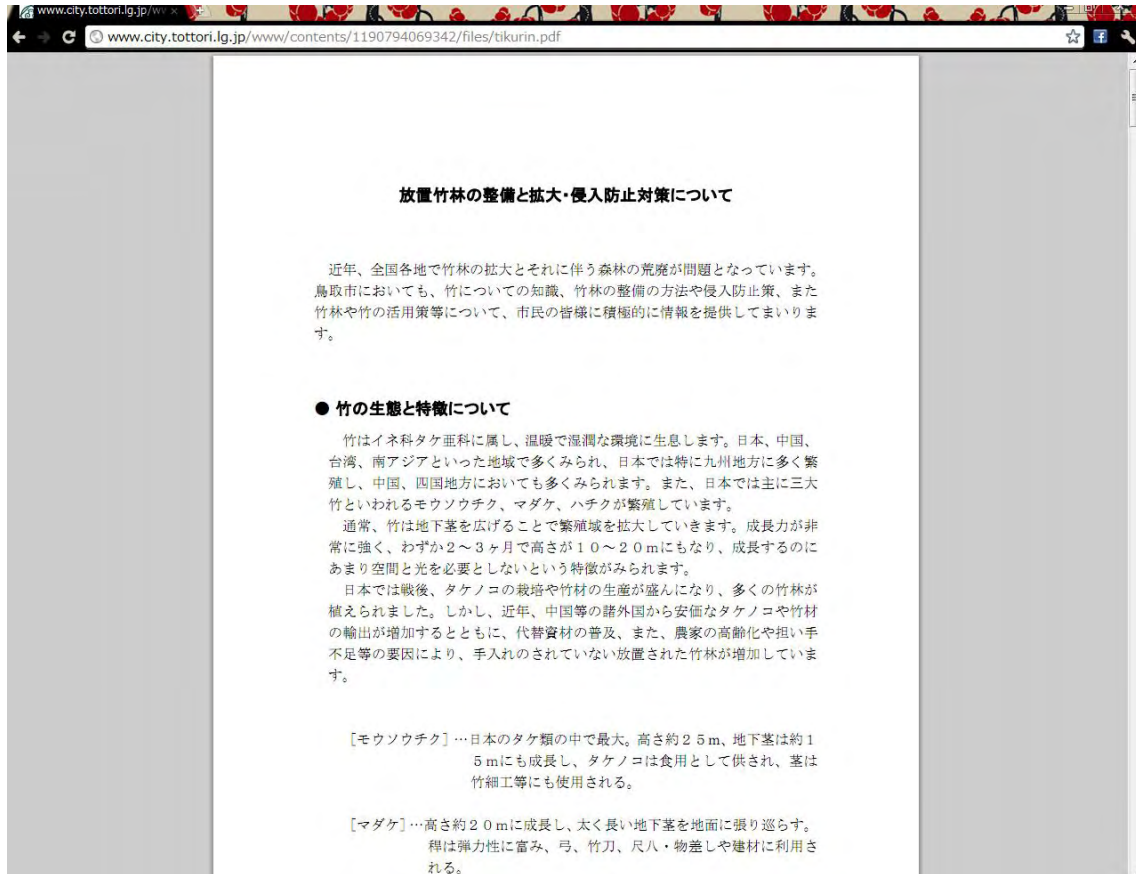
3) 香川県環境学習プログラム集 竹林を手入れしよう

<http://www.pref.kagawa.jp/kankyo/gakushu/program_7/program_7.pdf>，2011-11-30



4) 鳥取市公式ウェブサイト 放置竹林の整備と拡大・侵入防止対策について

< <http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1190794069342/files/tikurin.pdf> >, 2011-11-30



- 6) 風竹三光堂 茶せん <http://lunagate.ddo.jp/take-roman/seihin/chasen.html>, 2012-01-10

竹製品 | 伝統工芸 | 竹のこゝろ

← lunagate.ddo.jp/take-roman/seihin/chasen.html ☆



茶筴



◆ 通商産業大臣指定 ◆
◆ 伝統工芸品 ◆

国産茶筴の90%以上を占める生産地奈良高山より、
北和園 伝統工芸士 久保一郎様製作の逸品でございます。

製作者	通商産業大臣指定 伝統的工芸品 奈良県生駒市高山 茶筴組合員
	北和園 伝統工芸士 久保一郎

オンラインショップでの販売は薄茶用となります。
取扱いの種類と価格は以下の通りです。

価格
ハチホウ立(白竹・節あり) 2,500円

トップページ

店舗案内

竹製品について

製品一覧

イベント

ご注文方法

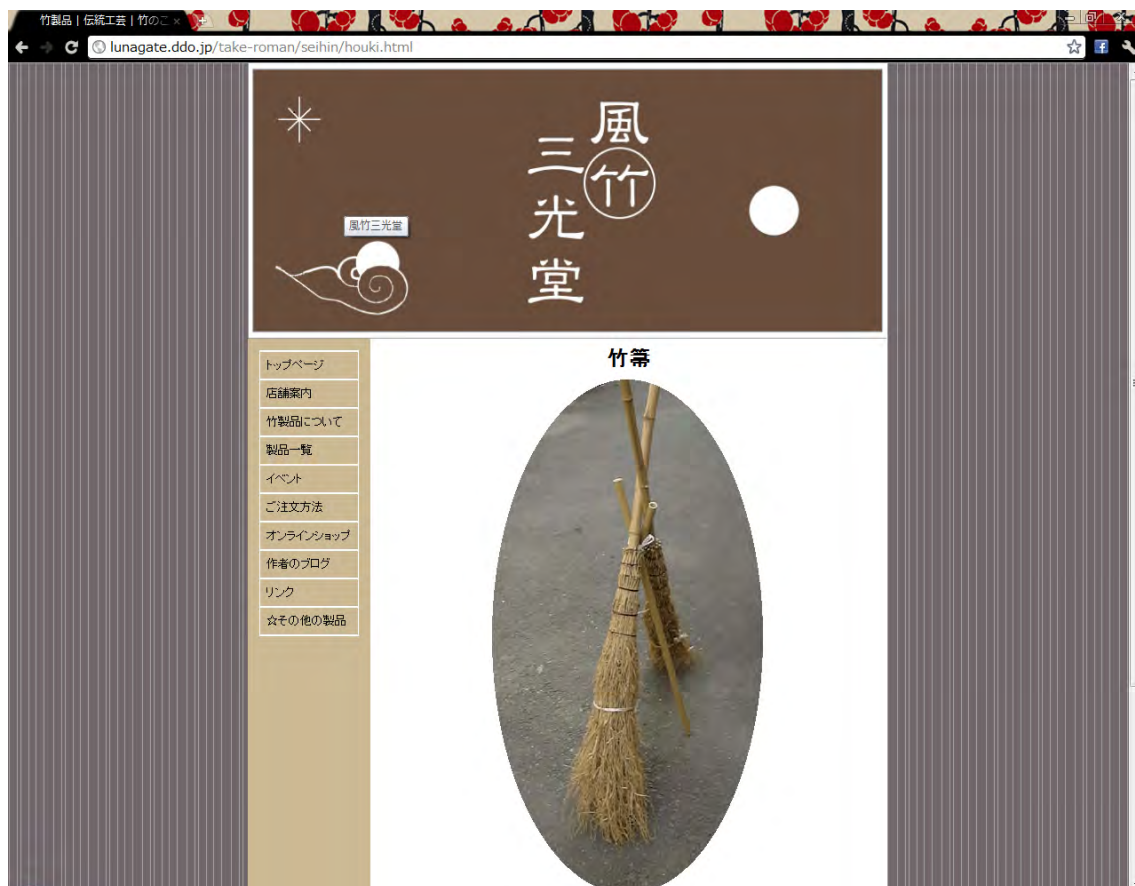
オンラインショップ

作者のブログ

リンク

☆その他の製品

7) 風竹三光堂 竹箒<<http://lunagate.ddo.jp/take-roman/seihin/houki.html>>, 2012-01-10



- 10) 剣道防具工房「源」 竹刀の各部名称 < http://kendokyoto.com/shop_item/kendo_shinai.html > ,
2011-12-08



- 11) のうほう!【初めて】竹刀の選び方<http://www.know-how.jp/martialarts/628/>, 2012-01-13

【初めて】竹刀の選び方

www.know-how.jp/martialarts/628/

みんなで作る趣味のノウハウサイト
のうほう!
Know-how for your hobby life!

みんなで作る趣味のノウハウ共有サイト「のうほう!」へようこそ。投稿をお待ちしております!!

サイト内検索 ウェブ検索

ホーム カテゴリー 記事を書く お買い物

「のうほう!」top > 武道・武術 > 剣道 > 【初めて】竹刀の選び方

Ads by Google Blue Flowers Space Blue Nissan Note Doctors Note

【初めて】竹刀の選び方

公開日:2011年02月02日 03時47分
投稿者:funaballさん
カテゴリ:剣道, 武道・武術
キーワード:剣道, 剣術, 武道, 武術, 竹刀, 選び方

出発直前からGWまで好評受付中! 憧れの水上ヴィラ宿泊ツアーも満載
www.jtb.jp/jp

Ads by Google

Twitter mini チェック クリック いいね!



■初めて使う竹刀の選び方は?

試合規則には、竹刀の長さや重さが決められています。
初心者か初めて竹刀を購入する場合は、下記を目安にすると良いでしょう。

長さ...床から臍の下に収まる程度(長い場合は切って詰める。)

スポンサー

年収400~800万円
転職成功者続出!

詳しくはこちら

en 日本最大級の転職支援サイト
社会人の転職情報

のうほう! Wiki検索β

Wiki検索: 検索

ようこそゲストさん! ログインしてください。

ログインはこちら
ユーザー登録はこちら

好評につき期間延長!

趣味の記事を書いて共有してみませんか?

記事採用ごとに
もれなくAmazonギフト券☆

12) 滋賀県ホームページ 滋賀県の伝統的工芸品について

< <http://www.pref.shiga.jp/kakuka/f/chushoukigyo/kougeihin/kougeihin.html> >, 2011-11-30



滋賀県
Shiga Prefecture

トップページ | テーマから探す | サイトマップ |
サイト内検索

ホーム > 組織から探す > 産業振興課 > 滋賀県の伝統的工芸品について

更新日: 2011年3月11日

滋賀県の伝統的工芸品について

長い歴史の中で培われ、地域の人々の生活と密着しながら受け継がれてきた工芸品を、滋賀県知事、経済産業大臣が伝統的工芸品として指定しています。
< 経済産業大臣指定 3品目 県知事指定 39品目 合計 42品目 >

[PDF](#) パンフレット【伝統的工芸品一覧表】(PDF:1.618KB)
[PDF](#) パンフレット【県知事指定品1/3】(PDF:1.915KB)
[PDF](#) パンフレット【県知事指定品2/3】(PDF:1.879KB)
[PDF](#) パンフレット【県知事指定品3/3】(PDF:2.320KB)
[PDF](#) パンフレット【経済産業大臣指定品】(PDF:1.788KB)

知事指定滋賀県伝統的工芸品

伝統的工芸品の振興を図るため、「滋賀県伝統的工芸品指定要綱」に基づき、知事が指定するもので、次の要件を満足することが必要です。

- 1 主として日常生活に使われるもの
- 2 製造工程の主要部分が手工業的であるもの
- 3 伝統的な技術または技法により製造されるもの
- 4 伝統的に使用されてきた原材料を主たる原材料として用いられ製造されるもの

現在、39品目、46製造者の方が指定を受けています。

経済産業大臣指定伝統的工芸品

昭和49年5月に制定された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき経済産業大臣が指定するもので、次の要件を満足することが必要です。

- 1 主として日常生活に使われるもの
- 2 製造工程の主要部分が手工業的であるもの
- 3 伝統的な技術または技法により製造されるもの
- 4 伝統的に使用されてきた原材料を主たる原材料として用いられ製造されるもの

18), 22)~27) サイエンスチャンネル 番組紹介 (237)竹刀ができるまで

< http://sc-smn.jst.go.jp/8/bangumi.asp?i_renban_code=237&i_series_code=B070601 >, 2012-01-17

The screenshot shows the Science Channel website interface. The top navigation bar includes links for HOME, 番組表 (Program Schedule), 視聴方法 (Viewing Method), サイエンス チャンネルとは (About Science Channel), CATV局の方へ (To CATV Stations), 教育機関の方へ (To Educational Institutions), アンケート (Survey), and はじめての方へ (For New Users). The left sidebar features a 'TIME TABLE 今日番組表' (Today's Program Schedule) with a list of programs and their start times. Below this is a search bar and a section for '50音で探す' (Search by 50 sounds) and 'カテゴリーで探す' (Search by category). The main content area is titled '番組紹介' (Program Introduction) and displays details for 'THE MAKING (237) 竹刀ができるまで' (Bamboo Sword Making). The program description states that it shows the process of making a bamboo sword using modern technology. The '出演者名・所属機関名および協力機関名' (Cast, Affiliated Institutions, and Collaborating Institutions) section lists '西野竹刀製作所' (Nishino Bamboo Sword Making Studio). The '番組に関する情報' (Information about the program) section is also present. On the right side of the program details, there are three video player options: 'PLAY 1.5Mbps', 'PLAY 1.5Mbps', and 'PLAY 512kbps'. The bottom of the page contains a copyright notice for the Japan Science and Technology Agency (JST).

第三章

2), 3), 18), 20) 全日本剣道連盟ホームページ 剣道の歴史<<http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html>
>, 2012-01-14

The screenshot shows the homepage of the All Japan Kendo Federation (All Japan Kendo Federation). The page is in Japanese and features a navigation menu with links to various sections including '大会・審査会' (Tournaments/Judging), '行事予定' (Event Schedule), '剣道について' (About Kendo), '画像・動画' (Images/Videos), '寄稿! まで!' (Guest Posts!), 'ダウンロード' (Download), and '通信販売' (Sales). The main content area is titled '剣道について' (About Kendo) and includes a sub-section '歴史' (History). The text describes the origins of kendo, its development from ancient times to the present, and the role of the federation in promoting the sport. It mentions the importance of kendo as a martial art and its cultural significance in Japan.

21) 全日本剣道連盟ホームページ 寄稿「まど」平成20年5月号

<http://www.kendo.or.jp/column/250.html>, 2012-01-14

The screenshot shows the homepage of the All Japan Kendo Federation (All Japan Kendo Federation). The main navigation bar includes links to '大会・審査会', '行事予定', '剣道について', '画像・動画', '寄稿「まど」', 'ダウンロード', and '通信販売'. The '寄稿「まど」' link is highlighted. Below the navigation bar, there is a breadcrumb trail: 'HOME > 今月の「まど」 > 過去の「まど」一覧 > 過去の「まど」第250回'. The main content area is titled '寄稿「まど」' and '過去の「まど」'. The article is dated '平成20年05月号 第250回' and is written by '全剣連会長 武安義光'. The text discusses the challenges of balancing kendo with work and family life, and mentions the upcoming 56th All Japan Kendo Championship in Osaka. A sidebar on the left contains links to '今月の「まど」', '過去の「まど」一覧', and '過去の「まど」'.

全日本剣道連盟
All Japan Kendo Federation

International Information HOME

大会・審査会 行事予定 剣道について 画像・動画 寄稿「まど」 ダウンロード 通信販売

HOME > 今月の「まど」 > 過去の「まど」一覧 > 過去の「まど」第250回

寄稿「まど」

過去の「まど」

今月の「まど」

過去の「まど」一覧

過去の「まど」

平成20年05月号 第250回

全剣連会長 武安義光

4月は進学、就職、転勤など職場・学校での立場の変動の多い時期です。定年など仕事を離れたり、転職して人生の節目に立つ方も多くおられます。心機一転充実した人生の構築に立ち向かって頂きたいものです。この際生涯修業の剣道も忘れずに生活に取り入れること。また生活の変化から遠ざからざるを得ない方も、復活の日に備え技術の温存に心掛け、一生の財産となる剣道を大事にすることが望めます。

さて春は強豪が火花を散らす4月20日の名古屋での第6回全日本選抜剣道八段優勝大会で幕を開けます。多くの方のご光臨をお待ちします。

一連の大阪・京都での行事目前に

年度初めの各剣連の総力戦である4月29日の第56回全日本都道府県対抗剣道優勝大会は、新年度を飾る歴史ある大会です。大阪市中央体育館では力が入った試合が行われることでしょう。

京都に移っての第104回全日本剣道演武大会には、3,200名の剣士が全国から集い、1年間の精進の成果を示し合い、交流を深めるお祭りになります。教士七段の方のうち剣道初日の3日に演武を希望する方が毎年増え今回は400名を超えました。ゴールデンウィークを活用しようという方が増えている世相を反映しています。剣道の部の組み合わせは本誌に掲載されていますが、熱戦が展開されます。

6千名を超える方が挑戦する一連の初夏の審査会

厳しい剣道審査会が京都市西京極の京都市立体育館で4日にわたり行われます。京都での七・六段受審者はそれぞれ1千名余りで前年並みですが、5月10、11の両日の名古屋市枇杷島スポーツセンターでの挑戦者はいずれも増加、特に七段は15%増加の1,400名になりました。

27) 米原市ホームページ 人口の推移

<http://www.city.maibara.lg.jp/index.php?oid=80&dtype=1006&pid=56> , 2012-01-13

人口の推移

www.city.maibara.lg.jp/index.php?oid=80&dtype=1006&pid=56

米原市
THE OFFICIAL WEBSITE OF MAIBARA CITY

総合案内 市民の声 市政の未来 市政広報 暮らし 教育文化 スポーツ 観光・防災 市民会

Q&A よくある質問 みんなの掲示板 各種一覧 リンク集 サイトマップ お問い合わせ 検索文字を入力

トップ>>まちの姿>>統計データ>>

人口の推移

国勢調査における人口の推移(人)

調査実施年	山東地域	伊吹地域	米原地域	近江地域	米原市全体
昭和35年(1960)	12,569	7,412	13,936	8,297	42,214
昭和40年(1965)	12,087	6,742	13,415	8,107	40,351
昭和45年(1970)	11,711	6,587	12,879	7,951	39,128
昭和50年(1975)	11,981	6,513	12,845	7,933	39,272
昭和55年(1980)	12,275	6,354	12,633	8,073	39,335
昭和60年(1985)	12,509	6,305	12,771	8,154	39,739
平成2年(1990)	12,487	6,155	12,536	8,422	39,600
平成7年(1995)	13,034	6,041	12,520	8,962	40,557
平成12年(2000)	13,421	5,959	12,479	9,392	41,251
平成17年(2005)	13,412	5,685	12,103	9,809	41,009
平成22年(2010)	12,869	5,518	11,450	10,222	40,060

国勢調査(調査基準日10月1日、5年に1回実施)による

担当:広報秘書課(米原庁舎)
TEL 0749-52-6627
問い合わせはこちら

Copyright © 2005, Maibara-City Office, All rights reserved.

サイトポリシーについて / 個人情報取扱いについて
米原市情報セキュリティポリシーについて
色の区別がつきにくい方はカラーバリエーションをご利用ください。
■滋賀県米原市役所 (市外局番: 0749)
米原庁舎 〒521-8501 下多良3-8 電話: 52-1551 FAX: 52-4447
山東庁舎 〒521-0292 長岡 1206 電話: 55-2040 FAX: 55-2406
伊吹庁舎 〒521-0392 春嶺 480-1 電話: 58-1121 FAX: 58-1630
近江庁舎 〒521-8601 瀬戸 488-3 電話: 52-3111 FAX: 52-4958

40) 鯖江市ホームページ 眼鏡の歴史、現状

< <http://www3.city.sabae.fukui.jp/jiman/sangyo/megane/syousai/syousai.html> > , 2011-09-16

鯖江市ホームページ - 眼鏡の歴史、現状

鯖江市 SABAÉ CITY
www.city.sabae.fukui.jp/

HOME | 暮らしの情報 | 部署紹介 | 施設紹介 | 入札情報 | よくある質問

トップページ > さばえ自慢

眼鏡の歴史・現状

鯖江・眼鏡の歴史

鯖江における眼鏡製造は、明治38年に創始者と呼ばれる増永五左衛門が農閑期の副業として、少ない初期投資で現金収入が得られる眼鏡作りに着目。当時眼鏡作りが盛んであった大原や東京から職人を招き、近在の弟子に眼鏡の製造技術を伝えたことが始まりといわれています。当初は「帳場」とよばれる各職人グループごとに眼鏡が作られていました。その帳場ごとに職人が競い、腕を磨くことで分業独立が進み、現在のようないくつか産地が形成されたのです。

戦後の高度経済成長の中で眼鏡の需要も急増し、産地として大きく成長しました。製造の自動化などにより生産効率を追求すると共に、品質の向上と技術開発に力を注ぎ、その結果、昭和50年代の終わりに、世界で始めてチタン金属を用いたメガネフレームの製造技術の確立に成功しました。軽量かつ耐久性に優れるチタンは、金属アレルギーを起こしにくい素材であることから、人体に優しい眼鏡として世界に広まっています。

鯖江・眼鏡の歴史

1905年	増永五左衛門が眼鏡製造技術を産地に持ち込む	
1914年	産業景気でも増加	
1916年	産地で初めてレンズが製造される	
1931年	金張りメッキ法による眼鏡が企業化	
1937年	金張り、セルロイド枠の生産本格化 (工場数70、工員800人、年産13万ダース規模)	
1948年	神明、立待地区に眼鏡工場増加、サングラスの本格生産が始まる	
1949年	セルロイド枠の生産全盛期	
1963年	福井県眼鏡工業組合、福井県眼鏡光器輸出協同組合設立	
1971年	輸出用統一商標「モンジュ」認定	
1973年	文殊山麓に眼鏡産地のPR看板設置	
1982年	社団法人福井県眼鏡協会設立	

50) 全日本武道具協同組合オフィシャルウェブサイト 会員一覧

<http://zenbukyo.jp/index.php?act=memberlist>, 2011-12-01

全日本武道具協同組合オフィシャルウェブサイト

zenbukyo.jp/index.php?act=memberlist&PHPSESSID=c6484e5a3cd748b37ec0337d206c401a

全日本武道具協同組合は武道具製作者・職人、材料屋、小売店からなる団体です。剣道、防具など

全日本武道具協同組合 (全武協)
All Japan Budogu Cooperative

武道で鍛える心・技・体

全武協の概要 組織図 理事紹介 会員一覧 入会案内 お問い合わせ

HOME > 会員一覧

会員一覧

東日本支部 西日本支部 九州・山口支部

■全日本武道具協同組合名簿(東日本支部)【東日本武道具商工会】【会員数 63社 平成21年11月現在】

No	屋号	代表者名	住所	TEL/FAX	業 種
1	株式会社北武	佐藤剛夫	〒060-0031 北海道札幌市中央区北1条東10-15	tel:011-222-6788 fax:011-222-6796	武道用品製造卸売業
2	有限会社やじま武道具店	富田信康	〒070-0035 北海道旭川市五条通1丁目右1号	tel:0166-23-4015 fax:0166-23-4029	武道用品小売業
3	株式会社武蔵堂	杉山良一	〒011-0946 秋田県秋田市土崎港中央5丁目11番28号	tel:018-845-1760 fax:018-846-9243	剣道用品小売業
4	村上武道具店	村上和紀	〒997-0034 山形県鶴岡市本町2丁目6番14号	tel:0235-24-1676 fax:0235-24-1676	剣道具製造武道具小売
5	有限会社井上武道具店	井上功一	〒960-0112 福島県福島市南矢野目字夜梨	tel:024-553-4589 fax:024-553-7500	武道用品小売業

組合の活動

「シール」は「ルール」

SSP 武道用具安全推進委員会

剣道用具の保存・管理 (小冊子) 先着で200部プレゼント

51) 西日本新聞 玉竜旗 「竹刀職人」会場で技披露 武道の精神伝承 この道一筋 32 年 大橋さん

< http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/photo/0729/20080729/20080729_0001.shtml > ,
2012-01-18

The screenshot shows the Nishinippon News website. At the top, there is a banner for a kendo event with the text: "東大現役合格者の4人に1人が、東進生。東進の講師を見ずに、予備校を決めてはいけません。" Below this is the Nishinippon News logo and navigation links. The main article is titled "玉竜旗 高校剣道大会" and features a photo of a kendo practitioner. The photo shows a person in a blue gi, holding a bamboo sword (shinai), standing in a kendo stance. The caption below the photo reads: "竹のしなみ具合やバランスを、熟練の目で確かめる竹刀職人の大橋正さん。29日午前、福岡市博多区のマリンメッセ福岡" Below the photo, the text reads: "玉竜旗「竹刀職人」会場で技披露 武道の精神伝承 この道一筋32年 大橋さん". On the right side of the page, there are several advertisements and news snippets, including "IT関係者必見の技術セッション", "ZERO-CUBE 1,000万円", "Running! 2012.3.4", and "ダイハツ クーザ 福岡公演".

第四章

- 1) 三菱樹脂(株)ホームページ 会社情報 沿革< <http://www.mpi.co.jp/corporate/history.html> > ,
2012-01-07

沿革

1946 長浜ゴム工業 (株) → 1952 モンサント化成工業 (株)

1958 長浜樹脂 (株) → 1958 三菱モンサント化成 (株)

1962 三菱樹脂 (株) → 1975 ダイアホイル (株)

1976 豊和産資 (株)

1983 三菱モンサント化成ビニル (株)

1985 三菱化成ビニル (株)

1992 ダイアホイルヘキスト (株)

1992 三菱油化産資 (株)

1994 三菱化学MKV (株)

1994 三菱化学産資 (株)

1998 三菱化学ポリエステルフィルム (株)

三菱樹脂 (株)

2008年4月	4社1事業の統合により三菱樹脂株式会社が発足
2008年9月	スロバキアにDia Moulding Slovakia s.r.o.を設立
2009年4月	株式会社アルポリックより製造加工事業を承継し、上田工場及び東京製造所を閉鎖
2009年6月	世界最大手のエンジニアリングプラスチック製品加工メーカーQuadrant AGと戦略的提携について合意
2009年7月	農業資材事業の国内グループ会社を統合し、MKVフィルム株式会社を発足

謝辞

本稿は、滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科における研究成果を学位論文としてまとめたものです。

研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言をいただきました方々に厚く御礼申し上げます。

まず、約 19 か月にわたってご指導いただきました滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科准教授の近藤隆二郎先生には感謝しきれません。先生のご指導がなければ、この研究を成し遂げることはできなかったと思います。

至らぬところも多々あり、何度も先生に不快な思いをさせてしまいましたが、それでも見捨てる事なく最後まで研究にお付き合いくださったこと、いつでも相談に応じてくださり、的確なアドバイスをしてくださったことで、本研究を完成させることができました。

また、研究だけでなく、就職活動などの際にもアドバイスをいただけたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

また、査読でお世話になった林宰准教授にも感謝いたします。先生には所属している剣道部の顧問としてお世話になっただけでなく、卒論においてもアドバイスをいただくことができ、剣道関連の情報を充実させることができました。本当にありがとうございました。

そして、本研究の対象者としてヒアリングを行うことを快諾してくださった竹刀職人・山口吉昭さん、元竹刀職人・池田光信さんにも心から感謝いたします。

100%あなたに協力しますと言ってくださった山口さん、卒論を読むのを楽しみにしていると言ってくださった池田さん、本当にお二人に出会えて良かったです。お二人がいなければ、この研究を仕上げることはできませんでした。

こんな私に協力してくださり、本当にありがとうございました。

加えて、ヒアリング調査にご協力下さいました(有)布施商会様、田中敏和様、伊豆田政一様と奥様、(株)正春武道具店の仙元様にも併せて感謝いたします。ありがとうございました。

研究を始めて間もない頃や、研究に行き詰った時に、優しくわかりやすいアドバイスをくださった先輩方にも感謝いたします。ありがとうございました。

また、後輩の皆さんにも感謝したいと思います。差し入れ、とても嬉しかったです。ありがとうございました。

そして、入学から 4 年間苦楽を共にしてきた環境政策・計画学科 14 期生のみなさん、特に、同じ近藤研究室の栗谷瞳子さん、武田真由子さん、辻雅人君、本間有香里さんには、

本当に感謝しています。

この研究室で、みんなと一緒に過ごせたことは私の一生の宝物です。ありがとうございました。

最後に私事にはなりますが、様々な場面で私を支えてくれた友人の皆様、これまで私に関わってくれたすべての人に感謝いたします。

また、大学まで通わせてくれて、研究で深夜遅くに家に帰っても何も言わないでくれた両親・祖母・叔母・弟・妹にも深く感謝いたします。

本当にありがとうございました。

最後にもう一度、近藤先生を始め、本研究をやりきるまで支えてくださったすべての方に感謝の意を表し、本研究を閉じたいと思います。本当にありがとうございました。

2012 年 1 月 27 日

力石真野